

最終報告書

平成21年度文部科学省大学教育充実のための
戦略的大学連携支援プログラム選定事業

乳幼児期から小学校までの育ちを見通す
地域人材の育成システム

「信州モデル」の実現



学校法人 北野学園

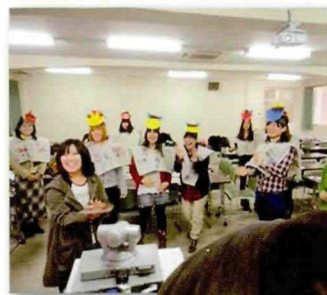
上田女子短期大学

幼児教育学科／総合文化学科



信州大学

SHINSHU UNIVERSITY



はじめに

戦略的大学連携支援運営委員会委員長
上田女子短期大学長

小 池 明

本プロジェクト「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」は2009年9月にスタートし、本年3月を以て終了する。一方、本プロジェクトの構成員である五つの機関・組織の間に於いては少なくとも10年間、文部科学省の支援が終了した後も、即ち本年4月以降も引き続いてその取り組みを継続していくことの合意が為されている。これを踏まえた上で、一つの区切りとなるこの時点でスタート以来の足取りを総括するものである。

処で、本プロジェクトが志向する「乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム「信州モデル」の実現」に就いては、上田女子短期大学と信州大学が、それぞれの大学がこれまで地域に根ざして実践してきた処の主として「教育」に関わる知見を持ち寄り、連携することによって相乗的効果を発揮しつつ、本来の教育事業・活動の質の向上は固より、併行して地域固有の問題の解決に寄与できる研究や活動を行うことで、それを実現していくというものである。教育県の伝統を持つ我が長野県に於いて、乳幼児が小学校に入学し、その移行教育の過程、時期を円滑且つ実りあるものとするための教員始め関連する人材の育成、そこには地域の一般人も教育に関して責任を共有するとの認識の下に、その質を上げるという遠大な理念に基づいている。

現代は、核家族化、少子化、情報社会化という趨勢を背景に、「教育」を取り巻く状況が様々な面で往時とは一変していると言っても過言ではない。更には、地方の都市化、過疎化などが跛行的に混在し、国際化などの要因も加わって派生する問題の複雑化、解決の困難化を来している。幼少児に対する育児、教育に就いては特に虐待や発達障害などが顕在化する世相と相俟って、処方箋としても教育の質の維持、向上が一層求められている。そして、これらを担保する施策としては教員だけでは留まらない人的資質の向上、地域全体の理解と取り組みが必須である。当然、地域固有の問題のファクトファインディングと共にそれらの解決手法を見いだしていく為にも、教育事業の実施当事者である幼・保・小学校などの現場や自治体との情報交換に加え、連携しての対処、実行が不可欠である。そのような認識に基づいて、我々は様々な取り組みを行ってきた。当初、描いていた基本計画に沿って、概ね所期の構想通りの実行ができたと考えているが、勿論、取り組みを始めたことによって新たな事実認識とともに方向を修正したものもある。

その活動内容、実績に就いての詳細は、報告の各論に委ねたいが、この2年半の間に新たに知見を積み上げることができたばかりでなく、両大学間に於いて一層親密な研究交流や教育の体制が構築された。その成果として地域にも一定の還元ができたばかりでなく、双方の学生自身にもその効果、恩恵が及ぶ洵に喜ばしい結果となった。改めて、プロジェクトに直接関わったメンバー諸氏が作り上げた実績に満腔の敬意と感謝を申し上げたい。更に、そのメンバーを本プロジェクトの趣旨に沿って活動を支援し支えて戴いたそれぞれの母体組織、調査などに協力して戴いた関係諸機関の方がた、そしてGPを承認し資金面で大きな支えとなって戴いた文科省への感謝も強調し過ぎることはない。

本プロジェクトは、これからも継続する。寧ろ、この2年半は10年間のプロジェクト期間の基礎形成期間と位置づけても良いかと考える。即ち、「教育」は長い時間を経なければその正否や成果が確認できないものであり、而も、その時々時代の状況は前進、後退を含めて変化することが付きものである。そのためにこれからも所期の目的を完遂すべくプロジェクト当事者は一層の協力と精励を続ける責務がある。我々が教育の本質を追究し、研究を発展、深化させることによって地元は固より広く社会にその成果を還元できる存在となれることを引き続き願って已まない。

はじめに

戦略的大学連携支援運営委員会副委員長
信州大学理事・副学長

赤羽 貞幸

平成21年9月に文部科学省の「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」のひとつとして選定されました『乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム「信州モデル」の実現』の本事業も最終年度を迎え、3年間の成果をとりまとめた最終報告書が発刊されることとなりました。

保育者養成課程を有する上田女子短期大学と小学校教員の養成課程を有する信州大学教育学部が連携して上記のテーマを掲げ、地域の保育や教育現場で活躍する人材の育成を図るべく各種の取り組みを実施してきました。3年間の連携事業を推進するスタートでは、平成21年に両大学及び信州産学官連携機構、長野市、上田市とにおいて本プログラムの共同実施に関する連携協定が締結され、平成23年には上田女子短期大学と信州大学教育学部において単位互換協定が締結されました。この間の継続的な取り組みによって両大学における連携の基盤は一層強固となり、さまざまな事業が実施されてきました。

これらの主な取り組みは、関連する各種フォーラムへの参加、先進的事例の視察、オンラインビデオ会議システムの活用、FD・SD合同学習会の開催（5回）、学生フォーラムの開催、卒業生を対象としたワークショップの開催、子育て支援事業への共同参加、子育て支援シンポジウムの開催、大学主催の子育て支援イベントへの共同参加（信州大学教育学部主催の幼児キャンプ教室への上田女子短期大学教員・学生の参加）、地域の子育て支援イベントへの共同参加、地域で求められる保育者像についてのニーズ調査報告書の配布、単位互換授業の実施、学生による実習の相互参観、相互乗り入れ事業の実施、学生フォーラム「実習を語ろう！」の開催など多彩でした。これらの詳細な内容は本報告に盛り込まれています。

これら本報告の成果が、乳幼児期から小学校までの育ちを見通し、子育てや教育をめぐる現代的な課題に対応しつつ地域における個別教育支援を担うことができる保育者や小学校教員の育成に大きな力となることを願っております。

最後に、3年間にわたって本事業に関わってご尽力いただいた両大学の関係者ならびに上田市・長野市の関係者に深く感謝申し上げます。また、この3年間の連携事業が大きな成果をあげるとともに、この事業の実施によって両大学が組織的にも人的にもつながりが密となり、これを契機に今後さらなる新しい展開が生まれることを期待しております。

最終報告書 目次

はじめに	1
第1章 取組の概要	5
1 取組の趣旨・目的	5
2 必要性和社会的背景	5
3 取組により得られる成果	6
第2章 取組の内容・実施体制	7
1 取組の三つの柱	7
2 実施体制	8
3 各大学及び関係自治体等の役割	8
4 年次計画	9
第3章 活動報告	10
1 平成21年度大学改革推進等補助金(大学改革推進事業)調書	10
2 平成22年度大学改革推進等補助金(大学改革推進事業)調書	14
3 平成23年度大学改革推進等補助金(大学改革推進事業)調書	19
4 具体的取組報告	24
(1) フォーラム等への参加	
高等教育コンソーシアム信州第1回FDフォーラム 視察等報告書	24
大学院GP国際フォーラム 視察等報告書	25
多文化協働実践研究全国フォーラム 視察等報告書	26
山形大学FDシンポジウム 視察等報告書	27
大学教育改革プログラム合同フォーラム(H21年度) 視察等報告書	28
東北文教大学短期大学部GPフォーラム 視察等報告書	29
高等教育コンソーシアム信州第3回FDフォーラム 視察等報告書	30
大学教育改革プログラム合同フォーラム(H22年度) 視察等報告書	31
高等教育コンソーシアム信州第5回FDフォーラム 視察等報告書	32
高等教育コンソーシアム熊本 視察等報告書	33
(2) 先進的事例の視察	
山梨学院大学附属小学校 視察等報告書	35
郡山敬愛幼稚園 視察等報告書	36
さくらんぼ保育園 視察等報告書	37
名古屋大学・三重大学 視察等報告書	39
子育て先進地への視察(ノルウェー、フランス) 視察等報告書	40
外国籍児童等支援事業の視察 視察等報告書	42
関西学院聖和幼稚園 視察等報告書	44

(3) 学会等での成果発表	
臨床教育人間学会カンファレンス 成果発表報告書	45
イギリス教育哲学会ポスター発表 成果発表報告書	46
全国保育士養成協議会研究大会 成果発表報告書	48
The Asian Conference on Education 成果発表報告書	50
(4) 教材・カリキュラム開発部会	
オンラインビデオ会議システムの活用 取組報告書	51
単位互換授業・相互乗入授業の実施 取組報告書	53
学生による実習の相互参観 取組報告書	55
教員による実習の相互参観、実習の評価基準の作成 取組報告書	57
保・幼・小連携共同モデル・コア・カリキュラムの検討 取組報告書	59
(5) FD・SD部会	
第1回FD・SD合同学習会の開催 取組報告書	61
第1回学生フォーラム 取組報告書	66
卒業生を対象としたワークショップの開催 取組報告書	85
第2回FD・SD合同学習会の開催 取組報告書	87
第3回FD・SD合同学習会 取組報告書	98
木育プレワークショップ 取組報告書	102
第4回FD・SD合同学習会 取組報告書	107
(6) 地域連携部会	
子育て支援事業への共同参加(わくわくファミリーフェスタ) 取組報告書	117
地域貢献事業の共同実施(幼児キャンプ・どんぐり広場) 取組報告書	128
子育て支援シンポジウムの開催 取組報告書	136
ニーズ調査の実施 取組報告書	145
(7) 自己点検評価・外部評価の実施	
自己点検評価・外部評価の実施 取組報告書	147
5 会議等開催記録	149
6 出張一覧	150
7 活動記録	153

資料	155
1 広報用パンフレット	155
2 WEBサイトトップページ	160
3 新聞等掲載記事	161
4 実施体制名簿	165
おわりに	167

第1章 取組の概要

1 取組の趣旨・目的

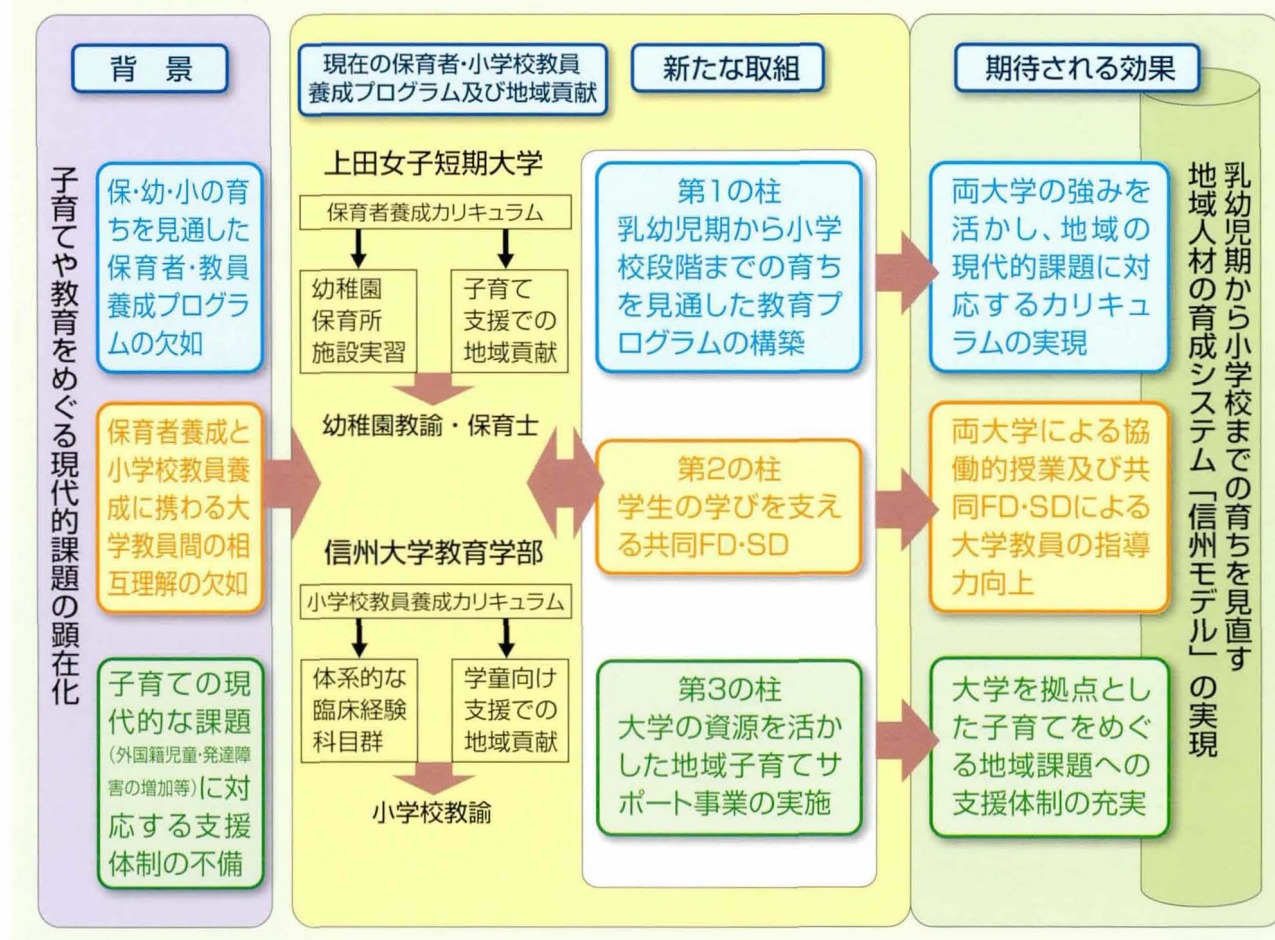
本連携取組は、幼稚園教員及び保育士（以下「保育者」とする）養成校である上田女子短期大学と、小学校教員の養成課程を有する信州大学教育学部とが連携して共同の教育プログラムを構築することにより、乳幼児期から小学校までの育ちを見通し、現代的課題に対応しつつ地域における個別教育支援を担うことができる保育者・小学校教員を育成することを目的とする。

2 必要性和社会的背景

【子育てや教育をめぐる現代的課題の顕在化】

近年、家庭生活の変化・多様化により、子育てや教育をめぐる現代社会特有の問題が顕在化している。とりわけ、①対人関係がうまく築けない高機能自閉症やLD、ADHD等の発達障害の子ども、②両親が外国籍、または本人が帰国子女であるために言語・文化的コンフリクトの問題を抱える子どもの数は全国的に増加しており、平成20年度から、特にこの二つの問題を抱える子どもを対象とする文部科学省の「発達障害早期総合支援モデル事業」や「定住外国人子ども緊急支援プラン」の実施がそれぞれ発表されるなど、各地域における緊急の対策が求められている。（図1）

図1 連携事業の概要



【保・幼・小・地域連携の必要性】

発達障害児と外国籍児童とでは、背景となる家庭の事情や養育上の問題は当然異なるが、これらの子どもにとって集団生活への適応が大きな課題であることは共通しており、家庭・地域での育ちから保育所・幼稚園への就園へ、保育所・幼稚園から小学校就学への接続が問題となる。

しかし、現在の保育者養成カリキュラムでは、小学校以上の段階における学習上の問題が十分に扱われず、他方、小学校教員養成カリキュラムでは、地域における児童福祉や療育、乳幼児期の子育て支援に関する理解が十分とは言えない。保育者・小学校教員が、施設の種別を超えて子どものニーズに対する理解を共有し、連携して問題解決にあたるための基盤として、幼児期から児童期までの育ちを見通した共同の教育プログラムの構築が欠かせない。また、保護者に対する継続的な支援も必要となることから、地域のさまざまなネットワークや福祉資源を活用して、多角的にアプローチするコーディネート力をいかに養成するかが課題となる。

【長野県東北信地域の現状】

長野市及び上田市を中心とする長野県東北信地域においても、増加する発達障害児への支援体制の確立が急がれている。特に外国籍住民の集住地域である上田市では、公立保育園の約半数、私立保育園の7割に外国籍児が在籍しており、就学前の親子への支援の充実が喫緊の課題である。

長野県の地域的な特徴として、幼稚園在園児数よりも保育所在籍児数の方が圧倒的に多いことや、公立幼稚園数が少ないことが知られている（平成20年度学校基本調査では、県内の小学校第一学年児童数に対する幼稚園修了者の比率は23.1%）。私立小学校は長野市に1校あるのみで、地域の殆どの子どもが公立小学校に通う。これらの特徴から、地域で育つ子どもを支えるには幼－小連携ばかりでなく、保育所保育士と公立小学校教員との連携をも視野に入れて、戦略的に人材育成を行う必要がある。卒業生の多くが地元の保育所に就職する上田女子短期大学幼児教育学科と、県内唯一の小学校教員の養成課程を有する信州大学教育学部は、ともに地域の子どもの育ちに携わる専門職者を養成する大学として理念を共有し、密接な連携によって地域のニーズに応答することが求められる。

③ 取組により得られる成果

本連携取組において、乳幼児期の子育て支援や児童福祉関係の領域に強い上田女子短期大学幼児教育学科と、小学校以上の教育や国際理解教育の領域に強い信州大学教育学部の特徴を活かした連携により、人的資源を有効に活用してカリキュラムの内容を相互に補完できる。また、外国籍児支援に課題を抱える上田市との連携実績を有する上田女子短期大学が中心となり連携を取り持つことで、地域の具体的ニーズを反映した人材育成プログラムの構築ができ、子どもの育ちを見通し、地域資源の活用・コーディネート力を持つ保育者及び小学校教員の育成が望める。

本連携取組による教育を受けた学生が、卒業後、地元の保育者・小学校教員として就職し、さまざまな課題を持つ子どもへの支援をコーディネートすることが期待される。長期的展望として、両大学から輩出される人材が地域の保育・教育現場に根付くことにより、施設種別や官・民を越えた支援ネットワークが拡がり、子どもを取り巻く保育・教育・福祉・保健・医療等の領域を隔てる障壁を低め、地域全体を「支えあう共同体」として活性化することができる。

第2章

取組の内容・実施体制

1 取組の三つの柱

本事業における取組内容は次の三つの柱から成る。

【第一の柱：乳幼児期から小学校段階までの育ちを見通した教育プログラムの構築】

- (1) 上田女子短期大学と信州大学教育学部との間での遠隔授業聴講システムの設置
- (2) 両大学間での単位互換制度の構築
- (3) 両大学間で開講する保育・福祉系科目、小学校教員養成に関わる科目等における相互乗入の導入（遠隔授業システムを利用したチーム・ティーチング、合同ケース・メソッド授業等）
- (4) 教育実習の相互参観及び実習リフレクション方法の共同開発・実施
- (5) 現代的課題を含むケース教材及びPBL授業等の共同開発・実施
- (6) 保・幼・小連携を見据えたモデル・コア・カリキュラムの検討

【第二の柱：学生の学びを支える共同FD・SD】

- (1) 保育・教育現場における現代的課題への対応事例の合同学習会の開催
- (2) 卒後1－2年目の現職保育者・教員を対象としたワークショップの開催
- (3) 卒業生の需要サイド（地域の保育所・幼稚園長、小学校長、教育委員会）を対象とした、卒業生の力量に対するニーズ・満足度調査、生涯を通じたキャリア形成についての意識調査
- (4) 両大学教員及び附属校教員による、学生の実習に関する客観的評価基準の作成
- (5) 両大学の学生による共同フォーラム・シンポジウムの開催
- (6) 幼児教育、地域に根ざした子育て支援事業の先進事例を学ぶための海外視察・研修

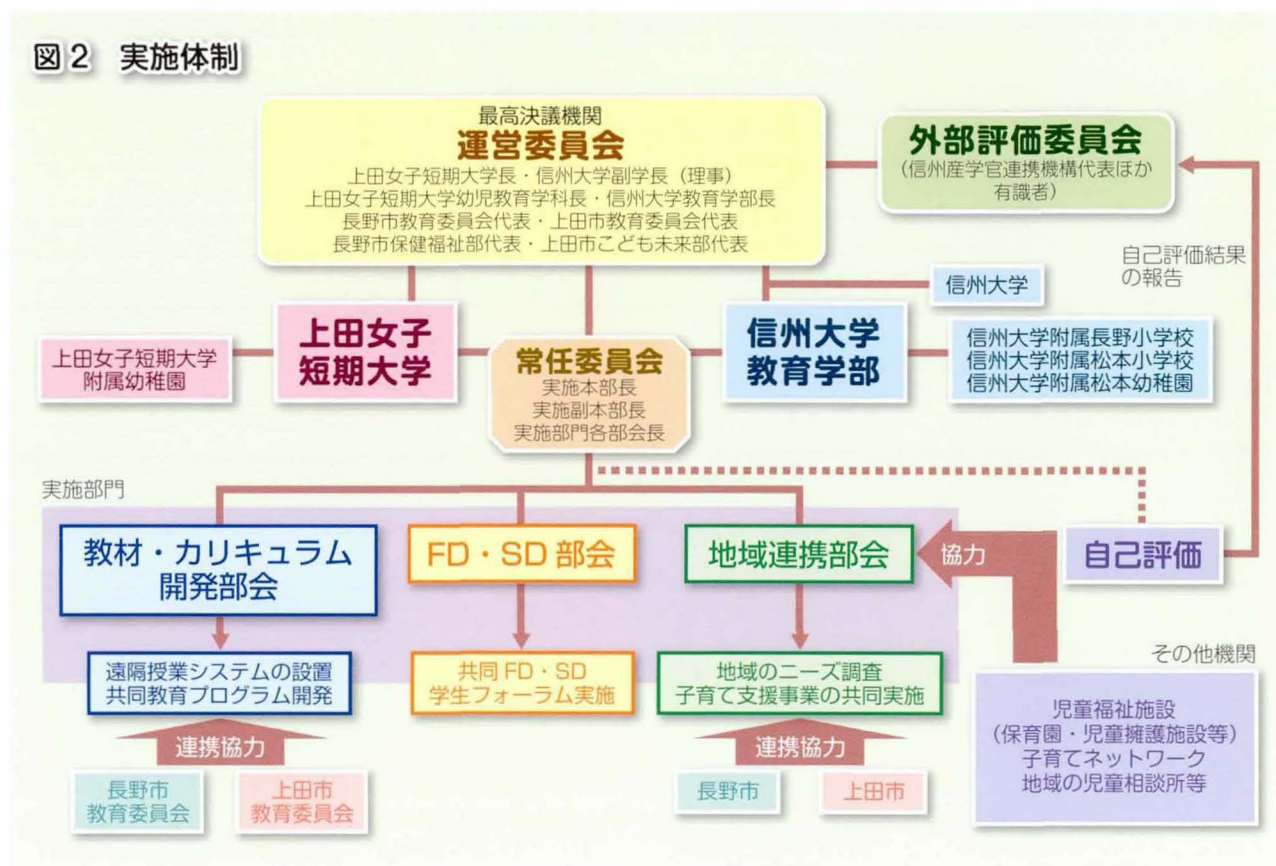
【第三の柱：大学の資源を活かした地域子育てサポート事業の実施】

- (1) 上田市・長野市在住の保護者を対象としたニーズ調査・満足度調査の実施
- (2) 上田市及び長野市の子育て支援事業への見学・参加・支援
- (3) 両大学における地域貢献事業（上田女子短期大学における子育て広場、信州大学におけるフレンドシップ事業、野外キャンプ等）の共同実施
- (4) 自治体及び地域の児童福祉・保健・医療関係機関、ボランティア、NPO等の代表によるフォーラム、シンポジウムの開催
- (5) 上田市の国際交流協議会や外国籍児童のための日本語教室等との連携、活動への共同参画
- (6) 信州大学大学院教育学研究科心理教育相談室との連携による相談事業の実施

2 実施体制

上田女子短期大学長・信州大学副学長及び関係機関の長によって構成される「運営委員会」を最高議決機関とし、その下に事業の運営を司る「常任委員会」を置く。常任委員会は、両大学から選出された事業実施責任者（実施本部長・副本部長）、各実施部門の部会長によって構成される。実施部門として「教材・カリキュラム開発部会」「FD・SD部会」「地域連携部会」の3部会を置き、運営計画に基づき両大学の学科及び学部すべての教員の参加のもと事業が実施される（図2）。

図2 実施体制



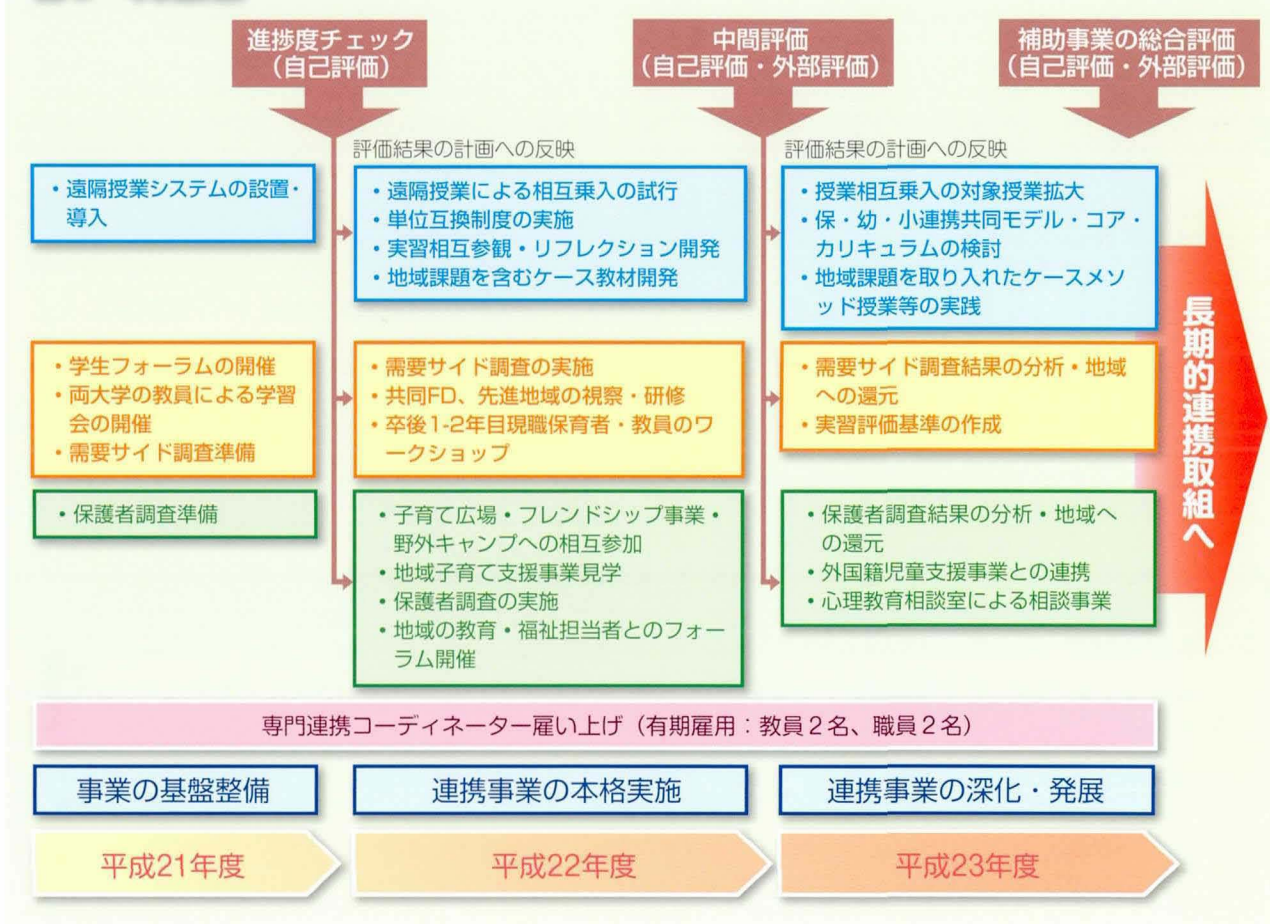
3 各大学及び関係自治体等の役割

- 上田女子短期大学：連携事業のうち乳幼児期の子育て支援、幼児教育・保育に関する分野において、幼児教育学科教員の専門性を活かして事業に関わる。
- 信州大学教育学部：連携事業のうち小学校以上の段階における教育に関する分野において、教員の専門性を活かして事業に関わる。特に、発達障害児の支援に関しては教育学・心理学関係教員、外国籍児の支援に関しては国際理解教育関係教員が主導的な役割を果たす。
- 上田市・上田市教育委員会及び長野市・長野市教育委員会：地域の保護者への調査等への協力及び地域の子育てに関する情報提供、施設提供等の面で事業に積極的に関わる。地域の実情を踏まえ、地域の保育・教育に携わる人材に期待する資質・能力について具体的に提案するなど、教育プログラムの構築へも参与する。
- 信州産学官連携機構：連携取組の外部評価に関わる。機構の組織を通じ、保育者養成課程を有する県内の短期大学（清泉女学院短期大学、長野県短期大学、飯田女子短期大学、信州豊南短期大学、長野女子短期大学、松本短期大学）に教育プログラムに関する評価協力を依頼する。

4 年次計画

補助期間中（3年間）の年次計画（図3）

図3 年次計画



【財政的措置】

補助期間終了後も、整備したネットワークシステムを利用し、遠隔授業及び授業の相互乗入を継続するほか、学生の交流・相互参加を含む事業については必要な経費を各大学で予算化し継続実施する。地域との新たな連携事業については学内競争的資金等を活用し、従来行なってきた地域貢献事業に加えて継続的な実施をめざす。連携コーディネーターは3年の有期雇用の計画であるが、補助期間終了後も必要な場合には、上田女子短期大学教員としての継続雇用を検討する。

【中長期的展望】

輩出した人材に対する継続的なリカレント教育の実施や、大学を拠点とする地域課題の情報交換の場の創出により、東北信地域においてのアウトリーチによる顔の見える実質的な連携協力の実例を積み上げ、地域との連携を深める（連携の深化）。

また、本取組をモデルとした連携を県内各地に広めるため、開発したケース教材やモデル・コア・カリキュラムは、県内の保育者養成校が利用・検証可能なようにホームページ等で広く公開する。地域の課題を吸い上げるシステム作りなど他地域にも適用可能な連携ノウハウを積極的に情報発信するとともに、地域の実情に合った連携システムの「リゾーム型」の拡大をめざし、定期的に研究会やフォーラムを開きサポートする（連携の拡大）。

第3章 活動報告

Ⅲ 平成21年度大学改革推進等補助金(大学改革推進事業) 調書

1. 大学等名／設置者名	上田女子短期大学／学校法人北野学園
2. プログラム名	大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム
3. 取組名称	乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム「信州モデル」の実現
4. 選定年度	平成21年度
5. 取組代表者／取組担当者	(所属部局・職名・氏名) 取組代表者 学 長 松田 幸子 取組担当者 幼児教育学科・准教授 小川 史
6. 事務担当者 主担当、副担当を必ず2名記載して下さい。	主担当 (所属部局・職名・氏名) 教務課・課長 塚田 穂敬 TEL 0268-38-2352 FAX 0268-38-7315 E-mail tsukada@uedawjc.ac.jp
	副担当 事務局 次長 小西 朋道 TEL 0268-38-2352 FAX 0268-38-7315 E-mail konishi@uedawjc.ac.jp
7. 選定取組の概要(400字以内)	<p>平成21年度大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラムで選定された「乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム『信州モデル』の実現」は、集団生活への適応が困難な発達障害児、外国籍児童等の増加を背景として、保・幼・小連携に基づく支援を担う保育者・小学校教員を育成するため、保育者養成課程を有する上田女子短期大学と、小学校教員の養成課程を有する信州大学教育学部が連携して教育プログラムを構築し、地域人材の育成を図るものである。①乳幼児期から小学校段階までの育ちを見通した教育プログラムの構築、②学生の学びを支える共同FD・SD、③大学の資源を活かした地域子育てサポート事業の実施 の三つの柱により育成された人材が、子育ての現代的ニーズに応じた支援をコーディネートし、官・民を越えた地域共同体ネットワークシステムを産み出すプロセスを「信州モデル」とし、県内各地域への普及促進を目指す。 【399字】</p>
8. 補助事業の目的・必要性	(1) 全体 本補助事業の全体の目的は、幼稚園教員及び保育士(以下「保育者」とする)養成校である上田女子短期大学と、小学校教員の養成課程を有する信州大学教育学部及び地域自治体等(上田市、上田市教育委員会、長野市、長野市教育委員会)が連携して共同の教育プログラムを構築することにより、乳幼児

期から小学校までの育ちを見通し、現代的課題に対応しつつ地域における個別教育支援を担うことができる保育者・小学校教員を育成することである。

この事業を行う必要があるのは、近年、家庭生活の変化・多様化により、子育てや教育をめぐる現代社会特有の問題が顕在化しているためである。とりわけ、①対人関係がうまく築けない高機能自閉症やLD、ADHD等の発達障害の子ども、②両親が外国籍、または本人が帰国子女であるために言語・文化的コンフリクトの問題を抱える子どもの数は全国的に増加しており、各地域における緊急の対策が求められている。これらの子どもにとって集団生活への適応が大きな課題であることは共通しており、家庭・地域での育ちから保育所・幼稚園への就園へ、保育所・幼稚園から小学校就学への接続が問題となる。保育者・小学校教員が、施設の種別を超えて子どものニーズに対する理解を共有し、連携して問題解決にあたるためには、本プログラムによる幼児期から児童期までの育ちを見通した共同の教育プログラムの構築が必要である。

(2) 本年度

本補助事業の今年度の目的は、3年にわたる補助事業の基盤として、遠隔授業システムの設置・導入や専門連携コーディネーターの雇い上げを行うことにより、両大学間の連携を円滑に行う条件を整備することである。両大学の教員及び学生同士による学習会やフォーラムの開催を通じ、相互理解を深め、資格種別や教育内容の違いを超えて、保・幼・小連携に向けた課題を共有することをめざす。また、地域との連携として、平成22年度以降に実施する保護者及び卒業生の需要サイドを対象とする調査のプレリサーチを行い、調査の本格実施に向けて準備を行う。

9. 本年度の補助事業実施計画（事業を実施するにあたってのスケジュールを記載して下さい。）

本年度の補助事業の目的を達成するため、次の事業を行なう。

- ①9月 本事業実施のための運営会議、常任委員会及び実施部門の正式発足
- ②9月 教員による実習の相互参観
- ③11月 専門連携コーディネーター（助教）及び事務補佐員の雇い上げ（両大学各1名）
- ④11月 本補助事業に関するホームページの立ち上げ及びパンフレット等による情報の公開
- ⑤11月 単位互換対象授業科目の選定
- ⑥12月 オンライン遠隔授業システムの設置・導入及び試行的使用
- ⑦12－3月 ケースメソッド及びPBLに関する先進的な取組の現地調査（慶應義塾大学、三重大学）
- ⑧12－3月 外国籍児童への支援に関する先進的な取組の現地調査（東京外語大学）
- ⑨12－3月 両大学の教員による合同学習会の開催
- ⑩1月 卒業生の需要サイドを対象としたニーズ調査のプレリサーチの実施
- ⑪1月 保護者を対象とするニーズ調査のプレリサーチの実施
- ⑫2月 両大学学生フォーラムの開催
- ⑬3月 各部会における自己点検評価の実施

上記のすべての事業について、代表校と連携校が協力して実施することが原則であるが、両大学の強みを活かして役割分担を行なう。上田女子短期大学は、連携事業のうち乳幼児期の子育て支援、幼児教育・保育に関する分野において、幼児教育学科教員の専門性を活かして事業に関わり、信州大学教育学部は、連携事業のうち小学校以上の段階における教育に関する分野において、教員の専門性を活かして事業に関わる。特に、発達障害児の支援に関しては教育学・心理学関係教員、外国籍児の支援に関しては国際理解教育関係教員が主導的な役割を果たす。

10. 補助事業の内容（選定された取組をどのように実施するのか、事業の内容を具体的に記載して下さい。また、必ず、上記9.の実施計画と対応させるよう、箇条書きで記載して下さい。）

本補助事業は、選定された「乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム『信州モデル』の実現」プログラムにおいて、

- ① 本事業の最高議決機関として、上田女子短期大学長、信州大学副学長及び関係機関の長によって構成される「運営会議」を立ち上げ、本事業の推進を図る。運営会議の下に、事業の実質的な運営

を行なう「常任委員会」を置く。常任委員会は、両大学から選出された実施本部長・副本部長と、三つの実施部門の長によって構成される。事業の実施部門として、両大学の教員によって構成される「教材・カリキュラム開発部会」「FD・SD部会」「地域連携部会」を設置し、それぞれの担当する具体的な事業を展開する。

- ② 両大学の教員が幼稚園実習と小学校の実習を相互参観することにより、幼児と小学生を対象とした実習の一貫した展望を持ち、それぞれの実習指導体制への理解を深める。
- ③ また、幼児教育及び学校教育を専門とする連携コーディネーター（助教）の雇用により、両大学の連絡調整や各部会の運営を行うとともに、関連事業の企画・運営を行う。また、本事業に専従する事務補佐員の常時雇い上げにより、両大学における事務的作業の円滑な推進を図る。
- ④ 本補助事業の意義と成果を全国に広く周知することを目的として、ホームページの作成を行い、WEB上に公開してつねに最新の情報を発信する体制を整えるとともに、本取組の概要を記したパンフレットを作成し、県内外の関係機関へ配布する。
- ⑤ 平成22年度以降に予定している、テレビ会議システムを用いた遠隔授業による単位互換の試行に先立ち、単位互換の対象科目として両大学の学生にとって有用な授業科目を選定し、両大学のカリキュラムの相互補完を図る。
- ⑥ 上田女子短期大学及び附属幼稚園には、信州大学の西長野キャンパスとを繋ぐオンライン遠隔授業システムを設置し、両大学間の授業聴講が遠隔的に可能になる環境を整える。本年度は、一部の授業及び会議等で試行的に遠隔システムを使用し、不具合や問題点がないか精査する。システムの導入にあたっては、すでにシステムを導入している信州大学でのノウハウを活かし、教材・カリキュラム開発部会のうち、遠隔授業システム担当の小部会の委員を中心に作業をすすめる。
- ⑦ 両大学における授業の質的充実を図るため、教材・カリキュラム開発部会が中心となり、学生の主体的学習を促すケースメソッドやPBLの実践について、先進大学の実践を現地調査する。ケースメソッドについては慶應義塾大学、PBLについては三重大学での調査を予定している。
- ⑧ 外国籍児童への支援について先進的な取組を行っている東京外国語大学に教員を派遣し、地域連携部会が中心となって本取組に有用な知見を得るための現地調査を行う。
- ⑨ FD・SD部会が中心となり、両大学の教員による合同学習会を企画・開催する（本年度は1～2回程度の予定）。保育現場や地域の福祉担当者等を講師として招き、現代の子育てや教育をめぐる問題についての理解を深める。
- ⑩ FD・SD部会が中心となり、平成22年度以降に実施する予定の、卒業生の需要サイド（幼稚園、保育所、学校等の長）を対象とした調査の準備を進める。本年度は、地域を限定して本調査のためのプレリサーチを実施し、地域の保育・教育関係機関がどのような人材を求めているのかを明らかにする。
- ⑪ 地域連携部会が中心となり、平成22年度以降に実施する予定の保護者を対象とするニーズ調査のプレリサーチを行なう。乳幼児から小学生までの子どもを持つ保護者が保育・教育に対してどのようなニーズを持っているのかを明らかにする。
- ⑫ FD・SD部会が中心となり、両大学の学生によるフォーラムを共同で開催する。保育者養成校と小学校教員の養成課程における実習及びカリキュラムのあり方について学生同士が討論を行ない、相互理解を深めるとともに、教育観や子ども観の違いについて確認し、専門職としての自覚を深める。
- ⑬ 本年度に実施した事業を総括し、年度末に各部会における活動の自己評価を行う。

11. 補助事業から得られる具体的な成果（学生教育の観点での成果を記載して下さい。また、必ず、上記10. の補助事業の内容と対応させるよう、箇条書きで記載して下さい。）

- ① 各大学及び地域関係機関の長によって構成される最高議決機関としての「運営会議」の発足及び、両大学から選出された本事業の実施責任者、各実施部門の長による「常任委員会」の組織運営により、本事業における連携取組を着実に実施する体制を確立することができる。また、実施部門として三つの部会を置き、各大学の教員が所属（代表校の専任教員は全員がいずれかの部会に所属）して事業を担当することにより、事業の確実な実施運営が図られるとともに、二大学間及び地域との連携に向けた教職員全体の意識改革が望め、学生の教育に対する理念の共有が可能となる。

- ② 教員による実習の相互参観を実施し、それぞれの大学における実習の目的・到達目標、実習内容、評価の観点、学生のリフレクション方法等について両大学の教員間で議論することにより、幼児教育と小学校教育を見通す視点をそれぞれの教員が持つことができ、実習指導体制の充実が望める。
- ③ 両大学に連携の窓口となる連携コーディネーターをそれぞれ置くことにより、両大学間の連絡調整が確実に行なえ、部会の運営が容易になるとともに、連携に伴う齟齬を最小限に抑え、円滑に事業を進めることができる。また、連携に伴って両大学間及び関係機関への膨大な事務連絡等の業務が発生すると考えられるが、専従の事務補佐員を置くことにより、これを素早く処理することが可能となる。
- ④ 本補助事業に関するホームページを立ち上げることにより、本事業での取組を地域のみならず県内外に広く情報発信することができる。本事業における連携の理念及び学生教育上の成果を公表することにより、県内外に、本取組をモデルとした地域連携の普及を図ることが可能となる。
- ⑤ 単位互換対象授業科目の選定により、両大学のカリキュラムに不足している部分を、将来的に補完することができる。
- ⑥ 遠隔授業システムの導入により、遠隔地にある両大学の授業を相互に受講することが容易になり、単位互換の基盤となるほか、実習の相互参観や共同FD等への遠隔参加等、22年度以降に予定している事業についても幅広く利用でき、学生及び教員の交流及び連携の実質化が図れる。遠隔授業システムにより、一大学では提供できない多様な教育メニューの学生への提供が可能となり、カリキュラムをより充実させることができる。
- ⑦ 先進大学への調査を実施することにより、ケースメソッド・PBLに関する教材開発についての有用な知見を得ることができ、平成22年度以降に実施するケース教材の作成などに活かすことができる。
- ⑧ 外国籍児童への支援に関する先進大学への調査を実施することにより、地域支援の具体的方策について有用な知見を得ることができ、平成22年度以降に実施する地域連携事業に活かすことができる。
- ⑨ 両大学の教員が地域の講師を招いて学習会を実施することにより、地域の子育てや教育の現場における課題を、現場の視点から捉えなおすことができる。学習会を重ねることによって、地域との相互理解が進み、保育者や教員を養成する大学の役割が明確になることが期待できる。また長期的には、各大学に所属する大学教員の専門性を活かし、地域の課題の解決に連携協力して取り組むための下地を作ることができ、大学教育の質を向上させる効果が望める。
- ⑩ 需要者サイド調査のプレリサーチを実施することにより、本調査にあたっての調査項目の確定に有用な基礎的データを得ることができる。
- ⑪ 保護者を対象とする調査のプレリサーチを実施することにより、本調査にあたっての調査項目の確定に有用な基礎的データを得ることができる。
- ⑫ 両大学の学生によるフォーラムを共同で開催し、学生同士が交流しながら、自らの実習体験等をもとに討論を行なうことにより、保育者養成校と小学校教員の養成課程における実習及びカリキュラムの違いについての相互理解を深めることができる。両大学の学生が、多様なニーズを持つ子どもにとって幼稚園・保育所段階から小学校への接続が大きな課題となることを理解し、お互いの保育・教育観や子ども観の違いについて確認しておくことは、卒業後、地域での保幼小連携の求められる場で、それぞれの立場を理解した上での実質的な協働の基盤となるはずである。
- ⑬ 本年度に実施した事業の自己点検評価を実施することにより、事業の進捗状況を確認し、確実な実施を図るための基礎資料を得ることができる。

② 平成22年度大学改革推進等補助金(大学改革推進事業)調書

1. 大学等名／設置者名	上田女子短期大学／学校法人北野学園
2. プログラム名	大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム
3. 取組名称	乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム「信州モデル」の実現
4. 選定年度	平成21年度
5. 取組代表者／取組担当者	(所属部局・職名・氏名) 取組代表者 学 長 小池 明 取組担当者 幼児教育学科・准教授 小川 史
6. 事務担当者 主担当、副担当を必ず2名記載して下さい。	主担当 (所属部局・職名・氏名) 教務課・課長 塚田 穂敬 TEL 0268-38-2352 FAX 0268-38-7315 E-mail tsukada@uedawjc.ac.jp 副担当 事務局 橋詰 聡美 TEL 0268-38-2352 FAX 0268-38-7315 E-mail s-hashizume@uedawjc.ac.jp
7. 選定取組の概要(400字以内)	平成21年度に本プログラムで選定された「乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム『信州モデル』の実現」は、集団生活への適応が困難な発達障害児や外国籍児童の増加等を背景として、保・幼・小連携に基づく支援を担う保育者・小学校教員を育成するため、保育者養成課程を有する上田女子短期大学と、小学校教員の養成課程を有する信州大学教育学部が連携して教育プログラムを構築し、地域人材の育成を図るものである。平成22年度は、平成21年度に整備したシステムおよび連携の基盤を活用し、①授業の相互乗り入れの実施および単位互換制度を試行する、②両大学相互の実習参観等を通じて、保幼小の連携を見通す視座を学生に獲得させる取り組みを実施する、③求められる保育者・学校教育者像についての各種調査を実施し、ニーズを分析するデータを収集する、④地域の現代的課題に対応した教材の開発に着手する等の取り組みを行う。【398字】
8. 補助事業の目的・必要性	(1) 全体 本補助事業の全体の目的は、幼稚園教員及び保育士（以下「保育者」とする）養成校である上田女子短期大学と、小学校教員の養成課程を有する信州大学教育学部及び地域自治体等（上田市、上田市教育委員会、長野市、長野市教育委員会）が連携して共同の教育プログラムを構築することにより、乳幼児期から小学校までの育ちを見通し、現代的課題に対応しつつ地域における個別教育支援を担うことができる保育者・小学校教員を育成することである。 この事業を行う必要があるのは、近年、家庭生活の変化・多様化により、子育てや教育をめぐる現代社会特有の問題が顕在化しているためである。とりわけ、①対人関係がうまく築けない高機能自閉症やLD、ADHD等の発達障害の子ども、②両親が外国籍、または本人が帰国子女であるために言語・文化

的コンフリクトの問題を抱える子どもの数は全国的に増加しており、各地域における緊急の対策が求められている。これらの子どもにとって集団生活への適応が大きな課題であることは共通しており、家庭・地域での育ちから保育所・幼稚園への就園へ、保育所・幼稚園から小学校就学への接続が問題となる。保育者・小学校教員が、施設の種別を超えて子どものニーズに対する理解を共有し、連携して問題解決にあたるためには、本プログラムによる幼児期から児童期までの育ちを見通した共同の教育プログラムの構築が必要である。

(2) 本年度

本補助事業の本年度の目的は、事業初年度であった平成21年度に導入したシステムおよび両大学の連携の基盤を活用し、遠隔授業の相互乗り入れおよび単位互換制度の試行など、両大学の連携にもとづく教育システムを具体的に制度化し、その一部の運用を開始するとともに、平成21年度で基盤を形成した両大学の教員および学生同士の連携を活かし、各種調査を実施して地域に求められる保育者・小学校教員像を明らかにするため、次年度の分析に向けたデータを収集することである。そして、地域の現代的課題に対応するケース教材の開発に着手し、両大学の連携にもとづく乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材育成のシステム「信州モデル」の基盤を築く。平成21年度の取り組みにおいて両大学で共有するに至った保・幼・小の連携の課題をもとに、卒業後1～2年の保育者・小学校教員を対象としたワークショップの開催、および、地域の児童福祉・保健・医療機関関係者等を招いたシンポジウムを開催すること等を通じて、こうした課題を克服することのできる保育者・小学校教員の養成に求められる要素を具体的に収集し、次年度の制度構築の完成に向けた素地を形成する。また、平成21年度のプレ調査にもとづき、保育者や小学校教員の需要サイド（保育所、幼稚園および小学校等）および保護者に対する本調査を実施し、地域固有の課題を実証的に把握するとともに、ケース教材の開発に着手し、地域の現代的課題への対応を取り入れたケースメソッド及びPBL等の授業実践等に向けての基盤を築く。

9. 本年度の補助事業実施計画（事業を実施するにあたってのスケジュールを記載して下さい。）

- ①4月 本事業の昨年度の総括と本年度の事業の実施にあたっての運営会議又は常任委員会の開催
- ②4月 専門連携コーディネーター(助教) 及び事務補佐員の雇いあげの継続 (両大学各1名)
- ③4月 単位互換に関する協定等実施上の制度整備
- ④5～7月 上田女子短期大学で開催される子育て広場への信州大学学生の参加
- ⑤5～3月 本事業実施に関する成果発表及び情報収集
- ⑥6～11月 地域の現代的課題を含むケース教材の開発
- ⑦8～9月 学生による実習の相互参観
- ⑧8月 卒業後1～2年目の現職保育者・教員を対象としたワークショップの開催
- ⑨8～9月 地域の子育て支援の現場見学・参加
- ⑩10～2月 遠隔システムによる授業の相互乗入の実施および単位互換制度の試行
- ⑪11月 ケースメソッド等先進的教育方法に関する学習会の開催
- ⑫12月 自治体及び地域の児童福祉・保健・医療関係機関、ボランティア、NPO等の代表によるシンポジウムの開催
- ⑬1月 卒業生の需要サイドに対しての調査の実施
- ⑭1月 保護者へのニーズ調査の実施
- ⑮2月 子育て支援等先進地域への海外視察・研修
- ⑯3月 自己点検評価及び外部評価の実施

なお、上記のすべての事業について、代表校と連携校が協力して実施することを原則とする。ただし、必要に応じて、両大学の強みを活かして役割分担を行う。上田女子短期大学は、連携事業のうち乳幼児期の子育て支援、幼児教育・保育に関する分野において、幼児教育学科教員の専門性を活かした事業には中心的に関わり、信州大学教育学部は、連携事業のうち、小学校以上の段階における教育に関する分野において、教員の専門性を活かして事業に関わる。特に、発達障害児の支援に関しては教育学・心理学関係教員、外国籍児の支援に関しては国際理解教育関係教員が主導的な役割を果たすなど、個別の事業の特性に応じての役割分担を行う。

10. 補助事業の内容（選定された取組をどのように実施するのか、事業の内容を具体的に記載して下さい。また、必ず、上記9.の実施計画と対応させるよう、箇条書きで記載して下さい。）

本補助事業で選定された「乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム『信州モデル』の実現」プログラムにおいて、本年度実施する事業の具体的な内容は以下のとおりである。

- ① 平成21年度に引き続き本年度の事業を実施するにあたって、最高議決機関として構成された「運営会議」（上田女子短期大学学長、信州大学副学長及び関係機関の長によって構成）または「常任委員会」（両大学から選出された実施本部長・副本部長と「教材・カリキュラム開発部会」「FD・SD部会」「地域連携部会」の部会長によって構成）を開催し、本事業において昨年度実施した事業の総括を行い、本年度の事業全体の方針を策定するとともに、それぞれの部会の方針を確認し、部会間での連携の方針を調整・策定する。
- ② 昨年度に引き続き、幼児教育及び学校教育を専門とする連携コーディネーター（助教）を雇用し、両大学の連絡調整や各部会の運営を行うとともに、事業の企画・運営を行う。また、事業の推進に係る事務的作業にも従事するとともに、本事業に専従する事務補佐員の常時雇い上げを行う。
- ③ 教材・カリキュラム開発部会が中心となり、単位互換制度の構築に向けた両大学における規程および両大学間の協定等について、授業の方法や単位の認定方法などに関する法令等を踏まえつつ、関連規程を整備する。
- ④ 地域連携部会が中心となり、上田女子短期大学で開催される子育て広場に信州大学の学生が参加し、両大学の学生が共に保育の実践を体験するとともに、参加者間でリフレクションを行い、保・幼・小の連携の必要性についての意見交換を行う。
- ⑤ 各部会ごとに、これまでの取組みの成果を学会・シンポジウム等において広く発表し、情報交換を行う。
- ⑥ 教材・カリキュラム開発部会が中心となり、地域の現代的な課題を捉えつつ、問題となるケースに対応する教材の開発を行う。地域性の観点からは外国籍の子どもに対する保育および教育の支援について、また、発達障害等の特別な支援を要する子どもに対する保育・教育方法についてのケースと併せ、教材を開発することを予定している。
- ⑦ 教材・カリキュラム開発部会が中心となり、上田女子短期大学と信州大学の学生が実習を相互に参観し、保育者と小学校教員の養成課程でそれぞれが体験する実習とは異なる視座を獲得する。なお、参観にあたっては、テレビ会議システムによる遠隔システムを補助的手段として利用することも想定している。
- ⑧ FD・SD部会が中心となり、卒業後1～2年目の現職保育者・小学校教員を対象としたワークショップを開催し、参加者が両大学で学んできたカリキュラムが保育・教育の現場においてどのように活かされ、またどのような課題があるかの意見交換を行う。
- ⑨ 地域連携部会が中心となり、地域の子育て支援の現場を見学・参加し、意見交換を行ったうえで、現状の課題を析出する。
- ⑩ 教材・カリキュラム開発部会が中心となり、遠隔授業システムを活用した授業の相互乗り入れを実施するとともに、単位互換制度の試行を行う。
- ⑪ 教材・カリキュラム開発部会とFD・SD部会とが合同で、ケースメソッド等に関して先進的な教育方法を実践する大学・研究機関から講師を招聘し、学習会として、講演およびワークショップを開催する。
- ⑫ 地域連携部会が中心となり、自治体及び地域の児童福祉・保健・医療関係機関、ボランティア、NPO等の代表を招きシンポジウムを開催する。それぞれがどのように連携して子育て支援等を行い、今後、どのような地域の連携が必要であると考えられるのか、課題を析出する。
- ⑬ FD・SD部会が中心となり、保育者や小学校教員の需要サイド（保育所、幼稚園および小学校等の両大学の卒業生の就職先等）に対し、どのような保育者・小学校教員を求め、また保育者・小学校教員に修得しておくことが期待される能力および知識等についての調査を実施する。
- ⑭ 地域連携部会が中心となり、保護者がどのような保育や教育、およびそれらを含む子育て支援を求めているのかというニーズに関する調査を実施する。
- ⑮ 子育て支援の先進的な取り組みを行う北欧諸国において、現地視察・研修を実施する。現地の保育・教育機関を訪問し、その実践を視察するとともに、保育者・教員等にインタビューを行い、意

見交換を行う。

- ⑯ 自己点検評価を行うとともに、専門家によって構成された外部評価委員会による2年間の総括的評価を受ける。

以上の事業を通じて、選定取り組みの更なる充実・発展を図り、乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム「信州モデル」の実現を目指す。

11. 補助事業から得られる具体的な成果（学生教育の観点での成果を記載して下さい。また、必ず、上記10. の補助事業の内容と対応させるよう、箇条書きで記載して下さい。）

- ① 各大学および地域関係機関の長によって構成される最高議決機関としての「運営会議」または両大学から選出された本事業の実施責任者、各実施部門の長によって構成される「常任委員会」を開催することによって本年度の事業の実施計画等の方針を策定し、三つの部会がそれぞれに有機的に関わり合いながら事業を遂行することができるよう各部会の連携の方針を策定することによって、合理的かつ円滑に事業を推進することができる。
- ② 両大学の連携の窓口となる連携コーディネーターを置くことによって、両大学間の連絡調整を円滑に行うことができるとともに、連携に伴って生じる膨大な連絡および事務処理等の業務を、専従の事務補佐員とともに行うことによって、合理的かつ迅速に処理することができ、事業を円滑に推進することができる。
- ③ 遠隔授業システムを利用した単位互換制度を履修モデルの一部として位置づけるためには、それらが学生にとって有用な授業であると同時に、法令等に照らして正式に単位認定を行うことのできる制度を確立する必要がある。このため、授業方法等についての法令等を精査し、学内の規程を整備することが必要不可欠である。
- ④ 上田女子短期大学で開催される子育て広場に信州大学の学生が参加することを通じて、保育者と小学校教員とがそれぞれに見通すべき保・幼・小の連携についての視座を獲得することができる。
- ⑤ 各部会ごとに、これまでの取り組みの成果を学会・シンポジウム等で積極的に発表することによって、本事業の成果を広く公表し、情報交換を行うことができる。
- ⑥ 地域の現代的課題に対応するケース教材を開発することによって、そうした課題に対応することのできる保育者・小学校教員の育成に有用なカリキュラムの一部を構築することが期待される。
- ⑦ 両大学の学生が相互の実習参観を実施することを通じて、保・幼・小の連携を見通す視座を学生に与えることができる。また、直接の相互参観のみならず、遠隔システムを使った相互参観システムを確立し、今後、両大学の人材育成システムの一部を構成する事業として発展させることができる。
- ⑧ 卒業後1～2年目の現職保育者・小学校教員を対象としたワークショップを開催することによって、現場に立つ現職の保育者・小学校教員の目を通じて、その養成課程で求められるカリキュラムはどのようなもので、また、現状には何が不足しているのかという課題を析出・把握することができる。
- ⑨ 地域の子育て支援の現場を見学・参加することを通じて、地域における子育て支援の実情および課題を理解するとともに、地域固有の子育て支援のニーズを現場の声として把握することができる。
- ⑩ 遠隔授業システムを利用した授業の相互乗入を実施することにより、両大学の学生は距離的な制約にとらわれず、他大学の授業に参加することが可能となる。このことを通じて、自らが所属する養成課程の枠を越えて、保育者または小学校教員に有用な他大学の授業に参加することができるようになる。
- ⑪ ケースメソッド等の先進的な取り組みに関する知見を得ることで、参加教員が地域の現代的な課題に対応するケース教材およびPBL等の作成にあたっての示唆を受けることができる。また、その活用方法を議論し、意見交換を行うことで、より有用な教材等の開発が可能となる。
- ⑫ 自治体及び地域の児童福祉・保健・医療関係機関、ボランティア、NPO等の代表を招いてシンポジウムを開催することによって、地域の社会資源の連携の実情と課題を明らかにするとともに、地域の中で求められる保育者・教員像を明らかにすることができる。
- ⑬ 卒業生が就職する先においての調査を実施することによって、両大学が育成した保育者・小学校教

員が現場のニーズにいかに対応し、またどのような課題があるのかを明確にすることができる。

- ⑭ 保護者が保育者・小学校教員および地域の子育て支援に対してどのようなニーズを有しているかを調査することによって、保護者の観点から求められる保育者・小学校教員像を明らかにすることができる。
- ⑮ 乳幼児期から小学校までの育ちを見通す保育者・小学校教員の人材育成システムを実現していると考えられる先進諸国（北欧諸国）において視察・調査を実施することにより、先進的な取り組みについての比較教育的な知見を獲得することができる。
- ⑯ 本年度に実施した事業の自己点検評価を実施することにより、事業の進捗状況を確認し、確実な実施を図るための基礎資料を得、その課題を踏まえることによって次年度の事業をより合理的に展開することができる。

1. 大学等名／設置者名	上田女子短期大学／学校法人北野学園
2. プログラム名	大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム
3. 取組名称	乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム「信州モデル」の実現
4. 選定年度	平成21年度
5. 取組代表者／取組担当者	<div>(所属部局・職名・氏名)</div> <div>取組代表者 学 長 小池 明</div> <div>取組担当者 幼児教育学科・准教授 小川 史</div>
6. 事務担当者 主担当、副担当を必ず2名記載して下さい。	<div>主担当</div> <div>(所属部局・職名・氏名)</div> <div>教務課・課長 塚田 穂敬</div> <div>TEL 0268-38-2352 携帯 090-7901-6736)</div> <div>FAX 0268-38-7315</div> <div>E-mail tsukada@uedawjc.ac.jp</div> <div>副担当</div> <div>事務局 橋詰 聡美</div> <div>TEL 0268-38-2352</div> <div>FAX 0268-38-7315</div> <div>E-mail s-hashizume@uedawjc.ac.jp</div>
7. 選定取組の概要（400字以内）	<p>平成21年度に本プログラムで選定された「乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム『信州モデル』の実現」は、集団生活への適応が困難な発達障害児や外国籍児童の増加等を背景として、保・幼・小連携に基づく支援を担う保育者・小学校教員を育成するため、保育者養成課程を有する上田女子短期大学と、小学校教員の養成課程を有する信州大学教育学部が連携して教育プログラムを構築し、地域人材の育成を図るものである。平成23年度は、平成22年度までに築いた連携の基盤をさらに発展させ、①単位互換制度の運用の開始、②地域の現代的課題に対応した教材を活用した授業の実践、③保・幼・小の共同モデル・コア・カリキュラムの検討、④求められる保育者・学校教育者像についての各種調査を分析し、その結果を地域へ報告する等の取り組みを行い、3年間の事業を総括しつつ、次年度以降の事業の展開に向けた基盤を形成する。【395字】</p>
8. 補助事業の目的・必要性	<div>(1) 全体</div> <p>本補助事業の全体の目的は、幼稚園教員及び保育士（以下「保育者」とする）養成校である上田女子短期大学と、小学校教員の養成課程を有する信州大学教育学部及び地域自治体等（上田市、上田市教育委員会、長野市、長野市教育委員会）が連携して共同の教育プログラムを構築することにより、乳幼児期から小学校までの育ちを見通し、現代的課題に対応しつつ地域における個別教育支援を担うことができる保育者・小学校教員を育成することである。</p> <p>この事業を行う必要があるのは、近年、家庭生活の変化・多様化により、子育てや教育をめぐる現代社会特有の問題が顕在化しているためである。とりわけ、①対人関係がうまく築けない高機能自閉症やLD、ADHD等の発達障害の子ども、②両親が外国籍、または本人が帰国子女であるために言語・文化</p>

的コンフリクトの問題を抱える子どもの数は全国的に増加しており、各地域における緊急の対策が求められている。これらの子どもにとって集団生活への適応が大きな課題であることは共通しており、家庭・地域での育ちから保育所・幼稚園への就園へ、保育所・幼稚園から小学校就学への接続が問題となる。保育者・小学校教員が、施設の種別を超えて子どものニーズに対する理解を共有し、連携して問題解決にあたるためには、本プログラムによる幼児期から児童期までの育ちを見通した共同の教育プログラムの構築が必要である。

(2) 本年度

本補助事業の本年度の目的は、補助期間最終年度として、連携事業の深化及び長期的な発展を図ることである。そのために必要となるのは、次の3点である。ひとつには、昨年度までに実施してきた取り組みを継続し、より強固な定着を目指すこと。学習会の開催、キャンプへの参加がこれにあたる。また、外国籍児童への支援や地域における子育て支援の現場見学についても、昨年度まで行ってきた子育て支援事業の実施・参加の継続という意味で同様の位置づけをもつ。次に必要なのは、昨年度までの調査結果を発展させて具体的成果に結びつけることである。保育者の需要サイド調査の分析、保護者調査の分析、またその結果についての報告書を地域諸機関に提出することがこれにあたる。尚、昨年度までに制度的整備を完了した遠隔授業相互乗り入れ並びに単位互換を実施することと、そうした授業においてケースメソッド等を取り入れた実践をおこなうこともこの範疇に含まれる。同様に、学生の実習に関する評価基準の作成も、例年実習の相互参観を行ってきたという実績の延長線上にある。最後に、最終年度としてプロジェクト全体を総括してより長期的な段階へと本事業を脱皮させることが必要である。専門学会（国際学会）での成果の発信、成果報告書の作成、自己点検評価及び外部評価の実施、保・幼・小連携共同モデル・コア・カリキュラムの検討といった事業がこれにあたる。また、こうした取り組み全体を可能にするのが、連携コーディネータ・事務補佐員の雇用や運営委員会および常任委員会の開催を通しての円達かつ互恵的なコミュニケーションであることも申し添える。

9. 本年度の補助事業実施計画（事業を実施するにあたってのスケジュールを記載して下さい。）

- ① 4月 専門連携コーディネーターの雇い上げの継続 助教等2名（両大学各1名）、職員2名（両大学各1名）
- ② 4－5月 本事業の昨年度の総括と本年度の実施にあたっての運営委員会および常任委員会の開催
- ③ 4月 遠隔授業相互乗り入れの対象授業拡大、単位互換制度の運用の開始
- ④ 5－7月 地域課題を取り入れたケースメソッド及びPBL等の授業の実践
- ⑤ 5－7月 需要サイド調査の分析
- ⑥ 5－7月 保護者調査の分析
- ⑦ 5－12月 保・幼・小連携共同モデル・コア・カリキュラムの検討
- ⑧ 7－11月 両大学教員及び附属校園教員による、学生の実習に関する評価基準の作成
- ⑨ 8－9月 上田市外国籍児童支援事業の現場見学
- ⑩ 8－11月 連携の成果を専門学会で報告・発表
- ⑪ 8月 地域の子育て支援の現場見学・参加
- ⑫ 8月 信州大学の野外キャンプへの上田女子短期大学生の参加
- ⑬ 9月 FD・SD合同学習会（学生参加型ワークショップ）の開催
- ⑭ 11月 需要サイド調査及び保護者調査の結果について、地域に報告書を提出
- ⑮ 12－3月 本連携取組に関する成果報告書の作成
- ⑯ 3月 自己点検評価及び外部評価の実施

なお、上記のすべての事業について、代表校と連携校が協力して実施することを原則とする。ただし、必要に応じて、両大学の強みを活かして役割分担を行う。上田女子短期大学は、連携事業のうち乳幼児期の子育て支援、幼児教育・保育に関する分野において、幼児教育学科教員の専門性を活かした事業には中心的に関わり、信州大学教育学部は、連携事業のうち、小学校以上の段階における教育に関する分野において、教員の専門性を活かして事業に関わる。特に、発達障害児の支援に関しては教育学・心理学関係教員、外国籍児の支援に関しては国際理解教育関係教員が主導的な役割を果たすなど、個別

の事業の特性に応じての役割分担を行う。

10. 補助事業の内容（選定された取組をどのように実施するのか、事業の内容を具体的に記載して下さい。また、必ず、上記9.の実施計画と対応させるよう、箇条書きで記載して下さい。）

本補助事業で選定された「乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム『信州モデル』の実現」プログラムにおいて、本年度実施する事業の具体的な内容は以下のとおりである。

- ① 昨年度に引き続き、幼児教育及び学校教育を専門とする連携コーディネーター（助教等）を雇用し、両大学の連絡調整や各部会の運営を行うとともに、事業の企画・運営を行う。また、事業の推進に係る事務的作業にも従事するとともに、本事業に専従する事務補佐員の常時雇い上げを行う。
- ② 引き続き本年度の事業を実施するにあたって、最高議決機関として構成された「運営委員会」（上田女子短期大学学長、信州大学副学長及び関係機関の長によって構成）および「常任委員会」（両大学から選出された実施本部長・副本部長と「教材・カリキュラム開発部会」「FD・SD部会」「地域連携部会」の部会長によって構成）を開催し、本事業において昨年度実施した事業の総括を行い、本年度の事業全体の方針を策定するとともに、それぞれの部会の方針を確認し、部会間での連携の方針を調整・策定する。
- ③ 前年度までに締結された単位互換協定にもとづいて、単位互換制度の運用を開始するとともに、遠隔授業システムを利用した授業の相互乗入を継続、対象授業を拡大する。なお、これらの実施にあたっては、両大学の実務担当者（GP推進室員等）がその運用の任を担うとともに、教材・カリキュラム開発部会においては、その運用方法等について精査・検討を行う。
- ④ 教材・カリキュラム開発部会が中心となり、地域の現代的課題を捉えたケース教材の開発を前年度に引き続き行い、授業において実践する。
- ⑤ FD・SD部会が中心となり、前年度から実施してきた需要サイド調査において回収した調査票の分析を行う。
- ⑥ 地域連携部会が中心となり、前年度から実施してきた保護者調査において回収した調査票の分析を行う。
- ⑦ 教材・カリキュラム開発部会が中心となり、保・幼・小の連携共同モデル・コア・カリキュラムを検討する。
- ⑧ 教材・カリキュラム開発部会が中心となり、両大学の教員および両大学の附属校園の教員とが合同で、学生の実習に関する評価基準を検討し、作成する。
- ⑨ 地域連携部会が中心となり、上田市の外国籍児童に対しての支援を行う現場を見学する。
- ⑩ 各部会所属教員および連携コーディネーター等が、共同で、前年度までの当事業における取り組みの成果を専門学会において発表する。
- ⑪ 地域連携部会が中心となり、上田市の子育て支援事業に参加する。
- ⑫ 地域連携部会が中心となり、信州大学の公開講座である「幼児キャンプ教室」の運営に上田女子短期大学学生が参加する。
- ⑬ FD・SD部会が中心となり、両大学の教員のみならず、学生、附属校園の教員も参加可能な形態で、幼児教育向けのワークショップを開催する。
- ⑭ FD・SD部会および地域連携部会においてとりまとめた需要サイド調査ならびに保護者調査の調査結果を報告書にまとめ、地域の関係諸機関に提出する。
- ⑮ 各部会においてこれまでの取り組みに関しての報告を作成し、それを両大学の実務担当者（GP推進室員等）がとりまとめる形で、当事業の成果報告書（最終報告書）を作成する。
- ⑯ これまでの取り組みに関しての自己点検評価を行うとともに、専門家によって構成された外部評価委員会による3年間の総括的評価を受ける。

以上の事業を通じて、乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム「信州モデル」の実現を目指した補助金交付期間3年間の取り組みをひとまず総括するとともに、補助期間終了後の事業の継続的な発展を成し遂げるための確固たる基盤を形成する。

11. 補助事業から得られる具体的な成果（学生教育の観点での成果を記載して下さい。また、必ず、上

記10. の補助事業の内容と対応させるよう、箇条書きで記載して下さい。)

- ① 両大学の連携の窓口となる連携コーディネーターを置くことによって、両大学間の連絡調整を円滑に行うことができるとともに、連携に伴って生じる膨大な連絡および事務処理等の業務を、専従の事務補佐員とともに行うことによって、合理的かつ迅速に処理することができ、事業を円滑に推進することができる。
- ② 各大学および地域関係機関の長によって構成される最高議決機関としての「運営委員会」および両大学から選出された本事業の実施責任者、各実施部門の長によって構成される「常任委員会」を開催することによって本年度の事業の実施計画等の方針を策定することができる。各部会間で他の部会の事業を確認することで、それぞれの部会が連携した、より合理的な方針を策定することができるようになる。
- ③ 遠隔授業システムを利用した単位互換制度を実施することによって、学生は、自大学では開講されていない授業、または自大学とは異なる方法で展開する他大学の授業を履修することができる。学生は、遠隔授業システムを通じて、他大学の学生と同時に授業を受けることによって、より多角的な視座を身につけることができるようになる。両大学で開講されている2つの授業を遠隔授業システムで結ぶ授業の相互乗入は、遠隔授業システムを通じて、両大学の学生が意見を交換し、異なる視点を提供しあうことで授業に対しての意欲や関心を高め、学生は、より深い学習の成果を獲得することができる。
- ④ 地域に固有の現代的課題を取り扱ったケースメソッドおよびPBL等の授業を通じて、学生は、地域に固有の課題を改めて認識するとともに、それに対処するための方策を構想する力を習得することができるようになる。
- ⑤ 調査を通じて、幼稚園・保育園等、保育者等を需要する側において求められる保育者や教育者像を明らかにすることができる。また、当該の調査を通じて保育者や教育者に求められる能力や資質、知識や技能を明らかにすることによって、学生教育において注力すべき項目をも把握することができる。
- ⑥ 調査を通じて、保護者が求める保育者や教育者像を明らかにすることができる。上記の⑤と同様に、当該の調査を通じて保育者や教育者に求められる能力や資質、知識や技能が明らかとなり、学生教育において注力すべき項目を把握することもできる。
- ⑦ 保・幼・小の連携共同モデル・コア・カリキュラムを開発し、それを両大学の授業内容に反映させることによって、学生は、保育者や小学校教員それぞれの領域にとどまらず、保・幼・小の連携を見据えた授業を体系的に受けることができるようになる。
- ⑧ 両大学の教員とそれぞれの附属校園教員とがそれぞれの視点を共有して学生の実習の評価基準を作成することで、学生が実習において習得・形成すべき態度や能力がより客観的に明らかになる。
- ⑨ 外国籍児童等を支援する地域の取り組みを見学することによって、地域に固有の課題に対して、現在どのような対応がなされているのかを把握することができる。そのうえで、今後、外国籍の児童等を支援するために保育者や教育者に求められる能力や資質を把握することもできる。
- ⑩ 2年余りにわたる当事業の取り組みの成果をまとめ、専門学会で発表することによって、当事業の取り組みを他の大学関係者等に周知することができる。当事業の取り組みに関して、他の研究者から質問を受け、意見を交換することを通じて、この取り組みに関しての新しい視点を共有することもできるようになる。
- ⑪ 地域の子育て支援の現場を見学し、参加することを通じて、地域における子育て支援のニーズを現場の声として把握することができる。前年度に引き続き子育て支援の現場を見学し、参加することによって、その経年的な変化についても把握することができる。
- ⑫ 「幼児キャンプ教室」を通じて野外教育の方法を体験することによって、保育者や教育者を目指す両大学の学生は、幼稚園や保育園内における園児の意欲や関心が、野外においてどのように変化するのかを理解することができる。また、当「幼児キャンプ教室」に参加する学生は、保護者のもとを離れ、数日間の野外での生活を経験することを通じて園児が成長して行く過程を観察することができる。
- ⑬ 木材を使って幼児向けの教材を作成するワークショップを開催することによって、子どもが木材を利用する楽しさを体験する「木育（もくいく）」の観点を両大学の教員が共有し、学生教育にこ

うした視点を反映させることができるようになる。また、両大学の学生や附属校園の教員も参加可能なワークショップとすることによって、保育や教育の現場においての教材を作成する活動の一つとして、保育や教育の実践にも活用することができるワークショップとなる。

- ⑭ 保育者等の需要サイドに対する調査の結果と保護者に対する調査結果を分析し報告することを通じて、当該の地域に求められる保育者等のニーズとはどのようなもので、そのために大学はどのような人材を育成し、行政をはじめとする地域の各機関はどのような取り組みを行う必要があるのか、過去に行政機関が行った調査の結果とも照合したうえで、その認識を共有することができる。
- ⑮ これまで実施してきた事業を報告書としてまとめることによって、3年間の事業の成果を、地域や他の大学等に広く周知することが可能となる。
- ⑯ 3年間の事業の自己点検評価を実施し、事業の成果を把握することによって、補助期間終了後の取り組みの方針を改めて策定することができる。また、第三者評価を通じて、その成果をより客観的に把握し、（補助期間終了後の）次年度以降の課題を把握することも可能となる。

Ⅳ 具体的取組報告

(1) フォーラム等への参加

○○○○ 高等教育コンソーシアム信州第1回FDフォーラム 視察等報告書 ○○○○

1. 視察者参加者氏名（◎文責者）

山口 美和（教材・カリキュラム開発部会／上田女子短期大学）
◎橋本 一雄（戦略GP推進室／上田女子短期大学）

2. 訪問年月日

平成21年11月7日

3. 訪問先・学会名等

信州大学 松本キャンパス

4. 視察の成果（戦略GPの取組に参考になる点など）

【概要】

当フォーラムは、平成20年度の戦略的大学連携支援プログラムとして採択された戦略GP（代表校：信州大学、連携校：長野県看護大学、佐久大学、諏訪東京理科大学、清泉女学院大学、長野大学、松本歯科大学、松本大学）事業のうち、FD・SD活動のキックオフイベントとして実施されたものである。本学と信州大学教育学部において戦略GP事業を始動するに際し、先行する戦略GP事業の運用等についての知見を得ることは重要であるとともに、信州大学が関わる戦略GP事業の展開について、認識を共有することも参加目的の一つである。

当フォーラムは、第1部として、高等教育コンソーシアム信州における単位互換制度に関する説明がなされ、大学連携によるFD活動等の取り組みとして、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）、山形地区FDネットワークつばさにおけるFD活動の報告があった。また、その後の第2部では、報告者らによって「大学連携によるFD活動を考える」と題したシンポジウムが開催された。

【成果】

その1

大学間の戦略的連携を目的とする当GP事業において、構成大学間の連携を図るにあたっては、緊密な連絡体制を構築することに加え、授業や会議における双方向のやりとりの手段として、テレビ会議システムは必需であり、とりわけ、これまで導入実績のない上田女子短期大学においては、その整備が喫緊の課題であると感じられた。また、報告された先進的なFD・SD活動を展開するSPODおよび山形大学では、大学の自治・学問の自由とFD活動という一種の緊張関係に立つ両者の関係において、大学が説明責任を果たし、教育の質を保証するためのFD・SD活動の意義が十分な説得力をもって説明されており、当GP事業におけるFD・SDプログラムの遂行にあたって、こうした観点を持つことの重要性を認識した。

その2

山形大学の杉原真晃基盤教育院・高等教育研究センター准教授の報告では、物理的な労力を可能な限りかけず、GP事業としての補助期間終了後も引き続き実施することのできる継続性をもった施策の提案が必要であるとの所見が述べられた。当視察の参加者間において、こうした視点は、当GP事業を始動するにあたって極めて有用な視点であるとの認識で一致、その後の実務担当者等における討議を経て、平成22年2月に開催予定のFD・SD講演会に杉原准教授を講師として招聘し、講演を依頼することとした。

〇〇〇大学院GP国際フォーラム 視察等報告書 〇〇〇

1. 視察者参加者氏名（◎文責者）

山口 美和（教材・カリキュラム開発部会／上田女子短期大学）
◎橋本 一雄（戦略GP推進室／上田女子短期大学）

2. 訪問年月日

平成21年11月28日

3. 訪問先・学会名等

ホテルメトロポリタン長野

4. 視察の成果（戦略GPの取組に参考になる点など）

【概要】

当フォーラムは、平成19年度に採択された組織的な大学院教育改革推進プログラム（大学院GP＝取組校：信州大学）事業の最終年度の総括的イベントとして、海外から講師を招聘して実施された国際フォーラムである。上田女子短期大学と信州大学教育学部において戦略GP事業を始動するにあたって、信州大学が取り組む他のGP事業の運用等についての知見を得ること等が参加の目的であり、主催者および参加者間の交流を深め、当GP事業の情宣をも行いたいと考えた。

当フォーラムは、第1部として、信州大学大学院教育学研究科における大学院GPの取り組みについての報告がなされ、基調講演としてMaj-Lis Sjöbeck教授（イエーテボリ大学）より、「スウェーデンの教員養成・現職教員における専門分野を超えた協働」の講演とパネリディスカッションが行われた。また、第2部では、参加者がグループに分かれ、教師教育に関するワークショップが開催された。

【成果】

その1

信州大学における上記大学院GPの取り組みの概要と運用およびその成果等についての報告を聞き、当GP事業における体制の構築と運用、成果の公表等に関する知見を得ることができた。信州大学大学院教育学研究科の多数の教員が関与する上記大学院GPにおける活動を知ることによって、今後、当該の戦略GPをどのように働きかけ、運営していくべきかの方針も知ることができたと考える。

その2

一方で、基調講演およびシンポジウムを通じて、スウェーデンにおける教員養成の実情に関する知見を得ることができたことも大きな成果であった。ワークショップという開催形式を利用し、小学校教員や大学教員など、立場の異なる参加者間で意見を交換したことによって得られた新たな視点は、参加者それぞれに、少なからず学問的な刺激を与えたものと考えられる。

●●●●多文化協働実践研究全国フォーラム 視察等報告書●●●●

1. 視察者参加者氏名 (◎文責者)

◎小池 浩子 (地域連携部会／信州大学)

2. 訪問年月日

平成21年12月5日～12月6日

3. 訪問先・学会名等

東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター主催の「多文化協働実践研究全国フォーラム (第3回)」―世界経済危機と日本の「多文化共生」の行方―

4. 視察の成果 (戦略GPの取組に参考になる点など)

以下の情報を得た。

- ・経済不況化での外国籍住民と子ども達の現状について
- ・先進的地域 (横浜、武蔵野市など) の取り組み
- ・上田市の取り組みと「上田市多文化共生推進協会準備室」について
(なお、上田市市民課課長、同課長補佐兼外国籍市民サービス課長、準備室多文化共生コーディネーターの各氏と名刺交換した)
- ・東京外国語大学の上田市での調査について
(「上田の住みやすさ」・「住み続けたいか」と属性との関係が調査内容。日本人との関係、文化理解、日本人の外国人への態度などとの関係は未調査。→われわれの調査すべき内容はこの辺か→教育・研修の提言や実施も可能か)
- ・東外大のチームが行なおうとしている「心理・社会的居場所」に関する調査尺度作りについて
(これも異文化間コミュニケーションの視点をもっと入れられると思われる)
- ・なお、東外大と上田市の連携は来年度で終了とのこと。上田市としても我われとの関係は歓迎。
- ・愛知県でのプレスクール教室 (幼稚園に行かれない外国籍幼児がいきなり日本の学校になじめない問題解決のための就学前教室：文科省から補助あり) の情報。上田での可能性について、多文化共生コーディネーター高橋小百合氏と、協働で行なう可能性を話した。
- ・東外大の「多文化共生コーディネーター養成セミナー」について
(我われも実現の可能性があるのでないか。あるいは東外大との提携も)

○全体を通して、生活支援と日本語支援は熱心に行なわれているものの、外国籍住民自身が生活苦と忙しさ、面倒くささなどの理由でその支援や教室に不参加の傾向があるとわかった。

○外国籍住民の自発的の日本社会への関わりを促進することが効果的なのではないかとの感触を得た。

○ボランティアに頼っている傾向がある。国や自治体のシステムとしていかに外国籍住民を日本の社会や学校に受け入れるのか、主体的に役割を担ってもらう方策を確立する必要があると感じた。

〇〇〇山形大学FDシンポジウム 視察等報告書 〇〇〇

1. 視察者参加者氏名（◎文責者）

◎橋本 一雄（戦略GP推進室／上田女子短期大学）

2. 訪問年月日

平成21年12月12日

3. 訪問先・学会名等

山形大学小白川キャンパス

山形大学FDシンポジウム「学生主体型授業の探究—学生の意欲と主体性を育てる授業を考える—」

4. 視察の成果（戦略GPの取組に参考になる点など）

【概要】

当フォーラムは、平成20年度に採択された質の高い大学教育推進プログラム（教育GP＝取組校：山形大学）事業の一環として開催されたフォーラムである。当日は、全国48の大学から91名の参加者があった。

第1部は4組（日本教育大学院大学、北海道大学、三重大学、山形大学）の発表者による事例発表が行われ、それぞれの大学における学生の意欲を引き出すための授業デザインについての報告がなされた。また、第2部では、第1部の発表者4名によって「学生主体型授業の成果と課題」と題したパネルディスカッションが行われた。

【成果】

山形大学では、高等教育研究企画センターの企画・運営のもと、上記教育GP事業として「あっと驚く大学授業NG集」を作成するなど、「授業の改善から授業の開発へと展開する」FD活動に取り組んでいる。その実践として、パイロット授業「未来学へのアプローチ」を開講しており、当視察においては、シンポジウム前日に山形大学を訪問し、上記パイロット授業も参観した。当GPにおいては、大学間連携によるFD・SD活動も主要な事業の一つとして位置づけられており、当フォーラムにおいて発表された各大学の取り組みを先行事例として情報を得ることによって、今後のFD・SD活動を行うにあたっての知見を得ることができた。また、山形大学において作成されている「あっと驚く大学授業NG集」は、そもそもFD・SD活動がなぜ求められるのかを考える契機となる貴重な作品であり、その解説を聞くことによって、今後、当GPにおけるFD・SD活動を進めるにあたっての示唆を得ることができた。

〇〇〇大学教育改革プログラム合同フォーラム(H21年度) 視察等報告書〇〇〇

1. 視察者参加者氏名(◎文責者)

谷塚 光典(教材・カリキュラム開発部会/信州大学)

笹井 弘(FD・SD部会/上田女子短期大学)

山口 美和(教材・カリキュラム開発部会/上田女子短期大学)

◎橋本 一雄(戦略GP推進室/上田女子短期大学)

2. 訪問年月日

平成22年1月7日～8日

3. 訪問先・学会名等

東京ビッグサイト会議棟

文部科学省・財団法人文教協会主催

平成21年度大学教育改革プログラム合同フォーラム

4. 視察の成果(戦略GPの取組に参考になる点など)

【概要】

当フォーラムは、平成20年度および21年度に「国公立大学を通じた大学教育改革の支援充実」のための取り組みとして文部科学省に採択されたCOEおよびGPプログラム等の各大学の取り組み担当者が一堂に会し、講演、パネルディスカッションおよびポスターセッション等を行うフォーラムである。平成21年度の当フォーラムには、8,600名余りの参加者が集まった。

初日(7日)の第1部では、天野郁夫氏の基調講演の後、「総合的な学生支援」、「大学間連携の展開」、「大学院教育改革の現在(いま)」の三つの分科会が開催され、それぞれの分科会において事例報告がなされた。とりわけ、当GPに関係する「大学間連携の展開」分科会においては、遠隔地域での大学間連携の方策として、テレビ会議が有効に活用されていることが報告されるなど、その成果についての報告がなされた。

また、第2部である二日目(8日)には、「特色ある優れた学部教育の展開」、「大学教育の質保証」、「短期大学の挑戦」、「大学教育の国際化」、「がん対策専門医療人の養成」、「医療系人材の養成」の6つの分科会とともに職員向け講演が行われるとともに、両日を通じて取り組み校のべ340校がブースを設け、ポスターセッションが開催された。

【成果】

当シンポジウムは、COEおよびGP等の取り組みを行う各大学が、他大学との情報交換を行う機会でもあり、ポスターセッション会場における他大学との情報交換や、その際配布された資料等を入手することができた。他大学のGP等の事業の展開として、独創的な着想とその展開によって全国的にも注目を集めている取り組みは、その集客力においても群を抜いており、パンフレット作成の手法やWEBを通じた広報など、広報戦略にも注目すべき点が多かった。

一方、「大学間連携の展開」分科会における事例報告では、大学間連携の課題と期待される成果を、具体的に要約して知ることができた。大学間連携の取り組みを行う各大学においては、その連携を維持する一環として、教職員に、テレビ会議システム等のネットワーク等を管理・運営する一定の知識が求められ、今後はシステムに関する知識の習得とその共有化が必要であると認識した。

●●●●東北文教大学短期大学部GPフォーラム 視察等報告書○○○

1. 視察者参加者氏名 (◎文責者)

◎橋本 一雄

2. 訪問年月日

平成22年 6 月26日

3. 訪問先・学会名等

東北文教大学短期大学部GPフォーラム

4. 視察の成果 (戦略GPの取組に参考になる点など)

東北文教大学短期大学部 (旧山形短期大学) は、2008年度に質の高い大学教育推進プログラム (教育GP) 「『動ける・話せる』学生の実践的育成－地域教育交流拠点『やっぺ山形』構築に向けたカリキュラム改善」、翌2009年度には大学教育学生支援推進事業として、「ほいくる！こども王国」、および、「生活関連図による地域体験活動と授業の統合」がそれぞれ補助金交付事業として文部科学省によって採択されており、当フォーラムは、これらのGP事業等の総括と事業の報告を行う趣旨で開催されたものである。同フォーラムでは、冒頭、目白大学短期大学部学長の佐藤弘毅氏による「地域社会と短期大学教育」の基調講演が行われ、その後、各GP事業等の取り組みの内容と実践が担当教員より報告された。会場となった棟の各教室には、各取り組みで制作された印刷物等が展示され、併せて、プレゼンテーションが実施されていた。同フォーラムの報告からは、複数のGP事業等の採択に成功し、それぞれの事業が相互に刺激を受けながら、競争的に成果を積み上げている様子が伺われ、報告のあったどの取り組みにおいても、地域貢献を重視していた点が特筆される。同大学は、山形大学等を中心として2004年度に採択された現代的教育ニーズ取組支援プログラム (現代GP) 地域ネットワークFD「樹氷」にも参加しており、高等教育機関が連携しての教養教育プログラムの開発にも携わっている。地域との連携のみならず、高等教育機関との緊密な連携体制が構築されていることも、当GP事業にとっては示唆的であった。

●●●● 高等教育コンソーシアム信州第3回FDフォーラム 視察等報告書 ●●●●

1. 視察者参加者氏名 (◎文責者)

◎橋本 一雄

2. 訪問年月日

平成23年 1月22日

3. 訪問先・学会名等

高等教育コンソーシアム信州 第3回FDフォーラム

4. 視察の成果 (戦略GPの取組に参考になる点など)

当フォーラムは、信州大学全学教育機構等が中心となって構成されている高等教育コンソーシアム信州（平成20年度の大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム（戦略GP）に採択）が実施するFDフォーラムである。同コンソーシアムは、長野県内に所在する8つの四年制大学によって構成されるコンソーシアムであり、参加する大学間において遠隔授業システムを用いた授業の受発信を行い、単位の授与・認定を行っている。第3回目となる今回のフォーラムでは、単位互換制度の運用に関する事例の報告とパネルディスカッションが行われ、テレビ会議システムを用いた遠隔授業の課題が各大学から報告された。同システムを用いた単位互換授業では、授業者と受講者との距離的な制約を可能な限り解消するため、映像配信上の工夫、配布資料を制作するうえでの配慮・工夫、および、授業準備をするうえでの必要事項等が報告され、遠隔授業による単位互換を今後実施する当GP事業にとっても有用な知見を得ることができた。当GP事業では、とりわけ、上田女子短期大学側において遠隔授業システムを用いた授業配信の実績がなく、現状において、設備も必ずしも十分ではないことから、円滑な遠隔授業システムの運用に求められる機器等についての情報も得ることができた。

〇〇〇大学教育改革プログラム合同フォーラム(H22年度) 視察等報告書 〇〇〇

1. 視察者参加者氏名 (◎文責者)

山口 美和 (教材・カリキュラム開発部会／上田女子短期大学)
谷塚 光典 (教材・カリキュラム開発部会／信州大学)
橋本 一雄 (戦略GP推進室／上田女子短期大学)
◎高柳 充利 (戦略GP／信州大学)
橋詰 聡美 (戦略GP推進室／上田女子短期大学)

2. 訪問年月日

平成23年 1月24日～1月25日

3. 訪問先・学会名等

秋葉原コンベンションホール他周辺会場
文部科学省・合同フォーラム推進事務局
平成22年度大学教育改革プログラム合同フォーラム

4. 視察の成果 (戦略GPの取組に参考になる点など)

平成23年 1月24日10:00にアキバ・スクエア屋内スペース (秋葉原UDX 2階) にてポスターセッションを見学。

10:30からは秋葉原コンベンションホール (秋葉原ダイビル2階) にて行われた基調講演「大学教育改革の意義と必要性 その質の保証」(金沢工業大学 学園長・総長 黒田壽二氏) に参加。

昼食時に山口美和専任講師ならびに橋本一雄助教、橋詰聡美事務補佐員 (以上、上田女子短期大学) ならびに谷塚光典准教授 (信州大学) と会合をもち、ポスターセッションや基調講演で得た成果を共有すると共に戦略GPの事業にどのように反映してゆくかについて意見交換を行った。

13:30からはUDXギャラリーにておこなわれた分科会3に出席。「大学教育の国際化」というタイトルのもと、国際化拠点整備事業 (グローバル30) に携わる、ソニー株式会社、筑波大学、早稲田大学、九州大学の各機関の取り組みについて学ぶ機会を得た。

15:30からは秋葉原コンベンションホールにておこなわれた分科会2に参加。「大学間連携の展開」というタイトルのもと、大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラムにたずさわる旭川医科大学、同志社大学、仙台高等専門学校等の機関の取り組みについて学ぶ機会を得た。戦略GPに取り組む他学の発表は、今後の本学における事業展開の比較検討の貴重な資料となった。翌25日は10:00からのポスターセッション、10:30からの各分科会にて資料収集を行った。

全国のGP事業の取り組みを概観することができる有意義な出張となった。

〇〇〇高等教育コンソーシアム信州第5回FDフォーラム 視察等報告書 〇〇〇

1. 視察者参加者氏名 (◎文責者)

◎橋本 一雄

2. 訪問年月日

平成23年 9月14日

3. 訪問先・学会名等

高等教育コンソーシアム信州 第5回FDフォーラム

4. 視察の成果 (戦略GPの取組に参考になる点など)

当FDフォーラムを主催する高等教育コンソーシアム信州は、信州大学全学教育機構をはじめ、長野県内の四年制大学（計8大学）によって構成されており、会員校である大学間では、遠隔授業システムを用いた単位互換授業が行われている。このため、上田女子短期大学と信州大学教育学部間での単位互換授業を目的とする当GP事業においても、遠隔授業システムの運用や単位互換授業の実施方法等の点で多くの示唆を得ているところでもある。今回のFDフォーラムにおいても、遠隔授業システムの概要、また、運用上の課題等が各大学から報告され、履修者への情報発信として、「ビデオシラバス」が有効であること等の報告があった。同コンソーシアムにおいては、eラーニング的な活用も可能な自動収録装置等が整備されており、遠隔授業実施に係る各大学の人的（事務的）負担も相応に抑えられていることが分かった。この際、遠隔授業は、履修者の授業満足度の観点からすれば、対面授業に勝ることはないのではないか、という課題も提示され、遠隔授業における学生の授業満足度を高めるためにはどのような方策が必要かとの議論も行われた。今回のフォーラムでは、上田女子短期大学と信州大学教育学部の連携を図る当GP事業について紹介を行う時間をいただいた。現状の課題として、遠隔授業における双方向性の確保の問題や板書方法等についての課題があることを報告し、解決策を請った結果、iPad 2等の最新のICT活用方法等の情報を得た。こうした情報をもとに、平成23年度後期の相互乗り入れ授業から、その改善を試みているところである。

〇〇〇高等教育コンソーシアム熊本 視察等報告書 〇〇〇

1. 視察者参加者氏名 (◎文責者)

◎谷塚 光典 (教材・カリキュラム開発部会/信州大学)

2. 訪問年月日

①平成23年12月4日

②平成23年12月19日

3. 訪問先・学会名等

①高等教育コンソーシアム熊本「教員の資質向上と研修の在り方を探る」シンポジウム (於: 熊本学園大学)

②高等教育コンソーシアム熊本事務局 (於: 熊本大学)

4. 視察の成果 (戦略GPの取組に参考になる点など)

平成23年12月4日(日) 13:00~16:20に、熊本学園大学 (14号館・高橋守雄記念ホール) において開催された、高等教育コンソーシアム熊本主催のシンポジウム「教員の資質向上と研修の在り方を探る」に参加した。

プログラムは2部構成で、次のとおりであった。

◆第1部 基調講演

演題: 「教員の生涯にわたる資質の向上と研修の在り方」について

講師: 文部科学省初等中等教育局教職員課教員免許企画室長 新田正樹氏

◆第2部 パネルディスカッション「更新講習3年目の成果と課題」

コーディネーター:

熊本大学教育学部附属教育実践総合センター教授

吉田道雄氏

パネリスト:

熊本県教育庁義務教育課長

谷口慶志郎氏

熊本県立教育センター副所長

石井 祐治氏

熊本県小中学校長会会長 (熊本市立大江小学校長)

池邊 利昭氏

菊池市立泗水東小学校教頭

吉田 陽氏

高等教育コンソーシアム熊本 教員免許状更新講習事業部会委員

堀畑 正臣氏

オブザーバー:

文部科学省初等中等教育局教職員課教員免許企画室長

新田 正樹氏

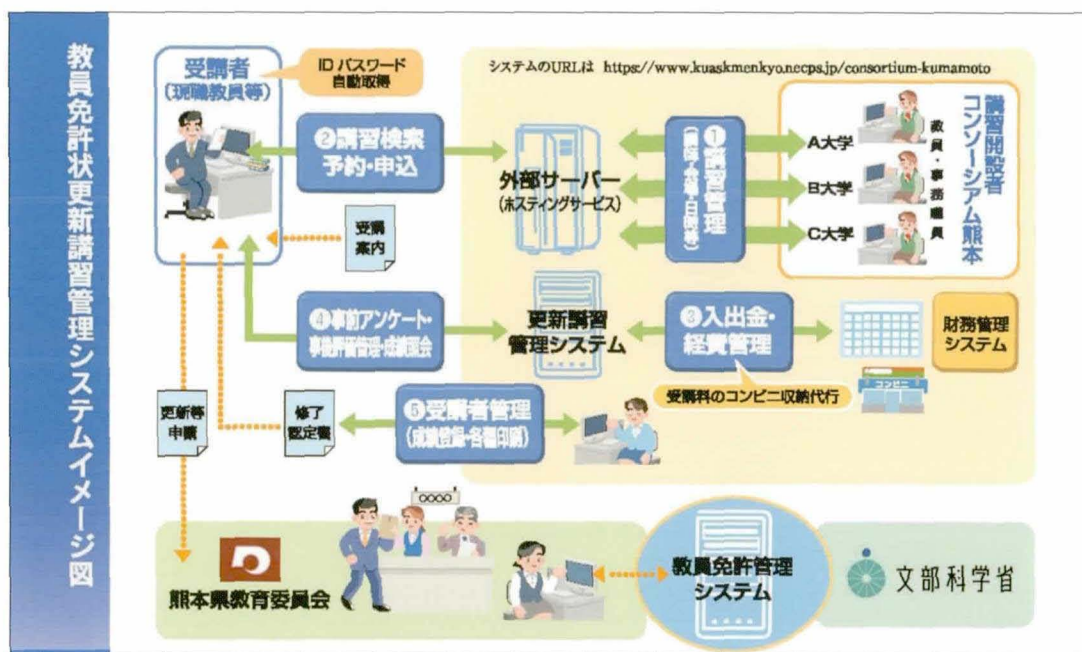
基調講演およびパネルディスカッションを通して、次のことがわかった。

○高等教育コンソーシアム熊本は、熊本県内にある高等教育機関全14校 (4年生大学だけではなく、短大・高専・放送大学学習センターも含む) が加入して、高等教育機関の教育・研究の充実を図ろうとしている。

○5つの分野 (教育・研究分野、学生交流分野、国際交流分野、地域連携分野、教員研修分野) ごとに事業推進部会を設置している。

○教員免許状更新講習は、教員免許状更新講習事業部会が担当して、高等教育コンソーシアム熊本の事業に位置づけている。

○教員免許状更新講習の実施だけではなく、「教員免許状更新講習管理システム」の共同運用や「受講料収納代行」 (コンビニでの収納) の共同運用も行い、受講者の便宜を図っている (次ページ図を参照)。



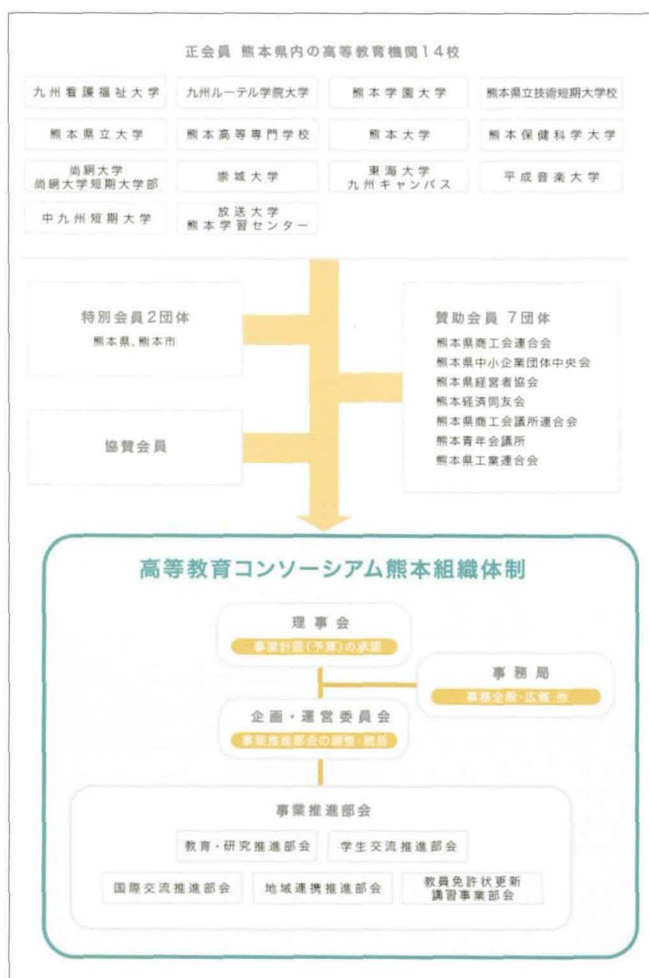
(<http://www.consortium-kumamoto.jp/data/menkyosystem.pdf>)

○次のような問題点もあることが示され、改善の要望があった。

- ・講習申込や受講料入金はシステム化されているが、募集要項が大学ごとに作成されているため、受講したい講習を探しにくい。
- ・講習申込受付が先着順であるため、募集開始時刻にシステムへのアクセスが集中したり、勤務に支障が出たりすることがある。

さらに、高等教育コンソーシアム熊本の運営体制を検討するために、同事務局を訪問し、聞き取り調査および資料収集を行った。その結果、次のことがわかった。

- 高等教育コンソーシアム熊本は、発足当初から現在の加盟機関から構成されていた。(※高等教育コンソーシアム信州の場合は、現在は、長野県内にある4年制の8大学から構成されており、短大・高専や放送大学学習センターは加盟していない。)
- 会費は、基本会費と機関規模による会費(総収容定員数×100円)からなる。会費に見合う効果が得られているかどうかは課題となっている。(※この点はどのコンソーシアムでも同様であると思われる。)



(<http://www.consortium-kumamoto.jp/about/>)

(2) 先進的事例の視察

〇〇〇〇山梨学院大学附属小学校 視察等報告書 〇〇〇

1. 視察者参加者氏名 (◎文責者)

徳井 厚子 (地域連携部会／信州大学)

小川 史 (教材・カリキュラム開発部会／上田女子短期大学)

◎山口 美和 (教材・カリキュラム開発部会／上田女子短期大学)

橋本 一雄 (戦略GP推進室／上田女子短期大学)

2. 訪問年月日

平成22年2月10日

3. 訪問先・学会名等

山梨学院大学附属小学校

4. 視察の成果 (戦略GPの取組に参考になる点など)

山梨学院大学・田中智志先生 (山梨学院大学附属小学校・校長)

小林智芳先生 (山梨学院大学附属小学校・教頭)

山内紀幸先生 (山梨学院大学附属小学校・校長補佐)

山梨学院大学附属小学校を訪問し、校舎及び授業の見学を行った。同校は、文部科学省「研究開発学校」の指定を受け、先進的な教育プログラムを実践している小学校である。教育は、「豊かな想像力をはぐくむ」「自律性を育てる」「ともに生きることを学ぶ」の3つの柱を基本に、基礎学力形成、環境教育、社会認識、異文化理解、感性の形成、メディア・リテラシー教育、モラルの形成、身体教育の8つの領域から構成されている。

同校では、従来の教科の枠は取り払われ、「言葉」「数」「身体」「人間関係」といった領域において、子どもの生活や経験と関連づけた学びが展開されている。こうした取組みは、現在、5領域と幼児の生活を中心に組み立てられている幼稚園・保育所での学びと、教科中心の小学校以上の学びとのあいだに存在するギャップを埋める試みとして注目すべきものであり、われわれがGPにおいて目指す幼・保・小の連携とスムーズな接続のあり方を考える上でも、同校への視察を通し、授業実践を実際に目にすることができたことは非常に有用であった。

田中智志校長からは、領域ごとに多角的な学習ポイントを設定して評価し、子どもひとりひとりの成長を記録する、独自の評価システム「学びのあゆみ」についても説明を受けた。子どもは、領域の学びの他に、年数回行われる「プロジェクト」にも取組み、テーマを決めて探求を深める。こうした意欲的な取組みを支えるためには、教員の高い専門性が必要であるが、校内での研修や同僚同士の連携を通して力量を形成していく体制が構築されていることも確認した。この点からは、今後のGPの取組みとして考えている、地域の保育者・教員のリカレント教育に対して、大いに示唆を得た。

〇〇〇郡山敬愛幼稚園 視察等報告書 〇〇〇

1. 視察者参加者氏名 (◎文責者)

市東 賢二、佐藤 厚、山口 美和、平澤 節子、佐藤 利佳子、
◎橋本 一雄

2. 訪問年月日

平成22年 2月26日

3. 訪問先・学会名等

学校法人 清和学園
郡山敬愛幼稚園、彩都敬愛幼稚園、こどもの園敬愛保育園

4. 視察の成果 (戦略GPの取組に参考になる点など)

【概要】

当視察は、佐藤厚准教授が指導を行う郡山敬愛幼稚園の保育発表会を参観し、同幼稚園の系列幼稚園・保育園の視察を併せて行うことによって、上記幼稚園・保育園が展開する先端的な保育方法およびその環境整備等から知見を得ることを目的とした視察である。

郡山敬愛幼稚園においては、各クラスごとに演劇の要素を取り入れた保育発表が行われ、午前と午後の二部に分けて実施された保育発表を参観した。

保育発表の前後には、理事長および主任教諭の先生方より、保育発表会の概要説明、同園における保育方針の説明、学園の概要等の説明を受けた。

また、郡山敬愛幼稚園の保育発表会終了後、新興住宅地域に立地する彩都敬愛幼稚園および大阪府茨木駅前に立地するこどもの園敬愛保育園を視察した。それぞれ立地の異なる三園でも一貫した保育の方針を看取することができた一方、それぞれの幼稚園・保育園固有の保育の方針や環境の整備なども見受けられ、その概要について、各園の担当者の先生よりお話を伺った。

【成果】

郡山敬愛幼稚園の視察においては、演劇の要素を取り入れた独自の保育方法を知ることができた。保育発表会では、園児の豊かな表現力と俊敏な動きが見受けられ、長年の蓄積によって確立された保育の方法と、それを盛りたてる同園の雰囲気、参加者一同感心させられた。また、郡山敬愛幼稚園の近隣には、一時預かり保育等を行う敬愛ファミリーサポートセンターが併設されており、同学園が、子育て支援を行う一体的な施設の整備を行っている点にも示唆を得た。

彩都敬愛幼稚園とこどもの園敬愛保育園においては、それぞれの立地に応じて、そこに通う園児の気質、さらには求められる保育のニーズも微妙に異なることから、園の環境や保育の内容を、それらのニーズに合致するよう工夫している様子が見受けられた。

当GPにおいては、現代的な課題に対処しうる保育者や小学校教員の養成プログラムの構築を目標に掲げており、その意味においても、多様なニーズを現場から感じとることのできたこの視察の意義は大きいものと思われる。

〇〇〇さくらんぼ保育園 視察等報告書 〇〇〇〇

1. 視察者参加者氏名 (◎文責者)

◎中山裕一郎 (教材・カリキュラム開発部会／信州大学)
藤田 英樹 (教材・カリキュラム開発部会／信州大学)

2. 訪問年月日

平成22年3月1日～3月2日

3. 訪問先・学会名等

社会福祉法人さくら会 さくらんぼ保育園 (埼玉県深谷市大谷)

4. 視察の成果 (戦略GPの取組に参考になる点など)

斉藤公子により埼玉県深谷市に創設された「さくらさくらんぼ保育園」(通称)は、こどもの発達段階に合わせた保育活動に特徴があり、音楽リズム活動や創作活動など、身体活動を通して乳幼児の身体的な発達を促そうとする保育が行われている。また障害児の統合教育、父母や地域との連携にも力をそそいでいる。幼小連携のカリキュラム開発の参考として造形教育、そして音楽教育の視点から「さくらさくらんぼ保育園」での教育内容を視察した。

造形教育においては、発達段階と描画との関係性に視点を置き、子どもの育ちを捉えるとともに、子どもの自由な造形活動の中に自然に他と関わる仕組みを題材として取り入れ(鯉のぼり、吹き流しの共同制作)互いに影響し合いながら発想や表現を豊かにしていく工夫がみられた。また、これらの造形作品の他、子どもたちの作品や描画をテーブルやトータムポールなどに加工し、遊びや園での活動の中で触れることの出来る総合的な園の環境作りに取り込んでおり、園全体が美的な展示空間となって機能していた。造形教育において幼児教育と小学校教育の教育内容の連動性は主に造形あそびを中心に図られているが、造形あそびから表現へと移行する過程で、如何に個々の表現の良さを気づかせ表現の芽へと繋げていくかが課題といえる。個々の造形物に価値を与える展示や鑑賞の工夫を保育者や親が関わることによって子どもたちの造形物の良さを引き出すよう造形活動をコーディネートしていくことは幼小で行う造形教育の要素として重要といえる。

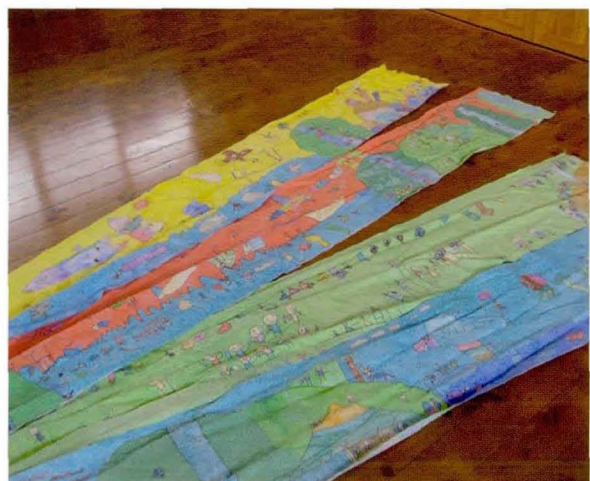
さくらんぼ保育園の音楽教育も特徴的であり、その「音楽リズム」活動は多くの著書でも紹介され、全国的にも知られている。このリズム運動は単に楽曲に合わせ動くのではなく、人間が生まれてから獲得していく動きの順次性に対応し、活動の順番が決まっている。たとえば、人間が生まれて初めに獲得する移動方法が寝返りであり、これに同保育園における<どんぐりころころ>の動きが対応している。そして<ズリ這い>が両生類のようなハイハイというように、一つ一つの動きには意味がある。静と動の使い分けも重要である。「メダカ」「汽車」「トンボ」と走る動きにゆったりとした弛緩の動きが組み合わされる。そして、これらの動きを統御し、次への動きへと誘い展開するのは保育者によるピアノである。子どもたちはピアノの音色(柔らかさや堅さなど)やリズムやダイナミクスのテンポの変化を注意深く聴き取り、それに対応し動く。鋭敏な聴覚の形成と身体の動きとの調和、それらを重視した保育が展開されていた。

訪問時、たまたま入園を希望する保護者と子どもとが来園していたので、話を聞くことが出来た。入園希望者が多く、順番を待つ状況もあるとのことであった。地域社会への園の方針や活動内容の発信がなされていることと、地域社会から園の取り組みが支持されていることが感じられた。同保育園の保育内容及び地域社会との関わりのあり方など、この点も我々が取り組んでいるGP研究の推進にも、大いに参考となるものであったと思う。

リズム体操



子どもたちの作品



●●●●名古屋大学・三重大学 視察等報告書 ●●●●

1. 視察者参加者氏名 (◎文責者)

山口 恒夫 (FD・SD部会／信州大学)
◎村松 浩幸 (FD・SD部会／信州大学)
◎安達 仁美 (教材・カリキュラム開発部会／信州大学)
山口 美和 (教材・カリキュラム開発部会／上田女子短期大学)

2. 訪問年月日

平成22年3月3日～3月4日

3. 訪問先・学会名等

名古屋大学・三重大学

4. 視察の成果 (戦略GPの取組に参考になる点など)

3日・名古屋大学：伊藤喬治氏 (大学院教育発達科学研究科博士課程後期課程1年)

北欧の幼稚園教育の動向を伺うことができた。特にノルウェーの幼稚園において、教室環境に配慮された幼稚園教育の様子は、日本と対比して興味深いものであった。また、大学と幼稚園の距離が非常に近く、研究者が日常的に幼稚園を訪問したり、幼稚園の先生が気軽に研究者に相談したりということが行われているとのことだった。この点は、戦略GPのテーマにも深く関わる内容であり、今後推進する上で、大変参考になると考えられた。

4日・三重大学：山田康彦先生 (高等教育創造開発センター教育開発部門長)・中西良文先生 (高等教育創造開発センター教育評価部門長)

豊富な資料を提供いただき、三重大学のPBL教育の概要、導入過程、現在の取り組み、今後の展開、教育評価について詳細に伺うことができた。三重大学のPBL教育は、eラーニングを駆使することと全学的に展開することが特徴で、問題発見解決型学習として現在250以上のPBL関連科目が開設されているとのことであった。関連の競争的資金も複数獲得していた。現場に行くタイプのPBLだけでなく、心理学を例にシナリオ型のPBLにも取り組んでいた。教育学部に特化した教員養成型PBLについての話も参考になった。

教育評価についても、修学達成度評価として質問紙調査をWebで行い、8割の学生から肯定的な評価を得ているとのことであった。また、学生自身が過去の結果をフィードバックして経年的にみられるようになっている点も本事業の展開に参考になると考えられる。さらに、PBL教育を推進するために、各学部中核メンバーによる宿泊型FDを実施し、参加者が各学部の中核になってリーダーシップを発揮できるような配慮もされていた。さらにPBL教育支援事業を実施しているなど、様々な実践展開も行われていた。

以上のように、本事業の取り組みについて、三重大学におけるPBL教育視察から多くの示唆を得ることができた。

〇〇〇子育て先進地への視察(ノルウェー、フランス) 視察等報告書 〇〇〇

1. 視察者参加者氏名 (◎文責者)

◎橋本 一雄
小川 史
大原 明美
高柳 充利

2. 訪問年月日

平成22年9月8日～9月16日

3. 訪問先・学会名等

子育て先進地への視察 (ノルウェー、フランス)

4. 視察の成果 (戦略GPの取組に参考になる点など)

当視察は、先進的保育を行っている欧州の保育施設等の視察および関係者との意見交換を目的としたものである。参加者は両大学から各2名とし、計4名の視察団を構成して、9日間の日程でノルウェー王国およびフランス共和国を訪れた。ノルウェーにおいては、ヘドマーク大学でノルウェーの保育・教育等に関する意見交換を実施、ノルウェーにおける教員養成、教師教育に関する現状と課題についての情報交換を行った。また、オスロ市内に所在するアーケスバッケン幼稚園を視察。ノルウェーの保育制度の概要と現状、移民等の保育をめぐる課題等についての意見交換を行った。さらに、後半の日程では、フランスに移動し、パリ郊外に所在するプティリュイソー保育所を訪問した。ここでは、フランスにおける保育の現状と課題についての情報交換を行い、各保育所には、心理に係る有資格者が配置されていること、いわゆる「保育ママ」との連携が図られていること等の状況を見聞した。フランスでは、原則として、3歳児のほぼ100%が保育学校に就学しており、保育学校の教育要領は、小学校の学習指導要領と連続性を持ったものとなっている。一方で、近年の女性の就業率の上昇に伴って、3歳児未満の保育を担う保育所のニーズが急激に増加しており、需要に供給が追いついていないという、日本の都市部と同様の課題があること等の情報交換も行うことができた。同保育所からは、保育方針等の資料（仏語版）（上記の保育所のオリジナル）を受領し、この資料は、当GPの教材・カリキュラム開発等にあたっても有用な資料となっている。



ノルウェー 教育研究省での意見交換



フランスの保育所



ノルウェー ヘドマーク大学視察



ノルウェーの幼稚園

〇〇〇外国籍児童等支援事業の視察 視察等報告書 〇〇〇

1. 視察者参加者氏名 (◎文責者)

◎橋本 一雄
◎安達佳与子
山口 美和
高柳 充利

2. 訪問年月日

平成23年12月2日

3. 訪問先・学会名等

上田市立南小学校、同東小学校

4. 視察の成果 (戦略GPの取組に参考になる点など)

当視察では、上田市で行っている外国籍児童等のための集中日本語教室「虹のかけはし」を視察し、担当教員等との意見交換を行った。視察に際し、上田市教育委員会学校教育課より堀之内テレーザ文子氏、幡場志保氏にご同行いただき、計6名での視察となった。上田市立南小学校では6年生1名、1年生3名の計4名の授業を参観した。児童は意欲的に学習に取組み、友人と積極的に関わる様子が見られた。授業は漢字の読み方、文章の構成、表現力や文章から感じ取る力を育むことを目標にした取組みで、ひとりひとりにあった教材準備がされていた。また、あいさつや「～をしてください」「お願いします」といった基本となる言葉がゲームに取り入れられ、日常生活において反射的に使用できるよう工夫された取組が見られた。その後訪れた東小学校では、6名の児童が4名の指導者（教員2名、県の支援員、ボランティア各1名）と学習をしていた。手づくり教材（漢字の偏、つくりを分けたカード）で漢字カルタするグループの他、市販の教材を工夫して使った学習をしていた。対応していただいた林先生からはこの活動において改善されてきたこと、依然として課題となっていることについて以下のような話があった。

- 学校での協力体制が整い、担任、教員同士の理解が深まってきた。
- 保護者の都合によって児童が学校に来られない日があること
- 不規則な家庭環境（保護者が遅くまでゲームをして子どもの宿題をみない）
- 保護者に地域とのかかわりが無い。会社のつながりだけで生活している。
- 子どもが生まれてから小学校に入学するまでの学びが欠けている。
- 中学生以降のサポートがない、といった問題が明らかになった。

以上から授業内容、学校での取組における現状と課題について多くの示唆を得ることができた。

東小学校虹のかけはしの様子



南小学校虹のかけはしの様子



〇〇〇関西学院聖和幼稚園 視察等報告書 〇〇〇

1. 視察者参加者氏名 (◎文責者)

市東 賢二

島崎あかね

平澤 節子

長櫓 涼子

佐藤利佳子

◎橋本 一雄

2. 訪問年月日

平成24年 2月27日

3. 訪問先・学会名等

学校法人関西学院 聖和幼稚園

4. 視察の成果 (戦略GPの取組に参考になる点など)

当視察の視察先である関西学院聖和幼稚園は、平成23年度の上田女子短期大学リカレント教育講座（講師：出原大関西学院聖和幼稚園長）において紹介された保育環境、地域との連携に関する視察、情報交換を目的として企画・実施されたものである。

当視察においては、幼稚園と保護者および地域との関わりを調査・分析する目的から、地域連携部会の教員3名、当幼稚園における保育者の教育方法等の観点から本学附属幼稚園前副園長を加えて視察団を構成した。また、視察先の幼稚園の設置・運営方針を熟知する教員1名と、連携コーディネータ1名が同行し、用いられている保育教材、特に、園庭における環境構成についての視察を行った。

視察先における幼稚園と地域との関わりを見る今回の視察を通じて、特に、保育の方法や環境構成、保育者に求められる知識や技能は、地域の文化にも対応したものでなければならないことなど、幼稚園・保育所等の保育施設は、地域に固有のニーズや課題に対応する必要があることを改めて感じた。

当視察の成果については、上田女子短期大学において、平成24年3月に各部会の部会員全員が出席した幼児教育学科会議において報告され、今後の学生教育に向けての意見交換が行われた他、同じく同年3月に開催された外部評価委員会後の総括において、各部会への報告・意見交換の機会が設けられた。

こうした保育機関と地域との関わりについての事例は、保育者・小学校教員の養成教育においても示唆するところが多く、今後、他の地域の事例等の収集・比較を行い、地域に固有のニーズや課題に各幼稚園・保育所等はどのように対応しているのか、分析を進めて行きたい。

(3) 学会等での成果発表

〇〇〇臨床教育人間学会カンファレンス 成果発表報告書 〇〇〇

1. 視察者参加者氏名 (◎文責者)

- ◎高柳 充利 (戦略GP/信州大学)
小川 史 (教材・カリキュラム開発部会/上田女子短期大学)
山口 美和 (教材・カリキュラム開発部会/上田女子短期大学)
橋本 一雄 (戦略GP推進室/上田女子短期大学)
山口 恒夫 (FD・SD部会/信州大学)
市東 賢二 (地域連携部会/上田女子短期大学)

2. 訪問年月日

平成22年9月3日～9月5日

3. 訪問先・学会名等

京都大学吉田キャンパス
臨床教育人間学会

4. 視察の成果 (戦略GPの取組に参考になる点など)

本出張では、京都大学吉田キャンパスにて開催された臨床教育人間学会第13回カンファレンスにおいて、上田女子短期大学ならびに本学部からの各出席者がそれぞれの学問的視座から本戦略GPの現時点での成果ならびに今後の課題につき発表することができた。聴衆は全国から参加しており、多様な観点から有益な意見交換を行うことができた。そうした意味において本出張は本事業にとって貴重な情報発信ならびに客観的検討の機会となった。

発表を担当したのは、発表順に、小川、山口(美)、橋本、高柳の4名である。発表のテーマと構成は以下のとおり。

「戦略GP「乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム『信州モデル』の実現」が臨む子ども・社会・教師」

(1) 事業の概要説明

小川先生から、戦略GPの事業概要につき、ご説明いただいた。

(2) 子どもをめぐる視点

山口(美)先生から、発達障害の子どもをめぐる子育て支援につき、本事業からのアプローチの一端をお示しいただいた。

(3) 社会からの眼差し

橋本先生から、外国籍児童をめぐる子育て支援につき、社会的な背景をふまえた上で本事業が取り組むテーマの重要性を論じていただいた。

(4) 教師教育との関連性

高柳より「乳幼児期から小学校までの育ちを見通す」という本事業の課題に基づき、教師の学びの捉え直しへの可能性を提示した。

〇〇〇イギリス教育哲学会ポスター発表 成果発表報告書 〇〇〇

1. 視察者参加者氏名 (◎文責者)

◎高柳 充利 (FD・SD部会／信州大学)
橋本 一雄 (戦略GP推進室／上田女子短期大学)

2. 訪問年月日

平成23年4月1日～4月3日

3. 訪問先・学会名等

英国 オクスフォード
Philosophy of Education Society of Great Britain (英国教育哲学会)

4. 視察の成果 (戦略GPの取組に参考になる点など)

平成23年4月1日13:00に現地会場 (New College, Oxford, UK) にてポスターの掲示等開始。
13:30よりポスターセッションがはじまる。

本事業の取組につき「Problems of Child Rearing in a Globalized Community and the Task of Higher Education: In Search of a New Model of Teacher/Childcare Provider Education」とのタイトルでポスター発表を行なった。

同会場ではStudent Seminarも平行して開催。先セミナーの出席者もふくめ、ポスターならびに配布資料をもとに参加者と活発な議論、質疑応答をおこなう。その後、(夕食時間をのぞき) 21:45まで各発表に参加。特に、パトリシア・ホワイト氏による市民教育に関する基調講演は地域との連携のなかで活躍する保育士・教員の養成という本事業の関心と関連する部分の多い内容であった。また、分科会におけるロンドン大学大学院の三澤 紘一郎氏の発表は英国の教育哲学研究者の間で長年議論となっていたポール・ハーストとデビット・カーによる論争に正面から取り組むものであった。この論争は教育哲学をいわゆる純粋哲学との関係性においていかに位置づけるかというものであると同時に、教育哲学が教育実践との関わりのなかで自らをどのように規定してゆくかという性質を含むものであり、そうした意味において地域の保育者・教員養成の枠組みを、学生・大学教員・保育士・教師・地域住民らの実践のなかから根源的に問い直そうとする本事業への示唆に富む内容であったと感じた。

翌4月2日にロンドン・ヒースロー空港よりBA005便にて成田へ出発。

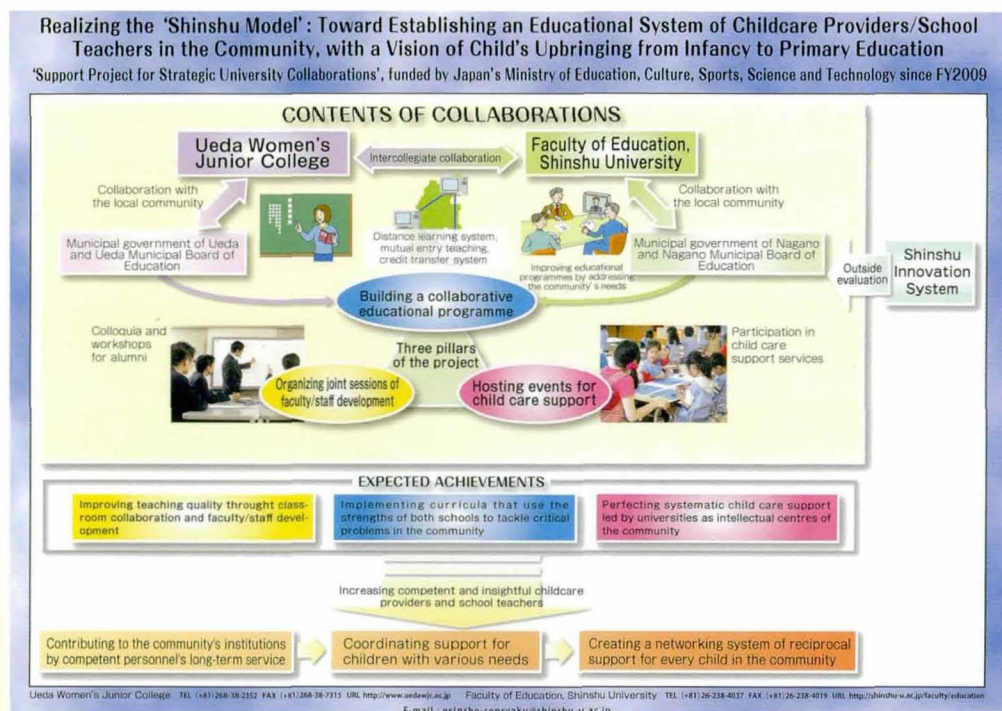
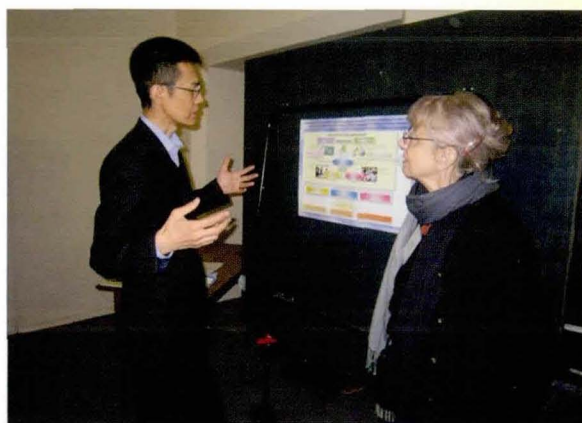
翌4月3日に成田へ到着。鉄道にて帰宅。

地域との連携に根ざす本事業の取組みを、会場の英国はじめ国際的な研究者のネットワークに発信することができた。また、数多くの示唆、激励、共感等のレスポンスを得ることができた。

帰国後、ロンドンにキャンパスのある大学の研究者 (大学院にて教育リーダーシップ・マネジメントを専門とする修士課程の責任者) より、本事業の学校－地域間の連携についての取組を高く評価する旨メールが寄せられた。



イギリス教育哲学会



〇〇〇全国保育士養成協議会研究大会 成果発表報告書 〇〇〇

1. 視察者参加者氏名 (◎文責者)

◎橋本 一雄

◎安達佳与子

小川 史

2. 訪問年月日

平成23年9月9日

3. 訪問先・学会名等

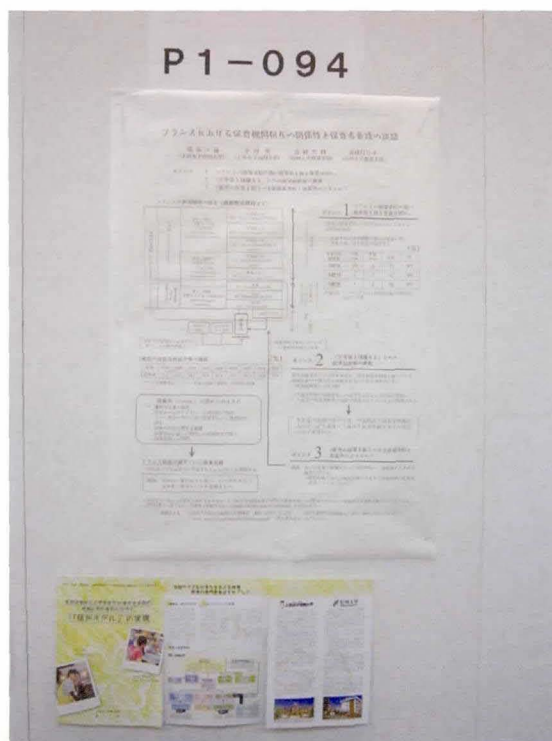
全国保育士養成協議会第50回研究大会

4. 視察の成果 (戦略GPの取組に参考になる点など)

当発表は、平成22年度に実施したフランスの保育所視察をもとに、フランスの保育制度について行った研究の成果をポスターで発表したものである。フランスには、保育ママ制度を含む各種の保育制度が存在するが、上記の視察においては、主に3歳児までの保育を担う保育所を視察した。フランスの保育所は、現在、女性の就業率の上昇に伴って、需要に供給が追いつかない状況にあり、政府は、喫緊に、保育所の受け入れ枠の増大を図っている。一方で、3歳児以降の幼児が通う保育学校の就学率は100%に近い状況にあり、保育学校は、小学校以降の学業の成否を左右する教育機関として位置づけられている。このため、主に3歳児を境とする保育所と保育学校の接続をどのように図るかという点も論点となっている。より早い時期から保育学校に通わせたいとするニーズがある一方で、2歳児から子どもを保育学校に通わせ、幼児教育を行うこと自体についての是非も問われており、これらのフランスの保育制度をめぐる現状と課題をポスターにまとめ発表した。発表当日は、この点についての詳細な分析にもとづく先行研究を発表されている研究者が来訪され、論点の設定や、翻訳の方法についての議論をさせていただくことができ、研究に残された課題等についての知見を得ることもできた。



ポスター発表



○○○ The Asian Conference on Education 成果発表報告書 ○○○

1. 視察者参加者氏名 (◎文責者)

◎高柳 充利 (FD・SD部会／信州大学)
安達佳与子 (戦略GP／信州大学)
橋本 一雄 (戦略GP推進室／上田女子短期大学)

2. 訪問年月日

平成23年10月27日～10月30日

3. 訪問先・学会名等

Osaka, Japan
The Third Annual Asian Conference on Education 2011

4. 視察の成果 (戦略GPの取組に参考になる点など)

【概要】

当コンフェレンスは、愛知県を拠点とするiaforがアジアの教育に関わる大学間、人的ネットワークの構築を図りながらアジアにおける教育の発展を目指すものである。10月28日(金)～10月30日(日)の3日間にわたって開催されアジアを中心に14ヶ国から250名の参加者が集まり、19の分野に分かれて研究成果の報告がなされた。

初日(28日)はJ.チャプマン氏による“Learning, Teaching, Leadership in a Globalized World”、D.N.アスピン氏による“Life Long Learning as a Climbing Frame”の基調講演が行われた。午後は5会場に分かれ、各会場3報告が同時進行(パラレルセッション)でなされた。午後は心理学者であるM.サティアダルマ氏による自然災害とトラウマに関するレクチャーが行われた。2日目(29日)3日目(30日)午前、午後もパラレルセッションが行われた。

【成果】

GP事業の活動報告およびGP事業の一環である地域子育てサポート事業にかかわる研究成果の発表を行なった。発表題目は“Linguistic Reflections on the Shishu Model: Examining Principles of Teacher/Childcare Provider Education from within the Local Community”。質疑応答を含め30分間のプレゼンテーションを行い、活発な意見交換が行われた。また発表者である高柳は会場司会者を務めた。

アジア各地から集まった大学関係者、教育関係者に本事業の取組みを周知できたことは大きな成果である。また分野を超え、多くの知見を得ることができたほか、国内外の大学間ネットワークを構築するきっかけとなった。

(4) 教材・カリキュラム開発部会

〇〇〇オンラインビデオ会議システムの活用 取組報告書 〇〇〇〇

担当部会・部門：教材・カリキュラム開発部会
取組担当者：谷塚 光典

1. 事業名

オンラインビデオ会議システムの活用

2. 事業の目的

戦略GP事業の一環として、ハイビジョンに対応したテレビ会議システムを導入し、上田女子短期大学と信州大学において開催されている授業の相互受講・単位互換、附属幼稚園における保育実習の相互参観・遠隔授業研究、学生フォーラムやFD・SD学習会の遠隔参加等、遠隔地を結びながら行われる事業への幅広い活用が期待されている。

本事業におけるテレビ会議システムを活用した大学間連携の概要と実施状況を報告するとともに、そこに浮き彫りになった今後の可能性・課題を検討する。

3. 事業の概要と成果

信州大学では、キャンパス間を接続したSUNSを活用しての遠隔講義（辻井、2002）の他、教育学部と附属学校間での遠隔授業研究（谷塚ほか、2009）や高等教育コンソーシアム信州の参加大学による遠隔講義（茅野ほか、2010）が行われており、テレビ会議システムが多く活用されてきている。そこで、本プロジェクトでは、上田女子短期大学と同附属幼稚園および信州大学教育学部附属幼稚園にハイビジョン対応のテレビ会議システムを導入した。以下、具体的な事例とともに活用法・利用状況を報告する。各企画の内容の詳細についてはそれぞれの報告文にゆずるとして、ここではテレビ会議システムの果たした役割に焦点をあて記述する。

またテレビ会議システムを利用しての大学間連携においては回線の安定化による確実な接続がなされ、活用事例が蓄積された。

1. 遠隔授業システムによる単位互換、相互乗り入れ授業

初年度はハード面の整備、拡充のためオンライン遠隔授業システムの選定作業、設置・導入及び試行的使用を行った。さらに、授業・会議・学習会等企画の遠隔開催に向けて、遠隔授業システムに接続して使用する周辺機器の整備を行った。

また、運用面では教材・カリキュラム開発部会が中心となり、授業期間中複数回にわたって遠隔授業システムを活用した授業の相互乗り入れの試行を実施した。具体的には平成22年度後期は「保育教材と指導計画の研究」（上田女子短期大学）、「臨床教育学概論」（信州大学教育学部）の授業において相互乗り入れが実施された。

これらの一連の授業・企画・会議等における試験的な遠隔授業システムの使用により、不具合や問題点がないかを精査することができ、また両大学間の授業聴講が可能になる環境へむけての改善がなされた。継続的な改善により、一大学では提供できない多様な教育メニューの学生への提供を可能とするカリキュラムの充実へ向けての進展がなされた。さらに両大学は単位互換の協定を結び、翌年度から新体制の実施を迎えるに至った。

最終年度は遠隔授業相互乗り入れの対象授業拡大と単位互換制度の運用が開始された。

平成23年度前期「保育内容総論」は上田女子短期大学において実施され、信州大学教育学部で7名の学生が履修した。後期は「発達と教育C」が信州大学教育学部から配信される予定であったが履修の希望者がなく、配信されなかった。

前年度実施された相互乗り入れが今年度も継続され9回にわたり接続された。また、相互乗り入れの拡大としては「障害児保育I」（上田女子短期大学）が、「教育内容・方法論C」（信州大学教育学部）において受信された。

遠隔授業システムを利用した授業の相互乗入を実施することにより、両大学の学生は距離的な制約にとらわれず、他大学の授業に参加することが可能となる。このことを通じて、自らが所属する養成課程の枠を越えて、保育者または小学校教員に有用な他大学の授業に参加することができるようになった。また、他大学の学生と同時に授業を受けることによって、より多角的な視座を身につけることができるようになり、学生が意見を交換し、異なる視点を提供しあうことで授業に対しての意欲や関心を高め、学生は、より深い学習の成果を獲得することができるようになった。

2. テレビ会議システム（同時中継）による合同学習会、委員会、部会の開催

テレビ会議システムを活用して両大学の教員によるFD・SD合同学習会を開催した。学習会は4回、委員会、部会は8回実施された。以下は実施されたFD・SD合同学習会の概要である。

第1回：2010年2月18日、山形大学の杉原真晃氏を迎えて、「大学における良い授業とは一学生の理解力と授業満足度を高めるための一」と題した教職員向けのFD・SD学習会を開催した。講師は上田女子短期大学におり、信州大学教育学部から遠隔参加した。28名参加。H.239に対応したビデオ会議システムを利用していることにより、学習会の後半に行われたグループワークの成果を書画カメラによって発表することによって、遠隔会場間で活発な意見交換を行うことができた。

第2回：2010年7月21日、名古屋大学の伊藤喬治氏を迎えて、「海外の幼児教育紹介—ノルウェーの幼稚園における教室環境の利用に学ぶ—」と題した教職員向けのFD・SD合同学習会を開催した。講師は信州大学教育学部におり、上田女子短期大学および信州大学教育学部附属幼稚園から遠隔参加した。43名参加。平日夕方に開催し、また、附属学校園においても遠隔参加できる環境を整えることにより、現職の幼稚園教諭もこのような学習会に参加できた。

第3回：2011年5月10日、上田女子短期大学の小野智明氏による「災害時の保育者・教育者の役割と子どもたちへの支援を考える—東日本大震災のボランティア活動を通して—」と題したFD・SD合同学習会を開催した。31名参加。

第4回：2011年6月23日、島根大学名誉教授・特任教授の山下晃功氏、アドバイザーに酒井産業（株）酒井久徳氏を迎え、第4回FD・SD合同学習会のためのプレワークショップ「地域産業を活かした幼児教育としての木育ワークショップの検討—『ロボ木—』で作るロボット寸劇—」と題した学習会を開催した。37名参加。

3. 遠隔保育実習参観

各附属幼稚園における保育実習の様子を学生および教員（幼稚園、大学）が相互に参観し合い、保育研究会を開催することを予定していたが、実際に参観する機会がもたれたため、実施に至らなかった。

4. 今後の課題

- 遠隔授業システムを利用した授業の実施により、学生に多様な学びの場を提供できるが、小学校教諭や保育士等の資格取得のための単位としては、現状では認定できない。大学間連携共同教育推進にあたっては、各大学の強みを活かすためにも、課程認定上の配慮が必要であろう。
- 今回導入した遠隔授業システムの更新時および通常の運用上の問題発生時（本体の故障・回線トラブル等）における経費負担が生じることを予定しておく必要がある。

〇〇〇単位互換授業・相互乗入授業の実施 取組報告書 〇〇〇〇

担当部会・部門：教材・カリキュラム開発部会
取組担当者：山口 美和

1. 事業名

単位互換授業・相互乗入授業の実施

2. 事業の目的

本事業の目的は、遠隔授業システムを用いて、学生に、自大学で開講されている授業以外の他大学の授業を受講する機会を提供することである。単位互換制度によって、自大学にない授業を選択でき、学生の興味や知識の幅を広げることができる。また、両大学で開講されている2つの授業を遠隔授業システムで結ぶ相互乗入授業の実施により、両大学でそれぞれ開講されている科目の特性を知り、保育者養成及び小学校以上の教員養成の特色を理解するとともに、両大学の学生同士が直接意見交換できる場を提供する。両大学の学生が異なる視点を提供しあうことで、授業に対する意欲や関心を高め、学生は、より深い学習の成果を獲得することができる。

3. 事業の概要と成果

【概要】

・単位互換

平成22年度より単位互換協定の締結等の準備を進め、平成23年度前期より以下の授業で単位互換を実施した。「保育内容総論」は信州大学教育学部から7名の受講があり、授業終了後の学生評価の結果も高かった。「発達と教育」については、23年度の受講希望者がなかった。

上田女子短期大学：保育内容総論（科目担当者：山口美和）1年次・前期開講

信州大学教育学部：発達と教育（科目担当者：高柳充利）後期開講

・相互乗入

相互乗入については、平成22年度後期より以下の科目間で試行的に実施を行い、平成23年度も同科目で乗入を実施している。

上田女子短期大学：保育教材と指導計画の研究（科目担当者：山口美和）1年生・後期開講

信州大学教育学部：臨床教育学概論（科目担当者：山口恒夫（平成22年度）／高柳充利（平成23年度））2－4年生・後期開講

さらに、平成23年度から新たに以下の科目間で乗入を実施している。

上田女子短期大学：障害児保育Ⅰ（科目担当者：長櫓涼子）1年生：後期開講

信州大学教育学部：教育内容・方法論C（科目担当者：安達仁美）2年生：後期開講

遠隔システムを使った乗入授業においては、幼稚園と小学校における実際の事例をもとに、問題を発見し解決の方策について考えるケースメソッド、幼稚園卒園時にどんな子どもに育ってほしいかを考えるKJ法、幼稚園年長児向けの指導計画を実践する模擬保育等を実施した。

【成果】

実際の問題について両大学の学生が意見交換を行える相互乗入授業は、学生の満足度も高かった。テレビ越しに学生間の意見交換を行い、幼稚園と小学校の違いと連続性の重要性について、学生の認識を深めることができた。

4. 今後の課題

単位互換の受講生確保が課題である。より魅力的な授業を提供するとともに、事前に内容を周知するため、シラバスの示し方等にも工夫が必要である。

単位互換授業風景



相互乗入授業風景



〇〇〇〇学生による実習の相互参観 取組報告書 〇〇〇〇

担当部会・部門：教材・カリキュラム開発部会
取組担当者：◎安達 仁美

1. 事業名

学生による実習の相互参観

2. 事業の目的

教材・カリキュラム開発部会が中心となり、上田女子短期大学と信州大学の学生が実施する実習の相互参観を実施し、保育者と小学校教員の養成課程でそれぞれが体験する実習とは異なる実習を参観する。両大学の学生が相互に実習を参観することを通じて、保・幼・小の連携を見通す視座を学生に与えることができる。

3. 事業の概要と成果

①平成22年8月24日 信州大学教育学部附属長野小学校

市東、山口、橋本、安達（仁）、高柳の教員5名による視察を行なった。

②平成22年9月10日 信州大学教育学部附属幼稚園・附属松本小学校

山口、佐藤、安達（仁）の教員3名、上田女子短期大学の学生3名とともに、信州大学教育学部附属松本小学校と幼稚園で行われていた基礎教育実習の視察を行った。小学校の全校研究授業（2年・国語）を参観した後、幼稚園で年少から年長の保育を視察し、その後、小学校4校時に行われていた実習生の授業（1年・国語、6年・図工、5年・算数）を参観した。また、予定はされていなかったが、幼稚園の副園長のご厚意で午後から幼稚園の音楽集会も視察することができた。小学校と幼稚園の実習を一度に参観することができたため、幼稚園と小学校の教育方法や教師の役割等の差異をより実感することができた。また、実習も終盤に差し掛かっていたこともあり、実習開始当初に附属長野小学校で視察した時と比較し、実習生の成長も感じることもできた。

今回の視察では、自身の実習を終えたばかりの3名の短大生から、率直な感想を聞くことができた。自分の実習園と比較し、実習スタイルだけでなく、園での教育方法の違いや、保育案の書き方の違い、また、遊んでいる子どもたちの姿からも刺激を受けたようである。また、私自身も先生方や学生さんをご案内し感想などを聞く中で、附属小・幼稚園の実習について改めて捉え直す機会となった。幼児教育学の講義の中で、他大学の幼稚園実習の様子についても、学生に伝えていきたいと思う。

上田女子短期大学の学生に聞くと、幼稚園実習のスタイルだけでなく、園の教育方針の違いや園児の姿などからも、新たに学ぶことが多かったようである。附属幼稚園しか関わりをもたない信大の学生にも、多様な幼児教育の方法を知る機会を作れないだろうか。次は、信州大学教育学部の教員と学生で、上田女子短期大学附属幼稚園の実習を視察できればと思う。

③平成22年10月8日 上田女子短期大学附属幼稚園

山口、橋本、谷塚、安達（仁）、高柳の教員5名、信州大学教育学部学生4名とともに実習の視察を行なった。

4. 今後の課題

今後は、直接の相互参観のみならず、遠隔システムを使った相互参観システムを確立し、両大学の人材育成システムの一部を構成する事業として発展させることも期待される。



上田女子短大生による信大附属幼稚園実習参観



信大生による上田女子短大附属幼稚園実習参観



参観後の意見交換会

〇〇〇教員による実習の相互参観、実習の評価基準の作成 取組報告書 〇〇〇〇

担当部会・部門：教材・カリキュラム開発部会
取組担当者：山口 美和

1. 事業名

教員による実習の相互参観・実習評価基準の作成

2. 事業の目的

両大学の教員とそれぞれの附属校園教員とがそれぞれの視点を共有して学生の実習の評価基準を作成することで、学生が実習において習得・形成すべき態度や能力がより客観的に明らかになる。

3. 事業の概要と成果

【概要】

平成22年度より、両大学の教員は、学生の実習を相互に参観し、実習のねらいと内容等について理解を深めてきたところである。これに加えて、平成23年の9月から、段階的に両大学附属幼稚園の教員も相互に日常の保育参観による交流を重ね、学生指導のあり方等について意見交換を行ってきた。

こうした流れを受け、平成23年度には下記のとおり、上田女子短期大学において両大学の附属幼稚園教員を交えて実習に関する会議の場を設け、意見交換を行うことができた。

会 場：上田女子短期大学 会議室

日 時：平成24年1月24日 16:30～18:00

出席者：上田女子短期大学…山口 美和・長櫓 涼子・橋本 一雄・橋詰 聡美

信州大学教育学部…高柳 充利・安達佳与子

上田・附属幼稚園…水野 美恵

信大・附属幼稚園…中村 深志

【成果】

この会議において、それぞれの附属幼稚園で使用されている実習の評価基準が資料として示され、各評価項目について具体的に検討された。地域における幼稚園の役割等、学生が実習中にあまり体験できない事柄に関する評価項目は、実習の中では評価しにくいとの意見が出た。また、意見交換を通じ、卒業後の長期的なライフサイクルを見据えた評価が必要であるとの視点を大学側・附属幼稚園側ともに共有することができた。会議において共有できたこの視点によって、両大学における評価基準を今後見直す契機とすることができた。

4. 今後の課題

実習の実施学年や内容等、実施の仕方に関しては両大学でかなり異なるものであり、それぞれの大学・附属園の特性や地域性を考慮した実習の評価基準を作成する必要がある。機械的に両大学の共通基準を作成することよりも、保育者養成・教員養成における理念の部分を共有することが望ましい。そのためにも、長期的な保育者・教員のライフサイクルを見据え、養成段階における実習の意義と位置づけを明確にしていくことが課題である。



上田女子短期大学附属幼稚園実習参観



信大附属松本幼稚園実習参観



信大附属長野小学校実習参観

〇〇〇〇保・幼・小連携共同モデル・コア・カリキュラムの検討 取組報告書〇〇〇〇

担当部会・部門：教材・カリキュラム開発部会

取組担当者：山口 美和・高柳 充利

1. 事業名

保・幼・小連携共同モデル・コア・カリキュラムの検討

2. 事業の目的

保・幼・小の連携共同モデル・コア・カリキュラムを開発し、それを両大学の授業内容に反映させることによって、学生は、保育者や小学校教員それぞれの領域にとどまらず、保・幼・小の連携を見据えた授業を体系的に受けることができるようになる。

3. 事業の概要と成果

本取り組みについて担当者間で検討をかさね、以下のような理念と方針を共有するに至った。

すなわち、本連携事業は、地域における幼小連携を担う保育者及び教員を育成することを視野に入れて、それぞれの養成カリキュラムを各大学で構成することが望ましいと考える。カリキュラム開発部会では、保・幼・小連携に明るい保育者及び小学校教員を各大学で育成するための中心（コア）となる教育の項目及び内容を検討し、養成段階において何をいつまでに学ぶのかを、系統的・構造的に科目内に配置することをもってモデル・コア・カリキュラムの案を示すこととする。つまり、科目そのものを指定することによってカリキュラムを構成するという構想ではなく、保・幼・小連携実施に必要な教育目標を定め、目標を達成するために必要な教育内容を各大学の既存の科目内で扱うことを提案し、網羅することによって、卒業までの期間内に求められる資質を育成しようとするものである。

こうした理解に基づき、現時点でのモデル・コア・カリキュラムの案を文書にとりまとめ、部会員と共有を行い、今後の更なる精緻化への道筋をつけた。

4. 今後の課題

現段階でのモデル・コア・カリキュラムの案を、部会員から寄せられた意見をふまえ、理念と手法のふたつの側面から更なる検討を加えることが待たれる。こうした議論を軸に「信州モデル」の深まりと広がりが促進されることが見込まれる。

(5) FD・SD部会

〇〇〇第1回FD・SD合同学習会の開催 取組報告書 〇〇〇

担当部会・部門：FD・SD部会

取組担当者：長田 真紀

1. 事業名

第1回FD・SD合同学習会

2. 事業の目的

FD・SD活動について先駆的な取組を研究・実践している講師を招聘し、講演およびワークショップを開催し、授業内容および方法のさらなる改善に向けた研修を実施することで、現時点における両大学のFD・SD活動の点検と、大学教育の質を高めるための今後の組織的な取組と個々の教職員の意識向上を図ることを目的とする。

3. 事業の概要と成果

【概要】

実施日時：平成22年2月18日 午後1時～3時半

会 場：上田女子短期大学（信州大学は、テレビ会議システムを利用した遠隔参加）

講 師：杉原真晃氏（山形大学基盤教育院・高等教育研究企画センター准教授）

テ マ：「大学における良い授業とは—学生の理解力と授業満足度を高めるために—」

内 容：①山形大学における豊富な実践例を踏まえた講演（「感動のある授業」「協同的な学習活動」「苦しさを超える達成感」「ケアが生む学生との信頼関係、学生の主体性」「構造のメタ認知」等について）②ビデオ上映（「大学授業のNG集」）③学生の「理解力」と「授業満足度」を向上させるための「5つの条件」を考えるグループワーク④発表会⑤質疑応答

参加者数：上田女子短期大学 14人、信州大学 14人

【成果】

講演やビデオ上映を通して、自らの教育活動を振り返る機会となり、FD・SD活動の取組をより身近で具体的なものとして捉えることができるようになった。また、グループワークや活発な討論によって、それぞれの教員の考え方や悩み、両大学のFD活動の取組を知ることができた。あわせて、各大学の教育理念と学生像に則した、独自の魅力ある「よい授業」の創出の必要性を十分認識することができた。

4. 今後の課題

両大学ともに、今後の学習会により多くの教職員の参加を促す必要がある。それによって各大学が、全学をあげて大学教育の質の向上に積極的に取組むきっかけになるからである。また、学生による授業評価方法等の改善や、それを具体的に教員が教育活動にどう反映したかなど、成果についての報告会を定期的の実施することが望まれる。



杉原先生の講演



グループワーク



オンラインビデオ会議システムで接続した長野会場の様子

第1回 FD・SD合同学習会

テーマ：

「大学における良い授業とは—学生の理解力と授業満足度を高めるために—」

日時：平成22年2月18日(木)13:00～
(16:20 終了予定)

会場：上田女子短期大学 (2階20番教室)
信州大学教育学部 (管理棟1階第2会議室)

※ テレビ会議システムを用いて、両大学合同で、同時開催します。

講師：杉原 真晃 先生

(山形大学 基盤教育院・高等教育研究企画センター 准教授)

お問合せ先：

上田女子短期大学 幼児教育学科 GP推進室
長野県上田市下之郷乙 620

TEL 0268-38-2352 FAX 0268-38-7315

E-mail : erinsho-senryaku@shinshu-u.ac.jp

第1回 FD・SD合同学習会アンケート結果

参加者：24人（上田女子短期大学14人、信州大学14人）

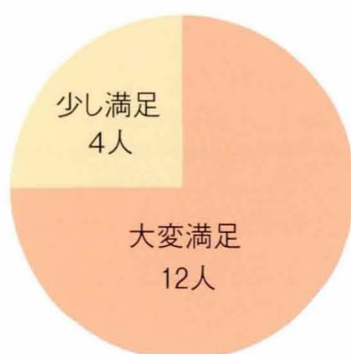
回収数：16枚

回収率：57.1%

【回答者の属性】

上田女子短期大学	8人	男	11人	教員	14人
信州大学	8人	女	4人	事務職員	2人
		不明	1人		

【学習会に対する満足度】



【本学習会のよかった点はなんですか？】

- ・事例が具体的であって、イメージしやすかった。
- ・ワークショップが含まれていた点。
- ・グループワークがあったこと。
- ・講師がよかった。
- ・上田で実施された本学習会を教育学部で参加できたこと。
- ・日常の身近なトピック（授業をどうするか？）についてざくばらんに話し合うことができて良かったです。それから上田女子短大の先生方との交流ができたことも良かったです。今後、テレビ会議システムが気軽に使える環境がますます整うことを期待しています。
- ・ワークショップでは、先生方の話が聞けて面白かったです。様々な目線から物事を考えるということはとても大切なことだと思います。意見交換の場はとても重要だと思いました。
- ・フランクな議論が出来たと思う。他の組織の考え方が垣間見えた点に意義があると思う。
- ・講義とグループワークがセットになっている点。
- ・教員同士の考えのベースが近かったことがあらためて認識できたこと。
- ・教育実践につながる意見交換ができた。
- ・議題提示がとても明確であった。
- ・複数の大学教員の方々のご意見を交流しながら伺うことができた。学内にいながら、外部とのコミュニケーションができるシステムの良さを実感した。
- ・杉原先生の平易な語り口で、FDのノウハウを学ぶことができました。DVDの内容はとてもユニークなもので、勉強になりました。
- ・グループワークをとおして、授業の質・内容について振り返り、反省する機会となった。意見を出し合う事で、同じような悩みを持っている事がわかった。
- ・自分の授業をふり返るよい機会になった。
- ・他の教員と教育方法について話し合う機会はこれまであまりなかったので、お互いの考えを知り、関係が深まった気がする。

【本学習会の改善すべき点、あるいは今後、期待・要望される研修はどのようなものですか？】

- 遠隔会議システムにおいて、画面のPoor Qualityは全く気にならない一方、音のPoor Qualityはきわめてaudienceを疲れさせることにびっくりしました。
- 生徒の立場・目線から「こんな先生、こんな授業がいい」といったVTR、アンケートなどをまとめて発表したら面白いかなと思いました。
- 教わる側のコメントも聴することができればよいのでは。
- グループワークの時間がもう少し長いとありがたい。
- 教員だけではなく、職員の参加があればFD・SDの学習会としてもよりよいものになるだろうと思いました。
- 学生の参加を工夫しても良いのでは。
- もっとたくさんの教職員に参加していただけるよう、広報活動を充実させていくべき。
- グループワークの時間をもう少し長く頂ければ良かった。
- 特に改善すべき点はありません。このような会をくり返し行うこともいいと思います。

〇〇〇第1回学生フォーラム 取組報告書 〇〇〇〇

担当部会・部門：FD・SD部会

取組担当者：小野 智明

1. 事業名

第1回学生フォーラム

2. 事業の目的

FD・SD部会が中心となり、両大学の学生によるフォーラムを共同で開催する。保育者養成校と小学校教員の養成課程における実習及びカリキュラムのあり方について学生同士が討論を行ない、相互理解を深めるとともに、教育観や子ども観の違いについて確認し、専門職としての自覚を深める。

3. 事業の概要と成果

【事業の概要】

H22. 2. 2 13:00～15:00 学生フォーラム打ち合わせを実施した。

H22. 3. 9 12:45～16:30 第1回学生フォーラムを開催した。

1. 会 場 高砂殿

2. 参加者 学生48人、教職員26人

3. 概 要 第1部 聞いて！私たちの実習（参加各校の学生のプレゼンテーション）

第2部 ワークショップ 理想の実習を提案しよう（グループに分かれて理想の実習についてまとめ、発表する）

【効果】

学生が主体となって、「実習」というテーマで語りあうこの体験は専門職としての視野を広げ、チームアプローチを体感する契機ともなるものであった。

学生からの反応としても趣旨とたがわず、「他校の実習は方法や手段が異なるが、対象となる子どもや地域住民のQOLを高め、地域での生活を支えていくという目的は合致するものであった」という意見が多く寄せられたことから、その評価としても高いものであったと判断できる。また、フォーラム時のアイスブレイクなど、教員が持つスキルを共有する機会としても有効であった。さらに、信州大学、上田女子短期大学の担当教員が本事業実施に向けて、意見交換を重ねることによって、教員同士のゆるやかなネットワークが図られた。

4. 今後の課題

今後の課題として、これからも各教員が有するスキルを交換できるような機会を設けることや、教員のみならず、事務職員の交流を図ること、さらには地域貢献として教員が有するスキルや知識など、リカレント教育の機会を設け、地域貢献に役立てることなどがあげられる。

このような課題を踏まえ、さらなる教員同士のネットワークを深め、またそのネットワークが地域に広がっていくような事業の展開を図ることが必要である。具体的には、卒業生の需要サイド（幼稚園、保育所、学校等の長）を対象とした調査にこの事業で得られたノウハウを活用することが考えられる。



挨拶：上田女子短期大学松田前学長



第1部：学生のプレゼンテーション



第2部：ワークショップ



ワークショップのPRODUCT

「楽しいけどお勉強なの？」

～ 教師のタマゴの教育実習奮闘日誌～

信州大学教育学部
生活科学教育村松研究室3年
小島 一生

実習を終わろう「学校教員になる」

目次

1. 信大の教育実習
2. 私の教育実習
3. 教師になるために…

実習を終わろう「学校教員になる」

信大の教育実習



実習を終わろう「学校教員になる」

信大の教育実習

教育実習の種類	教育実習の目的	教育実習の期間	教育実習の場所	教育実習の担当者
基礎教育実習	基礎的な教育実践の経験	1週間	市内小学校	小島一生
応用教育実習	応用的な教育実践の経験	2週間	市内中学校	小島一生

実習を終わろう「学校教員になる」

信大の教育実習



実習を終わろう「学校教員になる」

信大の教育実習



実習を終わろう「学校教員になる」

信大の教育実習



実習を語ろう「学校教員になる」

7

私の教育実習

出会ったのは...

32人の子ども達と担任のF先生

実習を語ろう「学校教員になる」

8

私の教育実習

実習の1週の目標

- ・ 子ども達との信頼関係を築く
⇒ クラスの全員と話を
⇒ 子どもの話しに全力で耳を傾ける
- ・ 初授業を乗り切る

実習を語ろう「学校教員になる」

9

私の教育実習



実習を語ろう「学校教員になる」

10

私の教育実習



実習を語ろう「学校教員になる」

11

私の教育実習

「これを教える」というよりは、
「どうやったら楽しく学べるか」

子ども達の様子を見て「これはヤバイ」となんとなく感じ、結果、授業の初っ端の段階で指導案を一時破棄、集中力が完全に切れていた子ども

子どもと関わる活動を多く行ってきたことによる「実践知」があった

「なったか」という反省は残りますが...

「初めての授業で自分は何をやらかしたんだろう...」と終わった後で思いました。とにかく楽しくやろうと思って実際に出来たのは、これまで子どもと関わる活動を多く行ってきたことによる「実践知」があったからではないかと思っています。

実習を語ろう「学校教員になる」

12

私の教育実習



実習を語ろう「学校教員になる」

13

私の教育実習

授業終末に学習カードで行った事後テストの結果、位取りを
6人に1人が解らない授業だった

「楽しい数遊び」だったが、
「算数の授業」になっていなかった

・位取りの場面で「並べる」という作業をせずにただ
事を出すとばかりの授業であった
願いが本当に反映できるよう
内容設定を行う

・子ども達どうしが追求をとおしてつながれる場面を意識して設ける
・ついて欲しい力、懸念が本当に反映できるよう内容設定を行う

実習を語ろう「学校教員になる」

14

私の教育実習



実習を語ろう「学校教員になる」

15

私の教育実習

「先生のお勉強はいつも楽しいけど、
これってお勉強になるのかな？」

実習を語ろう「学校教員になる」

16

私の教育実習

「楽しさ」が
「教科の楽しさ」ではない

実習を語ろう「学校教員になる」

17

私の教育実習

実習最終週の目標

- ・教科の本質で楽しませる

実習を語ろう「学校教員になる」

18

私の教育実習



実習を踏ろう「学校教員になる」

19

教師になるために...

実習は普段の勉強の一環

実習を踏ろう「学校教員になる」

20

教師になるために...

日々勉強

実習を踏ろう「学校教員になる」

21

前期テーマ:施設の入所児童を理解し、
コミュニケーションを深める中で個別的・
集団的援助について学ぶ

後期テーマ:施設のソーシャルワークの
理解を深めるために、施設機能を理解す
る

長野大学 社会福祉学部 4年
岩木 麻実

社会福祉援助技術 現場実習について①

- ・ 社会福祉士の受験資格を得るための
もので、ソーシャルワークの実習
- ・ 目的
 - ①知識と技術を現場で実践的に理解する
 - ②職業倫理・価値観を学び、援助者としての
自覚を学ぶ

社会福祉援助技術 現場実習について②

- ・ 実習時間
前期・後期合わせ180時間以上かつ4週間以上
◎前期実習(2008年8月20日～8月31日)
- 達成課題
 - ・児童の個性を理解した上で、円滑なコミュニケー
ションを図る
 - ・個別的援助、集団的援助について児童との関わり
を通して学ぶ

社会福祉援助技術 現場実習について③

◎後期実習(2009年2月9日～2月20日)

達成課題

- ・家庭支援について学ぶ
- ・関係機関との連携について学ぶ

Aくん(4歳0ヶ月・男児)の診断

- ・ADHDの診断がなされている
- ・てんかん発作があり、現在検査・服薬中
(1日1回)

Aくんの入所背景

- ・母親からの虐待相談により児童相談所で一時保
護(2週間)の上、入所(3歳8ヶ月)
- ・両親共働きで、家庭において母親が祖父母の自
宅介護(ホームヘルパー等のサービス利用なし)
- ・母親は、介護ストレスとともに多動で思い通りにな
らないAくんへの育児にイライラが募り、Aくんを叩い
たり蹴ったりしてしまう
- ・このまま家庭での養育を継続すると、再度Aくん
に対して暴力等に至ることが危惧され、入所

Aくんとコミュニケーションについて

- ・言葉での理解が低いため、絵を見せたり、実物を示すことで対応する
- ・OT(作業療法士・月2回)では、母親を交えて目的のある遊び、ルールの指導をし、記録している
- ・ST(言語療法士・2ヶ月に1回)では、Aくんは2歳程度の言語発達のため言語指導を行っている

⇒ これらのことからAくんと関わり(声掛け)の際は、実物を見せながらゆっくりはっきり話すことを心掛け、Aくんのペースに合わせる必要がある

Aくんの行動の様子及び関わり①

(様子)

Aくんは集団の中で興奮しやすい。他児に敏感に反応し、常に走り回ったり、大声を出したりしていた。

(関わり)

集団の中では興奮するにで、落ち着かせるために2人だけの場面を作り、Aくんの頭を撫でながら膝枕をした

⇒ ADHDの子に対しては、刺激の少ない環境を設定し、個別的な対応が必要なのではないだろうか

Aくんの行動の様子及び関わり②

(様子)

他の幼児に対して攻撃的な言動が見られる。(遊んでいる時に「てめえ」と大声を出したり叩いたりする)

(関わり)

Aくんと2人きりの落ち着ける環境を作り、「Aくんも叩かれたら痛いよね?」と視線を合わせた状態で声掛けする

⇒ Aくんの生育歴から叩かれたりしたため、攻撃的な行動を学習したのではないだろうか

Aくんの行動の様子及び関わり③

(様子)

Aくんを含めて実習中関わった子どもの多くは「お母さんに会いたい」という想いを口にしており、職員がその想いを理解して、一対一の関わりを多くしている

(関わり)

Aくんの想いを受け入れながら、本人のやりたいことを聞き出し、それに沿った遊びを行う

⇒ 想いを受け入れるためにも、一対一の関わりや集団中での個別的な関わりが必要だが、職員不足からそれができない現状にあり、そのことから施設の職員基準を引き上げる必要があるのではないだろうか

家庭支援の重要性

- ・ 担当保育士がOT訓練などに母親と同席したり、Aくんの保育ノートを交換したりと、連絡をこまめにとって信頼関係を形成している
 - ・ Aくんの母親は児童相談所のペアレント・トレーニングに参加している
 - ・ 施設、児童相談所、病院の担当者会議で随時情報を共有している
- ⇒ 家族と施設の信頼関係の形成に努めることと関係機関が連携をして、その情報を施設内の保育に活かしていくとともに、家庭での育児に活かしていくことが重要である

テーマ「基礎看護学実習を通して患者さんから学んだこと」

長野看護専門学校 第1看護学科 1年生 中村汐梨 今井夕貴

I. 基礎看護学実習の概要

1. 基礎看護学実習 I-1

- (1) 実習目的：病院で療養する患者の療養環境を知り、コミュニケーション技術を学ぶ。
- (2) 実習時期・期間：7月 3日間
- (3) 実習内容：病棟の指導者（看護師）に会話できる患者さんを選んでいただき、患者さんの承諾を得てベッドサイドで会話する。
シーツ交換を病棟の指導者と一緒に行う。
- (4) 実習前の準備：学校の実習室において、友達同士で水銀血圧計を使い血圧測定の実習をしたり、実習室のベッドでシーツ交換を実習したりして実習に臨んだ。

2. 基礎看護学実習 I-2

- (1) 実習目的：患者に適した日常生活援助を理解する。
- (2) 実習時期・期間：12月 5日間
- (3) 実習内容：病棟の指導者と一緒に患者さんの日常生活援助を行う。
日常生活援助を実施し、なぜその方法で行うのかを考えることを通して患者さんのニーズを知る。
- (4) 実習前の準備：学校の実習室において、清拭・足浴・洗髪・寝衣交換・シーツ交換・バイタルサインの測定など、さまざまな看護技術をトレーニングして実習に臨んだ。

Ⅱ. 基礎看護学実習Ⅰ―Ⅱで患者さんとの関わりから学んだこと

1. 「本当はシャワー浴をしたいと思っていたAさんとの関わりからの学び」

私が基礎看護学実習の5日間、患者さんの日常生活の援助を通して学び、考えたことは、「病院で行われている援助と学校で学習した援助での患者さんの反応の違い」と「ニードを満たしたときの患者さんの反応」についてです。

実習中にさまざまな援助を経験させていただきましたが、どれも学校で学習した方法とはぜんぜん違うものでした。私の受け持ち患者さんのAさんは、子宮頸癌を患っていて、放射線療法をしていました。右腎血管筋脂肪腫、高血圧症の病歴がありますが、活動の制限はありませんでした。しかし、Aさんは普段はシャワー浴をされていましたが、実習中は熱があり体調が優れずシャワー浴をすることができない状況でした。

Aさんに清拭をすることを提案し、清拭をさせていただきました。なぜならば、授業での清拭の目的は「汗を取り除き、清潔にすると共に、爽快感を得ることができる」と学習したためです。

清拭のときの様子は、Aさんは自分自身で身体を拭ける方なので、Aさんの手の届かない背中のみを拭きました。清拭後に私が「どうでしたか？気持ちよかったですか？」と尋ねると、Aさんは「気持ちよかったですよ。けど、やっぱりシャワーのほうがいいね。」とおっしゃっていました。

私は、Aさんは熱があり汗をかいているだろうから、清拭をしたらサッパリするのではないかと考えていました。しかし、Aさんの清潔に対する本当のニードは「シャワーをしたい」ということでした。学校での清拭の演習では、患者役の学生に何を聞いても「大丈夫です。気持ちいいです。」としか返ってこなかったのが、Aさんから本当のニードを聞いたとき、私は戸惑ってしまいました。しかし、このときに患者さんは何を望んでいるのかを知ることができる様に、コミュニケーションをとりながら日常生活援助をおこなう必要性が改めてわかりました。

次の日にAさんから「少し熱があったがシャワー浴をした」ということをお聞きし、Aさんの満足そうな顔を見て安心しました。生理的ニードが満たされると、患者さんはこんなにも明るくなれるのだと思いました。加えて、Aさんは自分でほとんどのことができる方でしたので、自立を助けることによりAさんの承認のニードも満たされたのではないかと思います。

病棟の実習では、患者さんの訴えを直接的に感じ取ることができます。患者さんの訴えそのものが、患者さんのニードにつながるということを、実習を通して改めて学び、理解することができました。

この5日間、何か援助しなくてはいけないと思っていましたが、患者さんから離れることも患者さんにとっては援助となるということをAさんとのかかわりを通してわかりました。看護師が患者さんに何かをやることだけが援助ではなく、患者さんの思いや意思を尊重することが大切だと思いました。

これから看護を学んでいくものとして、「患者さんの本当のニードをわかり、適切なアセスメントから、患者さんが自分自身では満たすことのできないニードに対して、援助できる看護師になりたい」と思いました。Aさんとの関わりを通して、学校では学べない深い学びができたと思います。この学びを、これからの学校での学習に生かしていきたいと思います。

2. 「気持ちいいはずと思っていた入浴を苦痛に感じているBさんとの関わりからの学び」

私は基礎看護学実習では緩和ケア病棟で実習をしました。私が受け持たせていただいたBさんは浮腫（むくみ）があり特に下肢の浮腫が著明で、1日のほとんどをベッドの上で過ごされている方でした。また、オピオイドによる疼痛のコントロールもされていました。

実習をしていて驚いたことは、Bさんの娘さんたちが毎日病院に訪れていたことでした。朝から昼過ぎまでBさんの側にいて、日常生活の援助を部分的に担っていました。お茶を飲むように勧めるなど水分補給を促したり、お昼ごはんを食べる様子を見守られたりしていました。Bさんは「いつも助かっている。ありがたい。」と嬉しそうに話されていました。

また、娘さんは「1ヶ月前とはぜんぜん違う。ここまで回復したのだから頑張って生きて欲しい」と話されており、Bさんをととても大切にしている様子が伺えました。Bさんが日常生活をおくる上で家族の存在はととても大きく、支えになっていることがわかりました。

実習2日目にBさんは、特殊浴をおこないました。私は、毎日入浴できない患者さんにとって入浴はうれしく楽しみなものなのだと思っていました。しかし、Bさんに入浴について尋ねてみると「入りたくない。」や「動きが多くて、あっち向いたり、こっち向いたりするのは痛い」「強くこすられると痛い。」と言っていて、苦痛を伴う行為なのだとわかりました。私たちが良いと思って行う援助も、患者さんにとっては必ずしもよい援助とは限らないことがわかりました。

このことから、改めて患者さん中心にものごとを考えることの大切さを感じました。援助中患者さんとのコミュニケーションをとおして、患者さんはどうされたら痛いのか、どこが痛いのか、どうしたら楽なのかを把握することが大切だとわかりました。Bさんだったら、体位変換が少なく負担をかけないでできる方法を考えたり、身体をさすったり、拭く力加減を工夫することでBさんの苦痛を最小限にできることがわかりました。

少しの工夫でBさんにとって入浴は、不快なものではなくなることもわかりました。痛いからやりたくないといっていた入浴も、その患者さんにあった方法で援助することができれば、気持ち良いからまた入りたいと思うように、援助の仕方によって患者さんのニードは変化するのでということがわかりました。

5日間の実習を通してさまざまなことが学べ、患者さんの小さな変化やニードに気付くことのできる看護師になりたいと思いました。この実習で学んだ「患者さんの変化に気づき、その患者さんにあった方法で援助することにより、患者さんのニードは変化する」ということを忘れずに、次の実習に生かしていきたいと思います。

ワークショップの進め方のPPT資料

ワークショップの進め方

～活発な話し合いのために～

このワークショップは何をするのか

- 実習中に困ったこと。大変だったこと
- 実習で得たものとは
などを自分自身の体験を交えて自由に話す



(例) 実りある実習にするための私達の考え

(例) こんな実習はいやだ

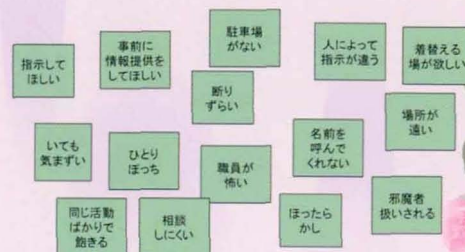
(例) 自分たちにとって実習とは……

話し合いのルール (これは守ろう！)

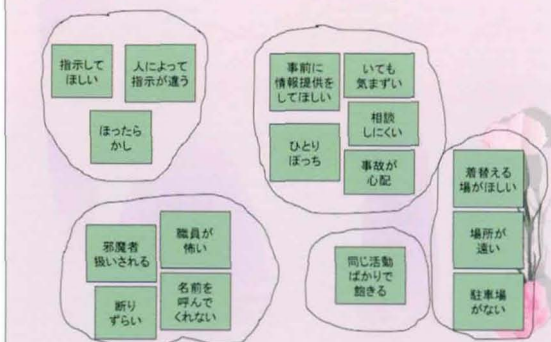
- なるべく多くの意見をだそう
- 人の意見に対して批判は控えよう
- どんな意見でもOK(夢を語ろう)
- 他のメンバーの意見からひらめいたアイデアもどんどん話そう
- 話し合いに積極的に参加しよう(お客様にならないようにしよう)
- 時間を守ろう(終了時間までに課題を作成させる)
- 他の人の時間をとらない(一人で話すぎないで)

テーマについての意見を ポストイットに書き出す(質より量)

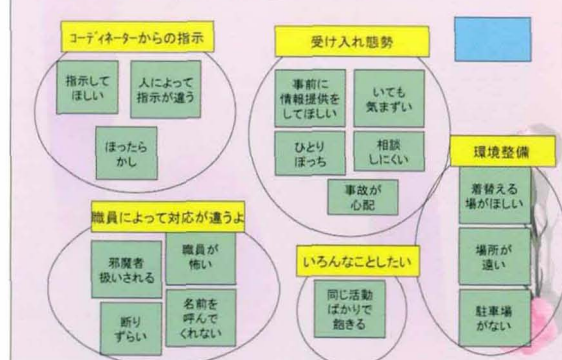
例(こんなときボランティアは困っている)



内容が似ているカードを分類する



グループに見出しをつける



受け入れ態勢

事前に情報提供をしてほしい

いつでも気まづい

ひとりぼっち

相談しにくい

事故が心配

ボランティア保険の情報がほしい

いろいろなプログラムをつづてほしい

ボランティア同士が交流できる場をつづてほしい

いろいろなボランティアの活動の場をつづてほしい

定期的に職員とボランティアが懇話できる場をつづてほしい

あいさつくらいしてほしい

名前だけで呼んでほしい

職員の対応を頼してほしい

わからない時に相談できる人を配置してほしい

カラフルに
いいかも。

日時：平成22年 3月9日(火)
12:45～(受付：12:30～)

会場：上田高砂殿(相生の間)

第1回
学生
フォーラム

平成21年度 文部科学省 大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム

実習を語ろう！

プログラム

12:45～ オリエンテーション(受付：12:30～)

第Ⅰ部 13:00～ 聞いて！私たちの実習

さまざまな職種に必要な専門的知識・技能って何？
みんなはどんな実習を経験したの？

参加各校の学生のプレゼンテーション

幼稚園教諭・保育士になる(上田女子短期大学)

〃 (文化女子大学長野専門学校)

看護師になる(長野看護専門学校)

社会福祉専門職になる(長野大学社会福祉学部)

学校教員になる(信州大学教育学部)

(休憩)

第Ⅱ部 14:15～ ワークショップ

理想の実習を提案しよう

16:30 終了予定

主催：上田女子短期大学幼児教育学科
信州大学教育学部

参加校：長野大学社会福祉学部、長野看護専門学校、文化女子大学長野専門学校

後援：長野市、上田市、長野市教育委員会、上田市教育委員会、信濃毎日新聞、長野放送

*入場は無料です。参加に関するお問合せは下記G.P推進室(橋本、橋詰)まで。

お問合せ 上田市下之郷乙620 上田女子短期大学

TEL 0268-38-2352(代) FAX 0268-38-7315

第1回 学生フォーラムアンケート結果

参加者：74人（学生48人、教員26人）

回収数：52枚

回収率：70.2 %

【回答者の属性】

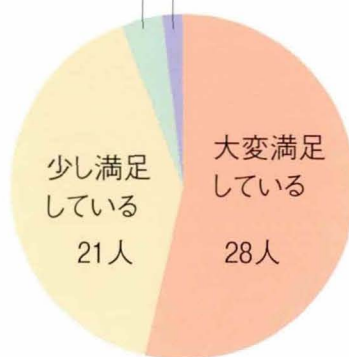
上田女子短期大学	10人
信州大学	13人
文化女子大学付属長野専門学校	11人
長野大学	10人
長野看護専門学校	8人

男	20人
女	32人

学生	1年	7人
	2年	22人
	3年	10人
	4年	6人
教員		7人
事務職員		0人

【第1部「聞いて！私たちの実習」の満足度】

あまり満足していない 2人 不明 1人



◆あまり満足していない理由

- ・説明時間が少し短いようにも感じた。もう少し動きがあれば緊張がとけたかな。
- ・ちょっと良く分からなかった。

◆少し満足している理由

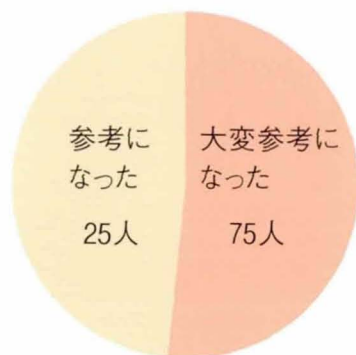
- ・いろいろな職種の人たちの意見を聞けて楽しかったし、同じところや違うところを知れたから。
- ・色々な学校の方の話をきいて、目指しているものは違っても人と接することは共通していくことなので参加して良かったと思います。
- ・各校の代表者がそれぞれの実習で大切だと思うことを言ってくれていたのが良かった。
- ・様々な視点からの意見が得られ参加して良かった。
- ・時間が短かったです。
- ・自分の学校の実習しか知らないの、いろんな実習のカタチを知れて良かった。
- ・自分の体験などを聞くことができて良かった。
- ・自分の学んでいる事以外の実習について知ることが出来た。
- ・他職種の学生と交流することが出来て良かった。色々な体験談を聞けて良かった。
- ・他の分野での実習の様子が分かり良かった。
- ・違った学校の実習の様子がわかり、勉強になりました。
- ・手遊びや、エプロンシアターを見ることができて、参考になった。

- 保育園、幼稚園以外にも専門的なことについて知れてよかったです。
- 他にも実習をしている学校などがあるので、できるだけ多くの人たちの話をききたかった。
- 他の学校の人と話せてよかった!!
- 他の学校の様子や、やっている内容がわかりました。
- みなさんプレゼン頑張ってやっていましたが、もう少し内容の濃いものを発表しても良いのかなと思いました。
- もう少し、発表者の個人的な実習内容を聞いてみたかったです。その大学のカリキュラムやシステムの説明だけでなく。
- わかりやすい説明でした。

◆大変満足している理由

- 相手が幼児、看護、養護施設の子など自分とは違う実習の人の話を聞け、すごくためになった。
- 色々な学校のお話を聞けてよかったから。
- いろいろな実習について知ること、次のディスカッションでその人の実習の背景の予習になった。質疑の時間があっても良かったと思う。
- 同じ保育方面でも違ったことや手あそびを知れて良かったです。また、小学校や児童福祉施設での長い中での内容を知ることができて良かったと思います。自分の知らない世界を見られて良かったです。
- 各学校の実習における内容の理解を深めることができた。
- 学生が積極的に参加していた。
- 学校での実習以外の経験を聞くことができたので。
- 結果的にすごい楽しかったから。みんな頑張ってるなーって思いました。自分も負けずに頑張ります!!
- 最初は嫌だったけど、来て楽しかった。色々な学校の人達の意見が聞けた。
- 様々な学校の発表を聞いて、大変なのは自分たちだけではない、みんな大変で苦勞して実習をしているんだと感じることができたからです。
- 様々な現場における実習を経験している学生が集まり意見交換を主体的に行う企画だったと思う。共通点の発見や、共感する部分があり、とても良い経験、貴重な体験となりました。
- 様々な方面からの意見がきけたから。
- 実習といっても保育や看護だったりと内容が違うことはわかってはいたけれどその内容を知ることができた。
- 実習に関する困難なことなど、共有できてよかった。
- 実習場所や内容に違いはあるけれど、学びや気持ちに共有することができ、いろいろな実習を知ることができて良かった。
- それぞれの学校の特徴がプレゼンによくあらわれていた。
- それぞれの学校の持ち味が出て、参考になる点が多かった。
- それぞれの実習がわかり、みんな頑張っているということがわかったから。
- 他大学の人達の実習を知れ、よい経験ができた。
- 他の学校での実習について知るいい機会になったから。
- 他の分野の実習を知ることが出来た。この経験をどう生かすかが問題になると思った。
- 他分野の実習も聞くことができ、勉強になりました。
- 広い視野を持ち「実習」というものを考えられたから。
- 利用者さん、子供たちとの関わりがくわしくわかったのでよかった!

【第2部「理想の実習を提案しよう」の満足度】



◆参考になった理由

- 意見交換ができたので、とてもよかった。知らなかったことがたくさん知ることができた。
- いろいろな意見が聞けてよかった。
- 色々な意見がでてきて、とても参考になりました。グループでもたくさん進んで話しができて楽しかったです。
- いろいろな実習内容が知れて良かった。とにかく、楽しくできたからよかった。
- 色々な自分と違った分野の人たちの意見を聞けて刺激を受けました。
- 色々な職種について知ることができた!!
- いろんな実習の話しが聞けてよかったです。
- いろんな話がきけて良かったです。
- いろんな話を聞けて良かった。
- 学校でもよくグループワークにてこのようなワークショップをやっているのですが、教師や保育士を目指す学生とすることができて貴重な体験だった。
- 様々な意見を聞くことができた。
- 様々な悩みがみれておもしろかった。
- 実習に関して以外に、他分野で初めて会う人と話すること自体が良いことだと思った。ただ、グループごと優劣をつけるのは司会者としては良くもあり悪くもあると…感じた。
- 知らない人とのグループワークだったけど、意見交換や実習の様子についての話しができて、共感でき参考になりました。
- たくさんの意見を聞くことができて、とても楽しかったです。
- たくさん話し合えたから。
- たのしくまとめられよかった!
- 直接人と関わる職種というのは同じなので、共通する部分を見出せて良かったです。
- 他の人の意見を聞き、個人による考えの違いが現場で個性として出るのではないかと感じた。
- 他の人の意見を聞けてよかった。
- 皆、様々な気持ちをもって実習しているということが分かった。
- みんなが感じていることを聞けたり、同じ気持ちが共有できたと思います。
- みんなの意見を聞けてよかったです。

◆大変参考になった理由

- 色々な専門職の方々とお話する機会になり、貴重なお話が聴けたり、悩みを共有したりと、とてもためになりました。
- いろんな人の意見を聞いたことで、とても勉強になりました。グループ分けありがとうございました。
- 多くの人がいる中、話ができるのかとても不安でしたが、話す中でたくさん共感できる部分ができて、自然と会話がはずんで良かったです。また色々なワークショップのまとめ方をみることもできて良かったです。
- 学生の実習に対する考えを知ることができた。
- グループ内に子どもを持つ方がおり、保護者としての意見を聞いたことが良かった。
- 校種を越えて語り合う姿とても良かった。お互い大変良い刺激になったと感じた。

- ・最初はなかなか意見がでなかったけれど、一人一人の考えを少しずつだけ聞いてよかったから。
- ・様々な観点から、本音で話せたと思う。KJ法に関する説明がもう少しあった方が良かったと思う。
- ・様々な人と考えを共有することが出来たから！「実習」を本気で考えられたから。
- ・時間がたって忘れていた実習について思い出して考えることができて良かった。
- ・実習生であり、保護者である方の話を聞け違う観点から物事を考えられた。
- ・実習生のもつ悩み、困ったことの共通点が解かった。違う学校の学生と交流でき楽しく過ごすことができた。
- ・実習でのつらかったことや、こうして欲しいといったお互い経験したことを共有することが出来たから。
- ・自分が実習を通して、疑問に思っていることなどを、他の大学の人たちから色々な見方でアドバイスをもらえたのでよかった。
- ・自分の実体験でなく、看護や小・中学生を相手にする人たちの話がきけてよかった。
- ・それぞれの困ったことや失敗談などを話していく中で、一人では考えつかない解決方法などが出て、とても参考になりました。
- ・大変なのは自分達だけではないということを知ることができた。
- ・他学校の人達の考え、経験が聞いて良かった。
- ・人と関わるいろいろな方法をもらえた。
- ・人との関わりの中で、人を育てたり、援助したりすることの難しさを理解したり共感し合い、更に考え方の転換や解決策を考えることで、与えられた実習でなく学びゆく実習になると思った。全ての関わりが学びであり、学ぼうとする姿勢を保っていくことで、よりよい実習が実現できると思いました。
- ・他の学校の人とたくさん意見交換ができました。
- ・他の実習でも、自分と同じ事を思っていたり、それぞれの思いを知ることができてよかったと思う。
- ・他の人の意見を聞いて、お互いのことを少しでもきけたのでよかったから。
- ・有意義な提案が多かった。

【今後よりよい実習にするためにはどのようなことが必要だと思いますか？自分自身のことや教員や学校に対する期待について自由にお書きください。】

- ・準備等、大変お疲れさまでした。とても有意義な企画であったと思います。
- ・自分の技術を磨くこともそうですが、人の意見をたくさん聞くということも多くのことを学べる機会になりました。
- ・みんながいると思えば頑張れる!!そのときそのときを一生懸命にやりたいです。もう少し長い時間できたらなと思いました。
- ・実習生と先生の円滑なコミュニケーション。
- ・1対1に近い立ち位置で色々話し合う。色々な面でもっと「時間」が欲しい。
- ・様々な人と関わる事が大切!!
- ・討論で自分がわかったことを今後の実習に生かしていきたいと思います。
- ・もっと学生同士の情報の共有や悩みを相談し合える環境があればいいと思います。
- ・実習の前に、分野の体験をする機会がもっとあれば良い。
- ・色々なことに積極的に取り組む!!
- ・実習を行う前に自ら情報収集を行える力を培うことも大切です。また、それを行える十分な時間も必要です。
- ・実習先の職員の方々と事前に話し合うことができる時間を今よりも多くとることができればスムーズに実習に入れるのではないかと思います。
- ・このことを忘れずに先生がんばりたいと思います。
- ・他の学校の実習のやり方や、内容が少々ですが違うことを見つけることができました。
- ・実習の力ってすごいなって思いました。
- ・いろいろな人の意見を聞いたり、たくさん経験をする。
- ・心がまえが大切だと思います。辛いこともいっぱいあるけれど、その分得るものが多いので環境をととのえてほしいです。

- 日誌や指導案の書き方をもう少し統一されたい。
- 職員と実習生とのコミュニケーション。相手の立場に立って考え、行動することが大切！自分のやりたいことを明確にして、自信を持って取り組むことが大切！今日のようにフォーラムを沢山開催して、お互いの意見交換をする！！
- 気持ちの持ち方が大切だと思う。
- 自分自身のやる気。
- お互いに意見を交換できる場が必要だと感じた。
- 今回のフォーラムを今後の指導に生かしたい。
- もっとより上を目指すには、勉強不足だなどこの会を通じて思ったので、頑張って専門性を高めていけるようにしたいと思いました。参加できてすごく良かったです！！
- 気持ちを強く持って臨むことが大切だと思う。
- 実習をしてきて、実習生が困ったこと等を含め、今以上に実習しやすい環境を整えて頂きたいです。

○○○卒業生を対象としたワークショップの開催 取組報告書 ○○○

担当部会・部門：FD・SD部会

取組担当者：浜野 兼一

1. 事業名

卒業生を対象としたワークショップ

2. 事業の目的

本ワークショップは、戦略GP事業の一環として、卒業後1－2年目の現職保育者・教員が大学時に学んできたカリキュラムが現場の実践においてどのように活かされ、またどのような課題があるのか、についての意見交換を行なうことを通して、現状における養成機関の課題を析出・把握することを期待するものである。

3. 事業の概要と成果

第1部：平成22年6月27日（日）に実施のホームカミングデーと同時進行で行なう。

会場の一角に、ワークショップ用のスペースを設け、模造紙を貼り付けておく。参加者全員に、就職してからの「喜」「怒」「哀」「楽」「悩」について、紙に書いてもらい模造紙に貼り付けていき、現在の悩みを共有する。出来上がったプロダクトをもとに、教員が解説を加えつつ、就職に伴って直面する困難な出来事や、その対処法等を簡単に伝える。

第2部：ホームカミングデーの参加者の中から、10名の卒業生に残ってもらう。別室へ移動し、幼児教育学科の教員によるインタビュー形式の質問に回答してもらう。インタビュー同席者は、短大の教員3名及び信大の教員2名。

ワークショップ全体としては、ホームカミングデーと同時開催ということもあり、参加しやすい環境のもとでプログラムを進行することができた。

第1部では、ホームカミングデー参加の卒業生全員及び幼児教育学科全教員により、現状における参加者の率直なコメントが多数寄せられた。書かれたものを模造紙に貼り付けたことで、各項目の構成や傾向がわかりやすく示された。また、第2部では、卒業生が今感じている「現場からの声」に対して積極的な意見交換が行なわれた。

4. 今後の課題

今後に向けては、養成機関が直面している課題の的確な析出・把握を行なうため、ワークショップに寄せられた声の具体的な検証等が必要になるであろう。



ワークショップの様子



ワークショップのプロダクト



卒業生対象インタビュー調査

〇〇〇第2回FD・SD合同学習会の開催 取組報告書 〇〇〇

担当部会・部門：FD・SD部会

取組担当者：山口 恒夫

1. 事業名

第2回FD・SD合同学習会

2. 事業の目的

戦略GPの課題「乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム『信州モデル』の実現」をより具体的かつ多角的に議論することを促すことを視野に入れ、先進的な取り組みに関する知見を得るための学習会を本事業で連携する上田女子短期大学及び信州大学の教職員を対象として開催した。

3. 事業の概要と成果

第2回FD・SD合同学習会は、平成22年7月21日（水）に実施され、のべ43人が参加した。後述のとおり3つの会場をテレビ会議システムでつなぎ同時開催され、会場ごとの参加人数内訳は、上田会場14人、松本会場8人、長野会場21人。内容としては、「海外の幼児教育紹介—ノルウェーの幼稚園における教室環境の利用に学ぶ—」とのテーマで名古屋大学大学院教育発達科学研究科院生の伊藤喬治氏にご講演いただいた。教育学部西長野キャンパス管理棟第2会議室で行われた講演の様子は、テレビ会議システムを通し、上田女子短期大学ならびに松本の教育学部附属幼稚園に同時中継された。

講演にあたって伊藤氏にご用意いただいたスライドでは、ご本人が実際に足を運んだ際に撮影した現地の幼稚園の教室の写真が数多く提示され、日本の幼稚園との違い等、分かりやすく解説がなされた。同時に、なぜそのようなかたちで教室環境が構築されているかについて、文化的・歴史的背景の説明や、教育学の知見からの分析もあわせて加えられた。

伊藤氏の熱弁から得られた示唆は多岐にわたるが、そのひとつには、テーマにも掲げられていたノルウェーの幼稚園における教室環境の利用の巧みさがあげられる。すなわち、教室環境を構成する要素のひとつひとつ—建築構造、色彩、質感等々—につき、細部にいたるまで意匠が凝らされていること。そのようにして取捨選択された各部が注意深く組み合わせられ、子どもたちが遊び、学び、食し、休む空間が用意されていること、等々。具体的な例を書き添えるならば、天井に象牙色の布がたゆたう昼寝用の部屋の写真は異空間を思わせ、斬新な試みを可能とする現地関係者の開かれた姿勢が感じられた。

興味深かったのは、ノルウェーの幼児教育関係者が、日本の幼稚園に蓄積されている組織的取り組みの豊かさと、現場で働く先生方の能力の高さについて、たびたび伊藤氏に語っているという事実である。北欧の取り組みの先進性の検討を通し、本邦の教育の現状についての再検討・再評価への道筋が含意される講演となった。

講演に続いての質疑応答では、長野・上田・松本の三地点間で、講演内容についての大変活発な議論が展開され、好評を得た。

4. 今後の課題

先進的な取り組みから学ぶことで新たな広がりを得た課題への理解を、どのように具体的な成果に結びつけて行くか、その方法論の検討が今後の課題のひとつとなろう。先進的事業が先進的である所以は、身近かつ日常的な取り組みの後進性との差異にではなく、むしろあまりに慣れ親しんでいたがために注意を払うことのなかった身の回りの事象を異化させる作用にこそ認められるべきであるように感じた。そのような再起的な瞬間の共有を可能にする仕掛けを考えてゆくことが求められよう。

長野会場の様子



上田会場の様子



松本会場の様子

海外の幼児教育紹介 ーノルウェーの幼稚園における 教室環境の利用に学ぶー

名古屋大学大学院教育発達科学研究科
教育科学専攻技術教育学領域

伊藤 喬治

21.07.2019



ノルウェーについて①

- ノルウェー王国 Kingdom of Norway
- 立憲君主制
- 議会制民主主義
- 総人口
- 4,858,199人 (2010年1月1日現在)
- 先住民民族
- サーメ人
- 他に5種類の少数民族



21.07.2019



ノルウェーの保育/幼児教育

- 義務教育は6歳からであり、それ以前の保育/幼児教育は義務教育ではない。
- 施設保育はすべて「幼稚園」(Barnehage / Kindergarten)と呼ばれる

※他の北欧地域(フィンランド、スウェーデン)とのちがいは

- 施設保育はあえて「幼稚園」の名前を使わなくなり、「昼間の家」(påvåkoti / daghem / dayhome)と名称を変えている
- 「幼稚園」という言葉の固定的・保守的なイメージ(預かり時間、思物etc...)払拭のため

21.07.2019



ノルウェーの幼稚園

- 一日預かり等、保育内容としてはいわゆる「幼保一元化施設」的。
- 公立も私立も存在。どちらの場合でも園に対して多くの補助がなされている(ただ、保育料は公立のほうが安い場合が多い)
- 1歳から5歳までの子どもが通うことができる。

21.07.2019



幼稚園の保育者の資格

- 3年間の高等教育を受け取得することができる"pedagogiske ledere"(教育学のリーダー/pedagogical leader)
- 16歳以上で2年間の職業訓練を受け取得できるアシスタント
- ...しかし、
- アシスタントは資格証明書が必要ない
- また全保育者のうち3分の1が教育学のリーダーの資格を持っていれば活動を行うことができる
- ことから、幼稚園の保育者の任用に関しては比較的柔軟なもの

21.07.2019



子どもと保育者の比率

- 3歳までの子どもで、かつ一日あたり6時間以上を園で過ごす場合、7~9人に一人の教育学のリーダーが必要
- 3歳から5歳までの子どもには、14~18人に一人の教育学のリーダーが必要。
- これに加えて、アシスタントを適宜つけることができる。
- 幼稚園に関しては一つのグループの数に関して法律上は特に規定されておらず、各自治体によって定めることが可能
- 都市部と過疎地域の人口差を考慮したものであると思われる

21.07.2019



「保育」から「幼児教育」へ②

- ・「福祉サービス」の充足がある程度達成された

→「量」から「質」の議論へ。

- ・「保護者の就労時間中、ただ預かれればよい」から「より質の高い活動」へ
- ・「子どもの発達にかかわる教育活動の一環としての幼児期の保育/教育活動」

→「幼児教育」という概念の誕生

※管理的・保守的な概念ではなく、

日本の「保育(養護+教育)」に近い概念。

21/07/2010



保育者のリーダーシップの養成①

- ・ひとつのグループにつき一人の教育学的リーダーと二人のアシスタントが保育にあたる

※日本とのちがいは

日本...園長や主任等、もともと保育者だった人物が上司として新人や後輩の指導にあたる

ノルウェー含む北欧...園長はあくまで経営者や対外的な顔であって、保育者よりも年齢的に若かったり、指導をしない場合も多い。

→有資格保育者が保育にあたるだけでなく、アシスタントを指導し保育計画を作成・確認・実行していく必要。抛り所の無さ。

21/07/2010



新しい教育方法の研究

目的

①より効果的で、よりよいものの導入

②教育方法のマニュアル化、ベテランの経験だけに頼らない再現可能な方法の研究

※カリキュラム・保育計画に関して、これまで統一的な方法があるわけではなく、各保育者(教育学的リーダー)の裁量に委ねられる場合が多い。

→個々の教育的リーダーの裁量によるところが大きいために、それまでの伝統的な保育方法が蓄積されづらい構造があった。

→外国の教育方法(レッジョ・エミリア・アプローチ)の導入へ

21/07/2010



レッジョ・エミリア・アプローチ

- ・イタリアのレッジョ・エミリア市で始められた教育方法
- ・現在、ノルウェーや、同様の方法がスウェーデンにおいて広く普及
- ・日本における参考文献

J.ヘンドリック編著、石垣恵美子、玉置哲淳監訳『レッジョ・エミリア 保育実践入門』北大路書房、2000年。

→レッジョ・エミリアに関する歴史的・理論的な解説と具体的な方法論の両方を述べたガイドブックと言えるもの

・レッジョ・エミリア市乳児保育所と幼児学校『子どもたちの100の言葉』学習研究社、2001年。

→多くの写真を用いて子どもたちの様子や作品を撮らえた記録集

21/07/2010



A.創作活動と展示①

絵、立体に限らず、何らかの材料・道具を用いて何かを創作する活動。

- ・絵画→A4程度の紙が良い
- ・粘土→完成品は写真にとる
- ・紙の工作→完成品は写真にとる
- ・折り紙
- ・紙細工
- ・etc



21/07/2010



A.創作活動と展示②

制作物について

- ・ロビー、ホール、入り口等に展示

→子どもたちが他の子どもたちの作品を見ることで、それが「あんなりたい」「あのように書きたい、つくりたい」と子どもの発達を促進させる動機に。



21/07/2010



A.創作活動と展示③

制作過程の展示



B.ポートフォリオ(子どもの記録)の作成

子ども一人ひとりに対してリングファイルを用意。

- 成長の記録(生活リズムの記録、身長・体重、食事等の必要な記録)
- その時々のお話記録と日常の写真
- 制作物(絵であればそのまま、立体作品であれば写真にとって)と過程
- その他あらゆるものを綴じる。

- 通常、希望すれば閲覧は自由に行えるが、管理は幼稚園で行う。
- 年度末に、一年間の成長記録として子どもと保護者に手渡される。

21.07.2019

ポートフォリオ

ポートフォリオの形態



21.07.2019

ポートフォリオの意味①

I. 子ども本人にとっての意味

- 子ども本人が、後に自分の成長・発達を振り返ることができる。
- 目を向けられていることを子ども本人が確認することができる。

II. 保護者にとっての意味

- 子どもの成長・発達を客観的に知ることができる。
- 子どもが保育施設の中でどんな事が行われているのか、知る手がかりとなる。
- 保護者と保育者が保育内容に関してコンセンサスを得るきっかけとなる。

21.07.2019

ポートフォリオの意味②

III. 保育者にとっての意味

- 子どもたちの日々の発達を客観的に振り返るきっかけとなる。
- 記録を作るために、すべての子どもに目を向けなければならない(ポートフォリオを作る作業自体が、目立つ子だけでなく、目立たない子の良いところや、今まで気付かなかった点に気づくきっかけを提供する)。
- 保護者からコンセンサスを得、信頼を得ていくための手段になる。密室になりがちな保育/幼児教育活動をオープンにする。

21.07.2019

C.物理的環境の整備・積極的利用

- 幼稚園の建物内外の内装・外装、家具や設備の色彩、配置など子どもが直接知覚するものを、子どもの発達にあわせて最適化し、子どもの知覚を刺激することで発達を保障すること。

→ノルウェーの幼稚園では、

「環境に特定の意味をもたせる」ことによって、

子どもの発達を促進させつつ、保育者の負担を軽減させる。

21.07.2019

物理的環境への関心のきっかけ

エリ・ソルベルグセン(Eli Thorbergesen)

『幼稚園の部屋 新しい可能性』(Barnehagens rom – nye muligheter)



21/07/2010

特徴その①

「部屋ごとに目的を明確にする」

日本の一般的な幼稚園や保育所

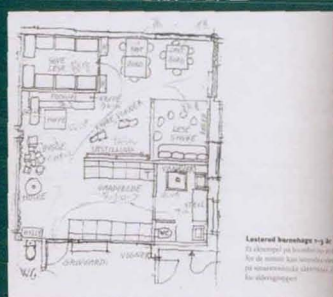
→大きな部屋を時間ごとに目的をかえて使用する

(例)9:00~12:00はそれぞれの遊びのために、12:00~13:00は食堂として、13:30~15:00は電気を消して午睡室として、など

ノルウェーの幼稚園

→部屋ごとに目的を分ける。部屋の数がない場合は仕切りや机、家具などをうまく用いて部屋を区画ごとに分ける。そしてそれぞれの部屋(区画)ごとに使用目的を決め、最適化する。

1-3歳の部屋



21/07/2010

午睡室

→午睡のための部屋を用意し、落ち着けるための部屋のデザインを行う。子どもはその部屋に来ると、自然と眠りについてしまう。



21/07/2010

工作室、ワークショップ

→視界に入るものが限定される事で、集中力を持続できるようになる。



21/07/2010

つまり…

→保育者が子どもたちに何かをさせるのではなく、子どもたちが自然とその行動に入っていく、強制されるのではなく進んで続けていけるために行われる。

→多すぎる刺激や情報、秩序のない状態は、子どもの思考を混乱させる。集中し、落ち着くことのできる環境を用意する。



21/07/2010

特徴その②

「五感を最大限に刺激し、利用する」

視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚のうち、味覚を除くすべての感覚をそれぞれの部屋の目的に合わせ、そのデザインに取り入れる。

- ・ 視覚：彩度の高い部屋、低い部屋、明るい部屋、薄暗い部屋、はっきり見える、ぼんやり見える、遮断される、透けて見える、視覚を通して入ってくる情報とその利用。
- ・ 聴覚：音の響き、静かさ、うるささ、聴覚を通して入ってくる刺激の認識。
- ・ 嗅覚：心地よい匂い、不快な臭い
- ・ 触覚：手触り。操作のしやすさ、感触。熱い、冷たい、堅い、柔らかいなど触覚を通した刺激。

実践例

運梯やロッククライミング用の石が壁に取り付けられている。



特徴その⑤

「豊富な野外活動」

「外に行く機会を得るため頻繁に近所に遠足や散歩に行く」



その他の写真②

- ・ 部屋を区切るためには家具などが効果的に使用されている



その他の写真④

- ・ 壁にはアルファベットや数字が貼られている
- ・ 特に数字には数の概念も同時に用意される



方法のまとめ

- ・ 最も低年齢の子どものための刺激のある部屋の場合。
 - 固有の意味を持たず、しかし部屋に関連付けられた、感覚的に柔らかい素材で部屋を構成。
- メッシュのカーテン。反対側が透けて見える、柔らかさ、風によって揺れる軽さ。自分より大きなもの。安らぎ。
- セロファン、ビニール袋。音、手ごたえ、手で持って動かせるもの。
- セロファンによる光の着色。美しさ。影遊び。
- パイプの手すり。丸みのあるデザイン。角のないもの。
- 鏡。部屋の壁一面に張る事で、部屋のサイズを大きく見せる。自分が映ること。
- 美的感覚の発達。木の色を生かした部屋と、カラフルな家具、道具。色ごとに分けられた道具。
- 運動器官の発達のためのもの。マット、てすり、つかまるためのもの。机ではなく床で遊ぶ。
- モンテッソーリ的な感覚のためのおもちゃと、経験的な学び。

レッジョ・エミリア・アプローチとノルウェー

なぜノルウェーでは物理的な環境をつかった教育方法が研究されているのか

→日本の「園長先生」、つまり豊富な経験と十分な知識に裏付けられた幼稚園の教員たちをまとめる教育的指導者が園におらず、一部に質がひどく低下していた幼稚園があったり、また伝統的な教育方法が世代間で伝承されにくいといった現状

なぜノルウェーでは一気にレッジョ・エミリアを取り入れることができたのか

→指導をしてくれる「先輩」にあたる人物がいないため、保育者は新しい教育方法に関して、比較的積極的に実践できる環境

物理的環境への着目という教育方法①

「レッジョ・エミリア」的と当人たちは表現するが、あまりそのような印象を感じない

視覚や触覚など、五感全体を通した感覚への注目。体を動かし、実際に五感で感じることの重要視

→モンテッソーリ・メソッドの影響？

→TEACCH、スヌーズレンなど、障害児教育、発達支援のためのメソッドとの類似。

→これらの教育方法の保育/幼児教育への応用

物理的環境への着目という教育方法②

物理的環境を意図的に構築することによって、子どもたちは保育者の意図した活動へ積極的に熱中することになる。

...意図した活動への積極的な引き込み

...活動時の気持ちの混乱の防止

などへの活用。熱中を冷まさないための部屋のデザイン。

→(発達)心理学の応用

→障害児教育、発達支援のためのメソッドの効果的な使用。

→社会学的理論・思想的背景。...生政治的、アフォーダンス的側面。

物理的環境への着目という教育方法③

社会構成主義的側面。

子ども—子ども (...会話や遊びを通して)

子ども—保育者 (...会話や遊びを通して)

子ども—環境(—子ども/保育者)(...ポートフォリオの掲示を含む意図的に構成された物理的な環境を通して)

※ここで用いられている教育方法の多くは、すでに他の分野で何らかの形で使用されているもので、ノルウェーで世界で最初に発見されたメソッド、というわけではない

→しかし、あらゆる分野の、あらゆる利用可能なものを、保育/幼児教育的視点において組み立てなおし、保育/幼児教育の方法としてまとめている点が画期的であるといえる。

新しい教育方法の実現とそのためのアピール

北欧的な実現への手法

「新しい実験的取り組み」→「制度化」

「私的なもの」から「公的なもの」への採用

制度があるから実現できるのではなく、実現とその結果が制度化に繋がる

さいごに

Jan, Ase, Maritの研究発表から

「教師はすべて研究者であり、「子ども—教師—大学の研究者」の関係が形成され、子どもからの反応はすぐに研究にフィードバックされ、そして改善されてまたすぐに子どものために用いられる。」

ノルウェー含む北欧における「教育学」概念:

教育学は、心理学、社会学、歴史学、哲学/思想、行政学、あらゆる分野をコーディネートし、子どものために実現可能な形にする学問

...目の前の子どもたちに今何ができるのか、を実践する学問

→多くの研究者が積極的に現場に行っている

→多くの教員が研究の場と積極的な交流を行っている

「どちらにも、そして子どもにもメリットがあるため」

第2回 FD・SD合同学習会チラシ

平成21年度 文部科学省 大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム
乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム「信州モデル」の実現

第2回 FD・SD 合同学習会

テーマ：海外の幼児教育紹介

ーノルウェーの幼稚園における教室環境の利用に学ぶー

講師：伊藤 喬治氏（名古屋大学大学院教育発達科学研究科院生）

日時：平成22年7月21日（水）18：00～
（19：30 終了予定）

会場：信州大学教育学部（管理棟1階第2会議室）

上田女子短期大学（2階20番教室） ほか

＊テレビ会議システムを用いて、同時開催します。



お問合せ先：信州大学教育学部 GP 事務室
長野市西長野 6 の口
TEL 026-238-4037 FAX 026-238-4019
E-mail : erinsho-senryaku@shinshu-u.ac.jp

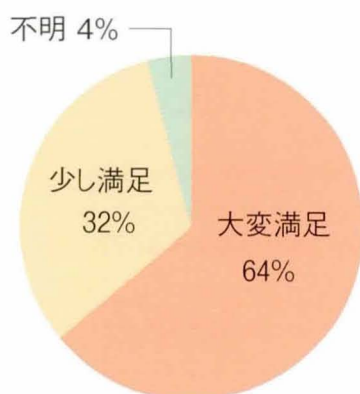
第2回 FD・SD合同学習会アンケート結果

参加者：43人
回収数：25枚
回収率：58.1%

【回答者の属性】

上田女子短期大学	13人	男	14人	教員	15人
信州大学	12人	女	11人	事務職員	2人
				その他（学生）	8人

【学習に対する満足度】



【本学習会のよかった点はなんですか？】

- ・長野－松本－上田の3地区がオンラインでテレビ会議できた点。
- ・興味深い話がきけました。ありがとうございました。
- ・普段知らないノルウェーの幼児教育（保育）について、知ることができ大変興味深かったです。
- ・単なる紹介だけではなく、研究の視点から分析されており、大変参考になった。
- ・ご講演の内容が大変良くまとまっていて、理解しやすかった。
- ・日本の幼児教育とノルウェーの幼児教育を比較して考えることができ、自分が現場に出た際に、両方の良い点と改善点を考えていくことができるようになったと感じます。
- ・幼児教育に関わり、歴史的な背景やどのように根づいているのかといった点や、すぐにでも日本の幼児教育に応用していけるような考え方が示されていて、大変良かったと思います。勉強になりました。
- ・講演だけでなく、スライドや写真などがあることでイメージがふくらみやすく、また違う点や工夫されている点がわかりやすくて良かったです。
- ・他分野の皆さんと一緒に学習会ができて良かったです。
- ・写真が多く用いられていて、とても分かりやすかった。
- ・ノルウェー含む北欧における「教育学」概念—あらゆる分野のコーディネート、実現可能な形にする—という考え、北欧のみならず、欧米でもそうだなとつくづく実感した。具体的にプログラムする姿が参考になった。
- ・いろいろな立場の方の意見を聞くことができ、勉強になりました。
- ・遠くに行かず、とてもよい講演が聞かれ良かったです。
- ・最新の幼児教育に関する知識を得ることができました。とても刺激を受けました。
- ・自らが体験することの難しい海外の現状を知ることができた点。幼児教育の国外比較はなかなか個人で体験できるものではないので、いろいろ勉強になりました。
- ・ポートフォリオの作成の意義が興味深かった。モンテッソーリ教育が、現在のノルウェーでも影

響力を持っていることに驚いた。

- 具体的取り組みの流れを知ることができ、興味深かった。
- 日本の保育現場とノルウェーの現場の違い、考えさせられることが多かったです。
- 教室環境の工夫について、幼稚園だけでなく他の場面でも応用できると感じさせられた。ありがとうございました。
- 日本の保育がこれから重視すべき点についてのイメージがふくらんだこと。
- 新たなことが学べた。
- 長野、松本、上田の3地点で実施できたことがすばらしかったです。ポートフォリオについては、教育に直接かかわっていない自分でもすばらしいと思いました。
- ポートフォリオの説明はとても分かりやすく参考になった。後半の説明（写真の説明）は比較の対象が明確でとても勉強になった。
- 9年ほど前にイタリアの幼稚園と保育園（幼保一体）を見学しました。本日のノルウェーの幼稚園と似ている所がありました。カラフルな色彩感覚、ポートフォリオも見せてもらいました。
- 細かい写真など、とてもよかったと思います。反面子どもの一斉活動かわりなども現場の様子をもっと知りたいと思いました。

【本学習会の改善すべき点、あるいは今後、期待・要望される研修はどのようなものですか？】

- それぞれの現場がかかえる課題を論点にして議論すること。
- もう少し議論ができれば良かったと感じました。
- このような形で、様々な知見をお持ちの方々の話を伺いたい。
- この会議システムは、声が山彦のように時間差を持って響いてしまい、不快感を感じてしまいました。
- 時間配分、接続。
- 院生もより参加しやすい形になるといいと思います。
- 事前に資料がUPされていれば、関心のある人は読んでから参加でき、更に深まるのではないかと思います。
- 最後の質疑応答だけでなく、各地との交流・対話しながら進める形の学習会もよいと思います。
- PISA調査において、フィンランドは上位であるが、スウェーデンやノルウェーはそれほど上位ではないという事をおっしゃっていましたが、幼児期の教育を転換したノルウェーも上位となるのかと疑問がある。また、フィンランドとのちがいをもう少し詳しく話してほしかった。
- 学校教育に関しても、学習会があるといいと思います。
- 定期的な学習会の開催で、遠隔システムも活用していただけるので助かります。
- もう少しゆっくり質問等ができると良かった。
- テレビの接続がもう少し早く準備できると良い。
- 職員の参加をもっと多く期待したいです。
- 質疑時間がもう少しほしい。
- パワーポイントの文字の大きさと量、分量が多い分、文字のフォントが小さくなっており、やや見づらい。枚数も時間の割にはやや多いかもしれない。
- 長野会場を想定してレーザーポインタを使っておられたせいか、上田側には写らず、「ここが」と言われた際に、どこかがわからない事があった。
- 初めての出席でしたが、この様に外国の様子を学べることは良かったと思います。映像権の問題もありますが制度とともに子どもの表情も見たいと思います。

〇〇〇第3回FD・SD合同学習会 取組報告書〇〇〇

担当部会・部門：GP推進室

取組担当者：橋本 一雄

1. 事業名

第3回FD・SD合同学習会

2. 事業の目的

- 東日本大震災の惨禍に直面し、こうした大規模災害に直面したときの大学の使命を再認識するとともに、社会への貢献の方法を考える機会を設けること
- 保育者・教育者をめざす学生に対し、ボランティア活動報告を通じて、災害時の対処を学ぶ機会を提供し、防災教育等の意識を教職員ともども共有すること

3. 事業の概要と成果

当学習会は、前年度末に提出した平成23年度調書に予定された事業ではない。しかし、平成23年3月に発生した東日本大震災に直面し、大学、あるいはそこに勤務する教職員はいかに社会的な使命を果たすことができるのかを考える機会を共有したいとの認識のもと、企画・実現した学習会である。平成23年5月10日に開催されたこの学習会は、東日本大震災のボランティア活動に参加した小野智明FD・SD部会委員を講師とし、両大学間を遠隔授業システムで接続して、ボランティア活動報告と質疑応答の二部構成で実施された。同学習会には、上田女子短期大学側の教職員19名、信州大学教育学部側では教職員12名と学生8名が参加し、学生からは、今後、有志でボランティア活動を行う際にどのような点に留意すべきかなど、活発な質疑応答が行われた。この学習会の後、上田女子短期大学側では、独自の取り組みとして、教職員および学生による2回の災害ボランティア活動が行われ、これとは別に、信州大学教育学部の有志学生による被災地ボランティアも行われることとなった。当学習会は、大学が果たすべき社会的使命を教職員のみならず、学生自身も考え、その認識を共有する機会となったと言えるだろう。また、こうした意識を啓発する機会となったという点でも有益であったと思われる。

4. 今後の課題

この学習会後に行った被災地支援のボランティア活動については、両大学合同で実践することはできなかった。教育・研究活動以外の場面でも両大学の合意が形成されやすい連携のありようを模索し、教職員や学生間の交流と共同実践をさらに活発化していくことが必要であろう。

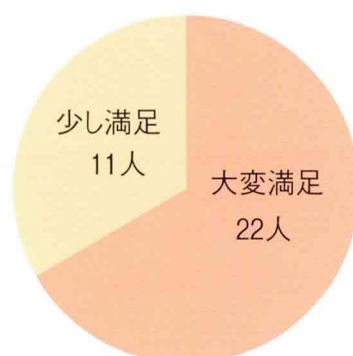
第3回 FD・SD合同学習会アンケート結果

参加者：39人
回収数：33枚
回収率：84.6%

【回答者の属性】

男	20人	教員	19人
女	13人	事務職員	8人
		その他	6人

【学習会に対する満足度】



【本学習会のよかった点はなんですか？】

- ・現地の生の状況を聞くことが出来たこと。
- ・ここに集まった方々の想いが伝わってきたこと。
- ・遠隔授業システムを用いた学習体験が出来た。
- ・タイムリーな話題で参考になりました。
- ・現地の生の様子、状況が良くわかり、改めて自分達は何が出来るのか考えさせられました。
- ・終了後も話が盛り上がり、熱い議論となった点がとても良かったです。
- ・講師の考えのみをお聞きするのではなく、皆で考える余地を与えてくださった点。
- ・ニュースでは見れなかった実態を知ることが出来て良かった。
- ・体験された方の話から発展が出来ること。実際に適用できるかどうかまで議論できるのがよい。
- ・写真も多く、事実に語らせる姿勢が好感が持てた。
- ・学生も一緒に参加していた点。(学生の声はとても大切だなと思います。)
- ・事実があまりにも重すぎて、話せる言葉を見つけることができません。かつて学校教育に身を置き、虐待を受けた子どもたちと関わった経験から想像してみると、この被災した心のケアがどれほど難しいものかと重い問題を突き付けられました。
- ・様々な立場から意見を聞いた。
- ・現地に行った方の話を聞いてとても良かった。ボランティアとしての立場を理解することが出来た。
- ・質疑応答、意見交換の部で得るものがありました。前半の講演部分にも後半部分の内容が期待されるのではないのでしょうか。
- ・体験者の伝えることには何よりも力強さがある。
- ・報道では分からない事も聞くことが出来た。
- ・信州大学の先生方、学生の意見・体験談も貴重で示唆を与えてくれる。
- ・被災地の状況が良くわかりました。現地の保育者も被災しながら子どもたちのケアにあたっていると思います。子供のケアと同時に保育者支援も必要かと思いました。何が出来るのか課題です。

- 現地の様子がリアルに分かりました。
- 実際に現地に行かれた小野先生のお話は重みがありました。思っているだけで何も出来ないのではなく、これからどうやっていけるのかと、前向きに考えることが出来ました。
- 実体験に基づいた報告であったこと。
- メディアの報道を見るだけでは分からない、現地の状況を知ることが出来た。継続して“被災した我々にできる事”を考え続けなければいけないという、最高の動機づけになりました。
- 内容、時間ともに大変良く学ばせて頂きました。
- やはり、体験してきた方のお話は重みがありました。被災者に対する関わり方を自分自身あらためて考えさせられる良いきっかけ、機会になりました。小野先生の話から、直接被災地に行かなくてもできるボランティアがあるとの話を聞き、何か自分もできたらいいなと思いました。

【本学習会の改善すべき点、あるいは今後、期待・要望される研修はどのようなものですか？】

- なぜ上田女子短期大学と合同学習会をしているのか、信州大学（学生）はどんなことを求められているのか分からなかった。
- 今回のように年度の計画になくとも、タイムリーの内容で企画できれば良いと思いました。
- ボランティア活動、現地事情のレポートは大変役立ったが、テーマにある内容の比重をもう少し多くしていただくと尚ありがたい。保育、教育で何が出来るのかももう少しお話があるとよかった。
- 学生を巻き込んで、さらに具体的な支援のあり方について考えたい。
- 意見交換の時間をもう少し取ってほしい。
- もし、議論の機会がいただける学習会ならば、議論の時間がもう少しあってもよろしいかと思います。非常にタイムリーな話題で、とてもいい時間でした。
- ぜひ、災害時の心のケアについての論議を聞きたいです。
- 平和な日本にとって、危機管理は諸外国に比して様々な点で劣っている。今後もノウハウ（HARD・SOFT両面での）蓄積は不可欠であり、現代の人間が自分の体を使ってする体験が少ないという弱点を補う点でもボランティア体験を積むことが必要。それをまた、仲間同僚に説明することを通して社会全体に更に積み重ねることが必要だ。また、ボランティアとしてではなく、嫌なことでもやらなくてはならないという精神も涵養する必要があると思う。
- もう少し時間をかけてお話しいたきたかった。
- もう少し早い時間から出来ないでしょうか。
- 貴重な体験を生で聞くことができ、とても良い学習会でした。2時間くらい写真をまじえてお話を聞けたらもっと良かったと思います。

上田会場の様子



長野会場の様子



〇〇〇〇木育プレワークショップ 取組報告書 〇〇〇〇

担当部会・部門：FD・SD部会
取組担当者：村松 浩幸

1. 事業名

「地域産業を活かした幼児教育としての木育ワークショップの検討―『ロボ木ー』で作るロボット寸劇―」

2. 事業の目的

今回のプレワークショップは、平成23年10月15日（土）に実施する第4回FD・SD合同学習会に向け、関係者が体験的に「木育」の観点を共有することが目的である。当日は「木育」研究の第一人者である島根大学名誉教授・特任教授の山下晃功先生をお招きし、講演とプレワークショップを行った。また、教材「ロボ木ー」の開発に携わった酒井久徳氏（酒井産業株式会社専務）にはアドバイザーとしてご協力いただいた。

3. 事業の概要と成果

平成23年6月23日（木）17時30分から木育をキーワードにしたプレワークショップを上田女子短期大学と信州大学教育学部の両大学で行った（遠隔授業システムを用いて接続）。プレワークショップには両大学の学生及び教職員が総勢39名参加した。

講演は、山下先生が学生ひとりひとりに対して問いかけ、答えを求める形で進められた。参加者が幼児期の教育にとってなぜ「木育―ものづくり」が大切なのかについて学ぶ場となった。さらに地域の森林（自然）環境、間伐材を利用した国内木材の利用、自然（樹木）と生活（木材）を融合したESD教育（持続可能な開発のための教育）についての講義もなされた。

プレワークショップでは、教材「ロボ木ー」の作成、「ロボ木ー」をつかった寸劇のアイデアづくりが行われた。ワークショップの終わりにはそれぞれの作品の発表が行われ、上田女子短期大学の参加者の作成したロボ木ーは「風来坊」「どろぼう」をイメージした個性豊かでユニークな作品などがみられた。信州大学教育学部の学生は4人で1グループとなり寸劇のアイデアを考え発表した。ここではストーリーの方向性に悩みながらも独創性に富んだ寸劇が展開された。

参加した教職員も作成に参加しつつ学生の様子を観察し、木の香に包まれた穏やかな雰囲気の中、自然と幼児教育の重要性を実感する場となった。

4. 今後の課題

プレワークショップ後、参加者からのアンケート等を通じ「子どもたちがいろいろと工夫できそうであった」、「よい企画だった」などの言葉が寄せられ、また課題としては「時間が短かった」、「寸劇のテーマがあればよかった」などがあげられた。

これらの課題を活かし、10月の第4回FD・SD合同学習会では学生主体型ワークショップの形式を想定しており、今回参加した学生は、10月の学習会において核として活躍することが期待されている。



プレワークショップの様子（画面）



プレワークショップの様子（上田）



プレワークショップの様子（信大）

講演



平成21年度 文部科学省 大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム
乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム「信州モデル」の実現



第4回FD・SD合同学習会のための プレワークショップ

地域産業を活かした幼児教育としての木育ワークショップの検討 —『ロボ木—』で作るロボット寸劇—

講 師 島根大学 名誉教授・特任教授 山下晃功先生

アドバイザー 酒井産業株式会社 酒井久徳氏

日 時 平成23年6月23日(木) 17:30～19:00

会 場 信州大学教育学部 (管理棟 1 階第2会議室)

上田女子短期大学 (2階20番教室)

※遠隔授業システムを用いて、同時開催します。



〈お問い合わせ先〉

信州大学教育学部 戦略 GP 事務室

長野市西長野 6-口

TEL 026-238-4037 担当:安達(佳)・藤原

上田女子短期大学 戦略 GP 推進室

上田市下之郷乙 620

TEL 0268-38-2352 担当:橋本・橋詰

〈E-mail〉

erinsho-senryaku@shinshu-u.ac.jp

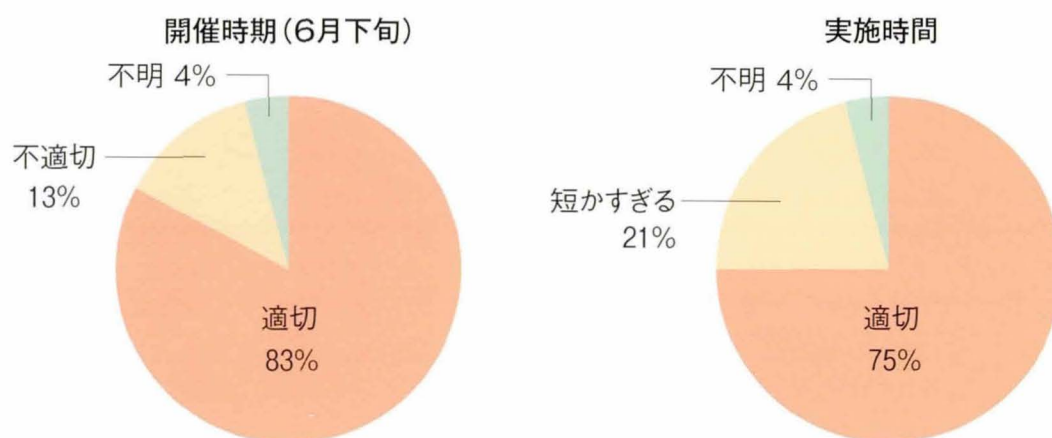
第4回 FD・SD合同学習会のためのプレワークショップのアンケート結果

参加者：39人
回収数：24枚
回収率：61.5%

【回答者の属性】

上田女子短期大学	16人	男	8人	教員	10人
信州大学	8人	女	16人	その他（学生）	14人

【1. 本日のプレワークショップの実施形態はいかがでしたか？】



- ・希望する開催時期は…… 8月頃／9月頃
- ・ワークショップ本番が10月ということで今回のプレから本番までどうするのか疑問に思った。

【2. 本日のプレワークショップに対する満足度はどの程度ですか？】



- ・回答なし1人
- ・実際に自分たちが活動する時間が短いのと、内容が信大と上田とバラバラだったこと。

【3. 本プレワークショップのよかった点は何ですか？】

- ・笑いがたくさんあった上に、しっかりと学習課題をつかめていたところ！
- ・初対面の人でもアイスブレイク感覚で仲良くなれる。
- ・講師の方の話が聞けたこと
- ・ロボ木の製作
- ・様々な装飾品があって子どもたちがいろいろと工夫ができそうで良かったと思います。
- ・ロボ木の育て親である、山下先生にお越しいただいてとても楽しいお話が聞けたこと。
- ・実際にロボ木を提案した方の熱い思いを聞けたこと。自分で作ってみることで子どもにとって難しいところがわかったので10月にも役に立つと思います。
- ・山下先生や酒井さんのお話を聞き、木育なんて今まで聞いたことがなかったが興味を持った。
- ・ロボ木を作れたこと
- ・他の人の作品を見れたこと

- ・一人ひとり個性がでるロボ木ーが作れた
- ・木曾の子ども達の給食の食器……食事環境の大切さを感じた。
- ・ロボ木ーを通して楽しく話し合いながら、童心に帰って人形を作ったことが良かった。
- ・色々の広がりができそうでした。
- ・想像、想像力がかき立てられた（個性が現われる）
- ・次回や今後につながるWSだった。
- ・作って終わりではなく、ロボ木ーをどのように生かしていくか、いろいろなアイデアを聞いたこと。
- ・説明をその場で受け、楽しくできた。
- ・信大との通信で良かった。
- ・同じ素材からさまざまな造形ができ、それぞれのロボ木ーを使って色々なストーリーができそうな感じでおもしろかったです。
- ・実際にロボ木ーを作りながら、木の温もりを感じ、ひのきの香りを感じることができたところ。
- ・子どもたちと一緒に作ってみたいと思いました。
- ・ロボ木ーを実際に作って、表現活動を行なったこと。子どもと一緒に作るにはどうしたらよいか等々、考えながら作ることができました。
- ・普段、木の枝や実で遊ぶことはあるのですが、木を育てるという面でとらえ、考えることはなかったので大変考えさせられました。
- ・木材の組み立てが簡単で作りやすかった。
- ・とても楽しかったです。またやってみたいです。
- ・おとなりが先生でしたが仲良く一緒にできたと思います。何を作るか決まっていなかったが、創っていく最中にどんどん出来上がってきて楽しくてうれしかったです。自然なものを作ることができることをこれから探していきたい。
- ・ロボ木ーを作ったという先生から話を聞いた点
- ・木材に触れながら、楽しい時間を過ごし有意義なワークショップでした。高齢者対象のワークショップでもきっと喜ばれるでしょう。
- ・演習だった点
- ・良い香りの中で思い思いに作ることができました。
- ・形にとらわれず、創造しながら木と向き合うことができて良かったです。

【4. 本プレワークショップの改善すべき点、あるいは今後、期待・要望される研修はどのようなものですか？】

- ・子どもの参加を求めます。
- ・劇のテーマを提示してほしい。
- ・〈ロボ木ー自体の目的・作ること自体の楽しさ・作った後の使用方法〉のどれに主眼をおきたいのかよくわからなかった。会の目的がよくわからなかった。
- ・特にありません。とても良かったです。
- ・長く継続されることを期待します。
- ・プレワークショップがどういう位置づけなのか、疑問に思った。ロボ木ーを“作る”ことを目的とするなら、全員で作る時間にして、劇を本番もやるのであれば今回のプレの時間だけでは足りないと感じた。
- ・長く継続されることを期待します。
- ・上田の皆さんと“いっしょにやっている”という感じがあまりなかった。長野は長野で上田は上田で……という感じになってしまっていたように思う。
- ・上田女子はロボ木ーを作ってなく、信大側は作ってあるとスタートに差があったから統一したほうが良かったと思う。また信大側が劇を作るということだったが、時間が少なく中途半端になってしまったのが残念だった。
- ・活動時間が30分しかなく、ロボ木ー製作に大半の時間を使ってしまい劇を考える時間が足りなかったと感じた。
- ・上田側は時間が少し短かったです。
- ・時間に遅れて、申し訳ありませんでした。山下先生の話術にも引き込まれ、あっという間のひとときでした。
- ・また自然なものを使ってできたらいいなと思います。

〇〇〇第4回FD・SD合同学習会 取組報告書〇〇〇

担当部会・部門：FD・SD部会

取組担当者：村松 浩幸

1. 事業名

第4回FD・SD合同学習会「木のおもちゃを作ろう！」（学生参加型ワークショップ）の開催

2. 事業の目的

FD・SD部会が中心となり、両大学の教員のみならず、学生、附属校園の教員も参加可能な形態で、幼児教育向けのワークショップを開催する。木材を使って幼児向けの教材を作成するワークショップを開催することによって、子どもが木材を利用する楽しさを体験する「木育（もくいく）」の観点を両大学の教員が共有し、学生教育にこうした視点を反映させることができるようになる。また、両大学の学生や附属校園の教員も参加可能なワークショップとすることによって、保育や教育の現場においての教材を作成する活動の一つとして、保育や教育の実践にも活用することができるワークショップとなる。

3. 事業の概要と成果

平成23年10月15日（土）上田女子短期大学において「木のおもちゃを作ろう！」と題した学生主体によるワークショップ形式の第4回FD・SD合同学習会を開催した。

参加者は上田女子短期大学教職員11名、上田女子短期大学附属幼稚園教員1名、信州大学教育学部教職員5名、信州大学教育学部附属幼稚園教員1名、上田女子短期大学の学生12名、信州大学教育学部の学生8名の計38名が参加した。

学生主体で行う趣旨から、信州大学教育学部3年生2名、上田女子短期大学1年生2名の4名の学生が司会者として進行を勤めた。

参加者学生は「アルパカ」、「いるか」、「バンビ」、「らいおん」の4チームに分かれ、制作時間として与えられた90分間で、木の素材を使ったおもちゃを自由に構想し、チーム内で役割分担をし、おもちゃの制作を行なった。チームの構成は信州大学の学生2名、上田女子短期大学の学生3名の計5名の混合とした。参加した学生たちは、制作するおもちゃについて活発に議論を行ない、加工技術、装飾技術といったそれぞれの強みを生かして助け合いながら作業にあたっていた。

制作終了後、チームごとに教材の活用法や制作意図などを説明する5分間のプレゼンテーションを実施した。プレゼンテーション後に教職員、学生全員が投票（最も優れている教材と思われるチーム名とそのコメント）する形で、教材の評価をした。投票結果に基づいて、最優秀、優秀のチームを選出した。

選考の結果、板の両面を床面（表面）とサッカー場（裏面）としてリバーシブルに使うことができ、おもちゃの収納方法についても考慮したおもちゃの提案を行った「いるか」チームの作品が最優秀賞に選ばれた。選考理由として、「着想が独創的であること」「収納方法も考慮して木材を加工した点に、5・6歳児を対象とした「木のおもちゃ」としての配慮と工夫が見られること」が挙げられた。最優秀、優秀賞のチームの各メンバーには木の賞状と賞品が贈呈された。

なお、他のチームの作品も、プライベートビーチをイメージしたストーリー性に富んだもの（「らいおん」チーム）、ピンボールのように、木の球を動かす楽しさを提案したもの（「バンビ」チーム）、繊細な技巧を駆使して各種の遊具を制作し、赤地のフェルトでベニヤ板一面を覆うことで、秋の公園を演出した芸術性に富んだ作品（「アルパカ」チーム）など、どれも甲乙つけがたい力作が出そろった。

4作品は上田女子短期大学内に展示し、本取組の成果を公開した。

4. 今後の課題

幼保小の連携の重要性が参加した学生たちからの感想からも挙げられており、今回の学習会の成果として考えられる点であるが、一過性の体験に留まることなく、継続性を重視した取組も重要であると考ええる。両大学の積み上げてきた実績を尊重し、さらなる連携の深化を模索していきたい。



事前打合せ



当日打合せ



会場風景



発表の様子



いるか 作品



バンビ 作品



アルパカ 作品



らいおん 作品



全員で記念撮影

平成21年度文部科学省選定 大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム
乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム「信州モデル」の実現

第4回 FD・SD合同学習会「木を使った教材を作ろう！」開催のお知らせ

上田女子短期大学と信州大学教育学部では、平成21年度に文部科学省が選定した大学教育充実のための戦略的大学連携事業の一環として、「木育」に着目した学生主体型ワークショップ「木を使った教材を作ろう！」を下記の通り開催することになりました。

このワークショップでは、保育者や小学校教員等を目指す学生の皆さん、および、その養成に関わる教職員の皆様等に、教材としての「木」の活用方法を考えてもらい、「木」を使った教材を用いる際に留意すべき点や、効果的な教材を作成するための配慮などについての理解を深めていただきたいと考えています。

参加を希望される方は、下記のとおり、お申し込みのうえ、奮ってご参加ください。



1. 日 時 平成23年10月15日（土）13:00～16:00
2. 会 場 上田女子短期大学 本館2階 26番教室
3. 対 象 上田女子短期大学および信州大学教育学部の学生・教職員、
上田女子短期大学附属幼稚園の教職員の皆様、
信州大学教育学部附属校園の教職員の皆様
4. 後 援 上田市、長野市、上田市教育委員会、長野市教育委員会、
信濃毎日新聞社、NBS長野放送（※いずれも申請中）
5. 備 考
1) 当日、信州大学教育学部から上田女子短期大学行きのバス（往復・無料）を運行します。ご利用の方は、申し込みの際に運行時刻と集合場所を確認してください。
2) 参加にあたっては、10/13（木）午後1時までに以下の窓口にお申し込みください。

申し込み先およびお問い合わせ先

上田女子短期大学 戦略GP推進室（児童文化研究所内） 担当：橋本・橋詰
電話（0268）38-2352

信州大学教育学部 戦略GP事務室 担当：安達（佳）・藤原
電話（026）238-4037

E-mail : erinsho-senryaku@shinshu-u.ac.jp（両大学共有メールアドレス）

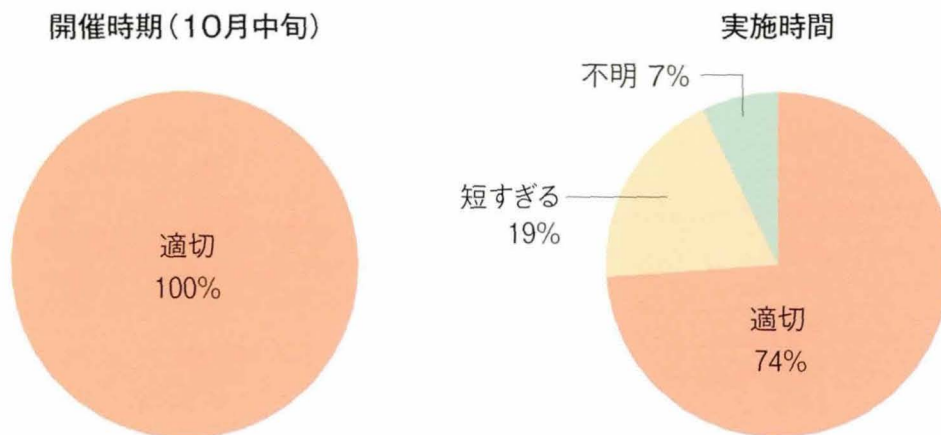
第4回 FD・SD合同学習会アンケート結果

参加者：38人
回収数：31枚
回収率：81.6%

【回答者の属性】

男	11人	教員	13人
女	16人	その他（学生）	18人

【1. 本日の学習会の実施形態はいかがでしたか？】



【2. 本日の学習会に対する満足度はどの程度ですか？】



【3. 本学習会のよかった点は何ですか？】

- 学校が混合だったので、色々なアイディアや得意分野ですごく楽しく出来ました。
- 信大生のみなさんと、楽しく色々な話をしながら交流して、一つの作品が作れてとても楽しかったです。信大生のみなさんは、木の扱いがとても上手だなと思いました。自分自身が工夫して作れたので、とても楽しかったです。
- 他の大学（信大）と交流できた。発想の違いなどを楽しめた。
- みんなでたのしくできたから良かった。
- いろんな人と交流できたこと。
- 協力して1つの物を作ることでグループの人と仲良くできた。
- 信大と女短で協力して一つの物を作ることができた。
- 信大の学生と交流ができてとても楽しかったです。
- 一人で作品を作るのではなく、みんなでアイディアを出し合って作っていける所が良かったです。グループごと作り、自分では思いつかなかったような作品があって、いろいろな考え方があるんだと知ることができて良かったし、参考になりました。
- みんなで仲良く作れたので良かったです。
- 普段関わりのない人たちと交流を持てたこと。大学では得ることのできない考えや意見を聞くことができ、良かったと思います。

- まったく知らない人と一緒に行くことは、少し緊張したりしましたがとても楽しかったです。
- 他のグループの作品を見てこんなものが作れるんだと思い、またやってみたいと思いました。
- それぞれ得意な分野を生かして協力しながら楽しく木育について考えられたところ。
- 他の大学の学生と交流できた。
- 木材の教材化の良い点を知れたこと。
- 他大学の初対面の人と一緒に作業できたこと。
- 最後に投票を行ったこと。
- “教材”として作ったこと。
- 道具、素材が多い。楽しい！
- グループワークで盛り上がる。
- みんな仲良くやれたこと。
- グループワークとプレゼン。チーム色が出ていて良かった。
- 生徒さんの態度が時間とともに大変活発になり、最後はにぎやかで昔からの友達の様で好感度大です。木のロボ木ーから木育環境拡大になることを祈ります。
- 木に触れることができた。
- 信大生と上田女短生を同じグループに配置したこと。
- 木材の種類が豊富だったこと。
- 道具も制作する上で必要なものを十分用意できたこと。
- 木材、道具を使うことを通して活発な交流・学びが展開されたこと。
- 協同的に行ったところ。
- 女子と男子がグループを作ったところ。
- 投票や評価をして、観点をはっきりしたところ。
- 自分たちで考え、工夫・協力していける点。
- 子どもたちへの教材化とは……と考える場でもあった。
- 決められた教材のみでも、各自の独創的なアイデアがたくさん展開されたこと。
- 自分の得意分野をそれぞれが担当し、協力し合えるところ。
- さまざまな工夫が見られ、本会の目標が充実した形で実現できた。
- 教材として“木”の可能性を再確認できた。また、他大学の学生同士の交流を深める事ができた。
- 信大生と女短の学生が一緒にひとつの物を作る姿が良かったです。また、“木”という素材もあたたかみのある雰囲気を出してくれたと思います。今日は、ありがとうございました。
- 計画が良く予定通り。色々な発想やコミュニケーションがとってもよく、作品の出来にも影響していた。
- 先生と学生の参加。
- さまざまな形の木材を使い、発想豊かな作品ができたこと。学生同士の交流も深まった。
- 予想以上に質の高い作品ができたと思う。

【4. 本学習会の改善すべき点、あるいは今後、期待・要望される研修はどのようなものですか？】

- もう少し長い時間をかけてじっくりやりたかった。
- 時間配分。
- また機会があれば合同で今回のようなことを行いたい。
- グループワークの時間をもっと長く。
- 子どもと一緒に作る。
- 道具をもう少し充実して。
- 木→自然の木の枝、実なども用意できるといいのではないか。
- 上田女短の立地を生かし、裏山との活動もリンクしていくとより教材化していくイメージがわくのではないか。貴重な経験をさせていただきました。ありがとうございました。
- 会場をご準備いただき推進室、事務室の方々になるべくご負担のかからない工夫。
- 人数が多すぎても開催が難しくなるが、もう少し人数（学生の）が多いと充実できると思う。（参加していない学生がもったいないと思うような良い内容だった。）
- 実施回数を増やし、多くの両大学学生に参加してもらいたい。
- この様な会が続けられるとよいと思います。自然で良かった。
- 教職員も作りたくてうずうずしていた人もいたようなので、教員参加もあればよいと思います。

投票結果・コメント

計38票中

1位：いるかグループ

19票

- ・両面使えるアイデアが子どもたちの発想を刺激すると思いました。
- ・裏返して遊べるという発想力は素晴らしかったです。私たちのチームもなかなかですが…
- ・表と裏の両面が使えるから。
- ・男の子も女の子もどちらも遊べる場所が良いなと思いました。あまり、ガチャガチャしてなくてシンプルに遊べるので楽しそうでした。
- ・男の子、女の子両方が楽しめるようにできていて良かったです。
- ・一つの教材で2通りの遊び方があり、よいと思った。
- ・男の子も女の子も遊べて片付けもできるからです。
- ・女の子だけのおままごとをするのではなく、男の子も一緒にあそべていてとてもすごかった。
- ・裏のサッカーや家具など、おままごとを楽しむ要素がたくさんあった。
- ・ひっくり返して遊べるのが面白かった。男の子も女の子も楽しめる物ができたと思います。
- ・実際に遊べそう。リバーシブルで2倍。
- ・リバーシブルの部分が良かったです。女の子だけでなく男の子も遊べるという工夫がよく、また木育や遊びの充実性などが良かったです。
- ・実際に子どもが楽しく遊べますね。
- ・リバーシブルの発想は素晴らしい！
- ・“教材”として、子どもたちの動きや性別など、細かなところまで考えられていて良かったです。
- ・「教材」として、子どもたちと一緒に遊べる場所が良かった。他のグループもみんな甲乙つけがたい出来栄でした。
- ・箱に片付けられるので、大事にする気持ちが生まれそうなのが良かったです。
- ・両面使えるアイデア、片付けも考えている。らいおんグループの協力アイデアも捨てがたい。
- ・ダイナミックな発想が素晴らしい。

2位：バンビグループ

9票

- ・みんなで楽しめる所が良いと思いました。ただ、迷路のようにするだけでなく、鈴を付けたり飾りなど色々工夫されていて見ても楽しいと思いました。
- ・みんなで遊べる場所が良かったと思います。
- ・みんなで一緒になって遊ぶことができる場所が良いなと思いました。飾り付けがとてもかわいいと思います。
- ・2～3人で協力してゲームをする場所が年長児には向いていると思います。
- ・みんな協力する遊びなので、友達の輪が広がるので良い。
- ・みんなで協力してできるボードゲームという発想が子どもたちも夢中になってできるのではないかな？と思いました。
- ・最初見たとき、1人で遊ぶものだと思ったが、4人で遊べるのは新しいと思った。工夫されていて、見ても楽しめ、やっても楽しめる素晴らしい作品だと思う。
- ・自分たちが遊んでも一番楽しそう。

3位：アルパカグループ

5票

- ・見ていてとても楽しそうでした。色んな木の素材をふんだんに使っていると思います。
- ・ビビットな色使い、きめ細やかな仕事ぶり、バランスの良さ、全ての点で群を抜いていた。
- ・子どもの興味をとらえていた。

- ごっこ遊びが発展しそう。
- 一つ一つとても丁寧に作られている。
- 作り方が丁寧。
- 見ていて楽しい。

3位：らいおんグループ

5票

- プライベートビーチが素敵でした。木の素材を活かしたヤシの木が良かったです。
- コナン、ルフィとかいろいろなキャラクターが出てきて、子どもたちが楽しく遊べそうだなと思いました。
- いろんなキャラクターになって、新しい物語が生まれてきた様。子どもが繋いでいけそう。
- みんなで遊べると思います。

木育参加者からの感想

自分が学んだことは「集団で1つのことに取り組むよさ」です。

今回のワークショップでは司会を務めさせていただいたり、自分はとても大きな役割を与えていただいた企画でありました。その分責任が大きかったわけではありましたが、なんとかやり通すことができました。ワークショップでは、木を使った教材を上田女子短の学生と信大の学生の合同で作りました。初めて会った人たちと一緒に作業する。ましては5・6歳を対象としたものを作るわけなので自分はかなり不安に思っていました。

いざ始まってみると、上田女子短の学生は5・6歳の子どもの実態や、実習での経験を話してくれたり、日々どんなことを学んでいるかなどを教えてくれるので僕は持てていなかったイメージを持つことができました。

逆に、自分は一応ノコギリを使うことができるので、材料を切断したり、できることをすることで貢献できたのではないかと思います。できあがった教材は結果だけをみると3位でしたが、僕らの思いが詰まった最高の教材だと思います。ぜひ幼稚園で活用してもらえたらうれしいです。

自分はみんなで作業することが苦手で、実習やらなんやらも一人で準備するタイプです。小学校がみんなで集まって準備しているのをみると嫌気がさすくらいです。しかし、今回専門が異なる人が集まり、教材を作ったことで、昨年マネジメントで学んだ「相手の強みを生かす」ということができたのではないかと思います。村松研はとっている免許が同じだったりして、ある程度同じような集団ですが、今回は幼稚園が専門の人たちと作業したことでいろんなことを学びました。(3年生)



今回、上田女子短の子たちと協力して5・6歳を対象とした木材を使った教材作りをしてきました。今まで実習中の先輩が作ったり、授業で学んできたりした教材とは違い、考えるのがとても難しかったです。

今回の活動で感じたのは幼稚園・保育園と小学校の違いとその中にも同じところあるということです。小学校は勉強を学ぶということが基本で、教材という授業で使うものだと思うのですが、幼稚園・保育園では遊び自体が学びであり、その中で使うおもちゃが教材ということでした。ここが違うなと思いました。逆に共通しているなと感じたのが、TVゲームのように決められた遊び方しかできないものは子どもの遊びの幅が減るためよくないということでした。

これは小学校でいうと解き方だけ教えて、子どもたちに考えさせないということなのかなと思いました。来年の教育実習では子どもたちが考えられるような授業作りができるようにしたいです。

(2年生)



WSで感じたことは「いろいろな経験をするのは大切なこと」ということです。少し単純なことかもしれませんが、正直にこのことを感じました。

木を使って教材開発をするなんてことは普段ではなかなか経験できないことだと思います。しかし今回木を使って5、6歳向けの教材をグループで意見を出し合いながら考えて作ったことは、苦勞したけれど、今後教師を目指している自分にとって必ず生きてくると思いました。また、他大学と交流できたことも良かったです。(2年生)



今回の合同学習会で学んだことは、「木材の多様な可能性」ということです。

今回は4つのグループで1つずつ教材づくりを行いました。

先生方も僕たちを見るのを忘れて夢中で教材を作っていました(笑)自分たちが作ったのを添付しておきます。ほかのグループのと比較したとき、同じ材質のものを使っているのに用途は全く違っていたり、先生たちは木と木が接触するときの音を活かしたものを作っていました。どのグループも素晴らしいものを作っていて、木の多様性を実感しました。

また、制作を行なっていく中で、僕たちは木材加工で学んだ技術をいかして加工を行い、上田女子短の方たちはおもちゃづくりの技術を活かして装飾やおもちゃづくりを行うという場面が多く見られました。『街場の教育論』で学んだ他者とのコラボレーションとはこういうことなのかもしれないと実感を持った理解ができたことも大きな成果だったと思います。楽しく行うことができ、行ってよかったです。(2年生)



• 木育について

木育というテーマのワークショップには、ロボ木ーを使ったワークショップと合わせて二回目の参加でした。ロボ木ーのワークショップでは、使う木材が限られていましたが、今回は、様々な形の木材を使用することができ、木の材質・形状から想像を膨らませながら制作を行うことができました。

しかしながら、なぜ、木にこだわるのか、疑問がわきました。私は、人間が自然から取り出したものであるなら、どれも同じように思います。今回も、くぎを使ったりしているために、実は「鉄育」といってもいいかもしれません。なぜ木育なのでしょう。自然環境のことを考えるためなら、人と鉄との関係もとても重要な要素であるように思います。

• 上田女子短期大学の学生との共同参加について

今回のワークショップは、信州大学と上田女子短期大学の学生との共同の参加ということ、また、多くの先生方に見られている中での作業だったので、とても緊張しました。同じ活動を共にやるということは、とても刺激的で、相手がどのような行為をするかによって、自分がその活動に対してどのように接するかが、全く変わってくるというように思いました。私は、グループのリーダーということでしたが、初めに意見を交換しただけで、そのあとは、それぞれが個人で活動を行っていました。私自身は、リーダーとして、もっと、グループ内での意見の交流を促すように働きかけたいと思っていましたが、個人やペアで活動しているところにたまに、声をかけに行くようなことしかできませんでした。私自身は、そのように感じましたが、逆に言えば、それぞれグループの個人が、目的を見つけ、それに向かって活動ができていたということとも言えると思います。

しかし、作成時間の最後の方では、もう完成したと感じている学生ともう少し手を加えたい学生との間に隙間ができてしまったと思います。もう完成したと感じている学生は、学生同士でお話しており、もう少し手を加えたい学生は、作成を続けており、グループ全体で、作り上げたといえるものにはならなかったように思います。最後に、プレゼンの方法を考えるよう私が促し、グループをまとめていく必要があったように思います。(院生)

(6) 地域連携部会

〇〇〇 子育て支援事業への共同参加
(わくわくファミリーフェスタ)

取組報告書 〇〇〇

担当部会・部門：地域連携部会

取組担当者：橋本 一雄

1. 事業名

子育て支援事業への共同参加（わくわくファミリーフェスタ）

2. 事業の目的

- 地域の子育て支援の現場を見学し、参加することを通じて、地域における子育て支援のニーズを把握すること
- 両大学の学生が、地域の子育て支援の現場を見学し、その支援に携わることを通じて、子育て支援のニーズを体験的に把握すること

3. 事業の概要と成果

上田市において開催されている子育て支援イベント「わくわくファミリーフェスタ」へのボランティアスタッフとして参加は、平成22年度以降、平成23年度においても継続して実施してきた事業である（主催：上田市子育て家庭応援事業実行委員会）。上田市のひとまちげんき・健康プラザうえだを会場として開催されるこのイベントには、平成22年度に上田女子短期大学の学生約40名、信州大学の学生6名が、また、平成23年度は、上田側の学生9名、信州大学側の学生3名が参加した。当イベントにおいて、両大学の学生は、各担当に分かれ、ボール投げ遊び、野菜スタンプでのカレンダーづくり、新聞紙を使つての遊びの他、アートバルーンや絵本の読み聞かせ、パネルシアター等を担当した他、会場の設営や撤収等を含めた一連のボランティア活動に参加した。

各催しにおいて、学生は、当日訪れた多くの子どもたちの前で日頃習得した知識や技能を実演、習得度を確認するとともに、今後のそれぞれの課題を抽出することが出来たように見受けられる。保護者との触れ合いという点でも、子育て支援の現状を知るよい機会となったものと推察される。

参加した学生は、イベントの準備から後片づけに至るまでの一通りのボランティア活動に携わったことによって、市役所職員や地域住民との「協同」の中で当催しに参画したことで、保育者、教育者を目指すにあたっての貴重な体験を得た等の意見が事後アンケート等において寄せられた。

4. 今後の課題

当催しは、子どもや保護者だけではなく、行政関係者や他のボランティアスタッフとの連携を図りながら参加することのできる数少ないボランティア体験の場である。過去二年間の実績として、両大学の学生は、一般ボランティアとしての準備や後片づけの他、バルーンアート等の制作を担当してきたところであるが、両大学の学生がそれぞれの大学で習得してきた保育技能等をより広く披露する機会があれば、両大学の学生は実践的な体験を行うこともでき、なお有益な機会となるものと思われる。



アートバルーンの実演



ふんわりダーツ



手あそびの実演



野菜スタンプでカレンダー作り

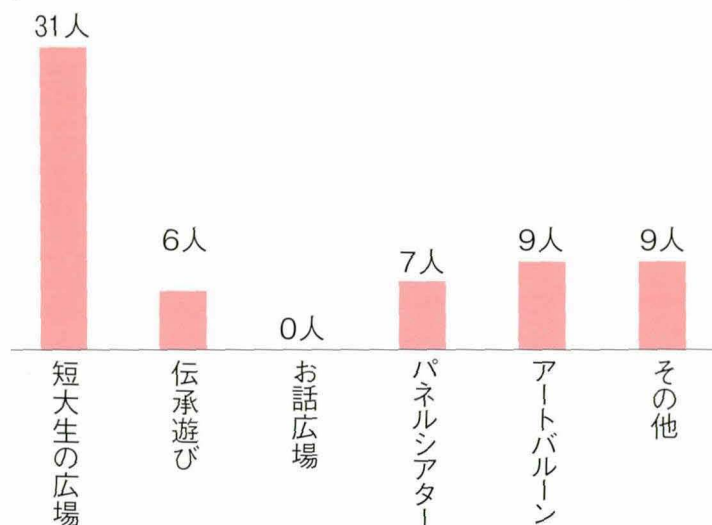
平成22年度わくわくファミリーフェスタアンケート結果《学生・教職員用》

回収数：46枚

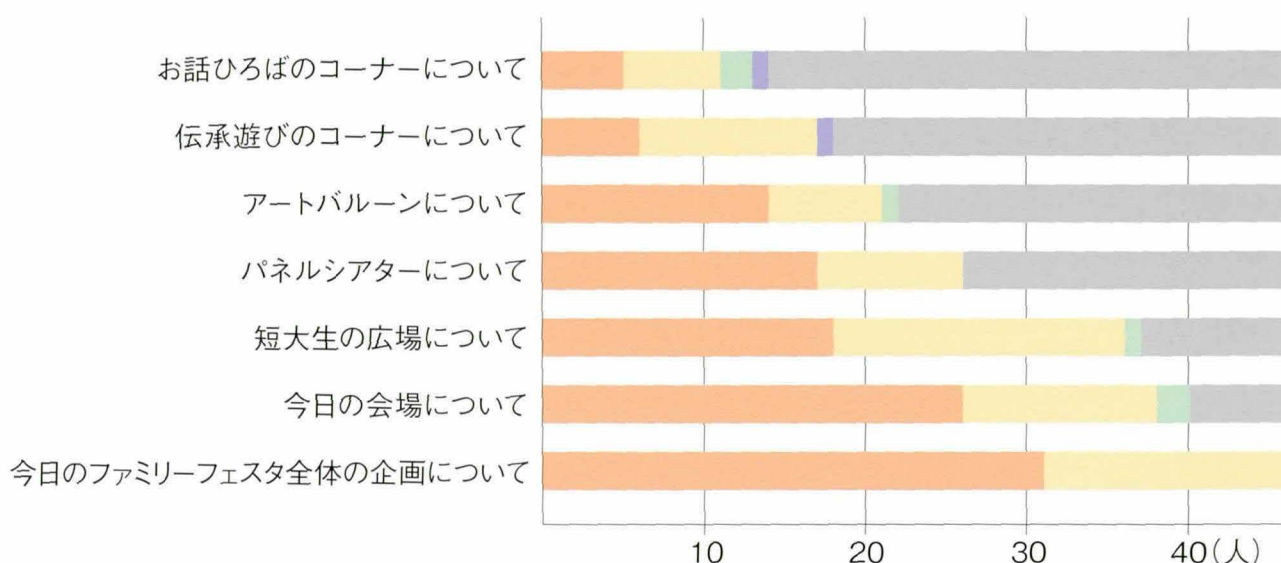
【回答者の属性】

上田女子短期大学生	39人
信州大学生（院生を含む）	5人
上田女子短期大学教員	1人
信州大学教員	1人

【自分が関わったイベント（回答者中・複数回答可）】

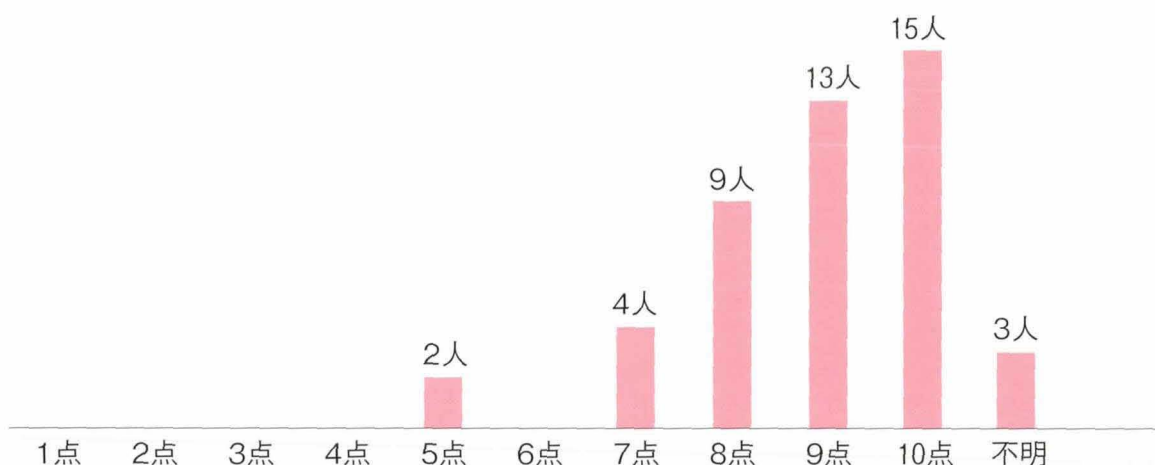


【自分が関わったイベントについての感想（人数）】



	お話広場のコーナーについて	伝承遊びのコーナーについて	アートバルーンについて	パネルシアターについて	短大生の広場について	今日の会場について	今日ファミリーフェスタ全体の企画について
とてもよい	5	6	14	17	18	26	31
よい	6	11	7	9	18	12	15
普通	2	0	1	0	1	2	0
あまりよくない	1	1	0	0	0	0	0
よくない	0	0	0	0	0	0	0
わからない・未参加・不明	32	28	24	20	9	6	0

【今日のわくわくファミリーフェスタを子供や保護者の視点からみた場合の満足度は何点くらいだと思いますか（10点満点中）】



【今日の企画の中でもっともよかった企画を1つ挙げるとすればどれだと思いますか。どこがよかったと思うか、具体的に教えてください。】

- 短大広場にずっといたので他の方はあまり周ることができませんでしたが、親子の様子を見てみると楽しく遊んでいる場面が多く、他の企画なども良かったのではないかと思います。
- アートバルーンで、多くの人が目につくところで活動しており、参加しやすい雰囲気だったことや、簡単に作れる手軽さが良いと思いました。
- アートバルーンを子供が自分で作れるように一緒に作っているのが良かったと思います。様々なことに興味を持てるかなと思いました。
- 参加した数が少ないのでわからない事も多いのですが、わりばしでっぼうが良かったと思います。
- アートバルーンがアンパンマンとかいろいろあって楽しめたと思う。
- アートバルーンだと思う。子どもがうれしそうだったから。
- わりばしでっぼう。
- 割りばし鉄砲が良かった。
- アートバルーン。作った物がのこる。
- アートバルーン。子どもたちがとても楽しそうに学生からもらっていたのを見て。
- パネルシアター。親子コンサート。
- 短大生の広場のおままごとセット。いろんなオモチャがあって、たくさんの年齢の子がたのしめるから。
- 短大生の広場。とても広々としたスペースで親子で遊ぶ際も伸び伸び遊べていたと思う。自分で遊ぶだけではなく、複数のコーナーがあったのもよかった。
- アートバルーン以外の企画を見ていないので、わからないのですが、アートバルーンは子どもたちが嬉しそうでアンパンマンと一緒に作ることで参加型の企画になってよかったと思います。
- 参加した企画しかわからないので、よくわかりません。ごめんなさい。
- アンパンマンのアートバルーン。保護者の方も子ども達もとても楽しんでいるように見えました。子どもも自分で作れたのが良かったと思います。
- 短大生の広場はとても良かったと思います。遊ぶ場所が様々な場所にあって、子どもが遊びほろだいだと思いました。
- 親子コンサート。パネルシアター。
- パネルシアター。凄く面白かったです。
- 親子コンサート。
- パネルシアターしか見ていないので、パネルシアターはとても良かったです。
- 工作のコーナー。
- パネルシアター。とても見ていて楽しく、参加もできて良かった。
- 親子コンサート。みなさんが楽しんでいたのが良かったです。
- 短大生の広場。一緒に体を動かしたり歌ったりと参加型の活動が良かった。
- パネルシアターはとてもおもしろくて、参考にしたいことがたくさんありました。

- パネルシアターでは絵が工夫してあってよかったなと思いました。
- 野菜スタンプ。子どもと一緒に楽しめ季節感を感じられる。
- 野菜のスタンプがすごくにぎわっていたのと、アートバルーンのアンパンマンをしている子が多かった。

【来年度以降、この企画をよりよいものとするためには、どのような点を改善すればよいと思いますか。】

- 水分補給のできるスペースなどがあればもっと良いと思います。
- もう少し広い会場だとよいと思いました。もしかしたらあったのかもしれませんが荷物置き場があるといいのかなと思いました。大きなバッグを抱えている方が多かったのです。
- 伝承遊びの場所をもう少し分かりやすくしてほしい。
- アートバルーンの会場をもう少し広げることができれば良かったと思います。人数が多く、箱の場所やペンの場所が少しわかりにくかったのかも。サインポストを使うのも手だと思います。
- 人員を増やす。
- もう少し一つ一つの場所がわかりやすいように、看板みたいなものを増やした方が良い。
- 保護者と離れてしまい、泣いている子をよく目にしました。危険な行動をしている子もいたので、保護者の方に子ども達から目を離さないようにしてもらうことも必要なのではないかと思います。
- それぞれのイベントのパーテーションをもう少し明確にした方が良い。危険な子供（ボールをけったり、遊具を持ち歩く男児等）を見張る全体的な統括役がいた方が良い。
- もっと色々な出し物を出す。
- 短大生広場について…人員を1.5～2倍にしてもいいと思う。コーナーに来た子どもとだけ遊ぶのではなく、積極的にこちらからかわっても良いのではないかな。
- バルーンのプレゼントの仕方について…アートバルーンをプレゼントする仕組みをもっとしっかり決めた方が良いと思う。1人何個、どうすればもらえるのかがはっきりしていなかった。
- 15:00頃に来て、もう終わりですか？と聞かれることありました。残念そうに帰っていく方が何人かいたので、イベントの告知をより広くできたらもっと楽しめる人が増えると思います。
- 子供に対して、見ている大人がもう少しきちんとついていた方が色々とスムーズになるのではないかと思います。
- 伝承遊びの折り紙をもっと増やしてほしいです。折り紙の作り方はもっと簡単じゃないと子供には難しいと思いました。
- 場所をわかりやすくする！入口に何時にどこで何をするのか大きく書いておく。
- 親子コンサートの1部と2部で内容を変えたらよいと思います。

【今日のわくわくファミリーフェスタ全体を通しての感想をお聞かせください。】

- とても多くの人に参加しており、このようなフェスタが多くの人に広まっているのだなと思い驚きました。また母子だけでなくお父さんの姿も見られたことがとても印象に残っています。
- 普段かかわることが出来ない年齢の子供と一緒に折り紙を作れて楽しかったです。どんな言葉で教えると分かりやすいか、分かりにくいかがとても参考になりました。折り紙のレパートリーが増えました。
- 久しぶりに子供たちとかかわることができ、大変楽しかったです。子供の気を引く声掛けや、割りばしでっぼうの提示などが上手いき、子供たちがノリノリで作ってくれたのが大変満足ポイントです。ただ、親御さんは良かったのですが、子供だけで作るのは難しい点、作り方などを置いておき、見るだけで作れる工夫があったらもっと良いものだったかなと思います。
- 様々な子供たちと多くふれ合えてよかったと思う。親子が楽しんでいる様子を見れてうれしくなった。
- 子供とたくさんふれ合えて楽しかった。子供の元気の良さについて行くのが必死だった。いろんな年齢の子とかかわれて良い経験になった。
- 思っていたよりも人が多かった。初めてだったので後半に疲れが出てしまった。同じ事の繰り返しの中でどのように対応していけばよいのかの工夫がもう少し出来れば良かった。子供たちが何回も来てくれたりもしたので、楽しんでもらえて良かった。ただどうルールを決めてやるのかも決めてなかったので、子供たちのやりたいようになってしまい、他に来た子がどうしたらいいの

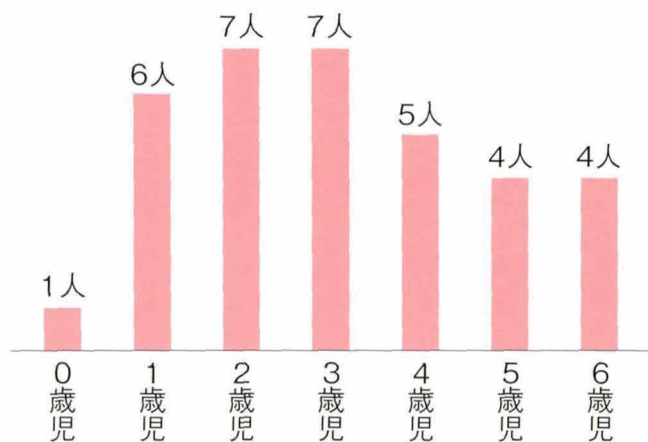
わからなくなっていた。

- たくさんの親子が参加されており、子供たちの笑顔を沢山見ることができました。こういう同じ年代の子供たち同士が触れ合える場所はとても良いなと改めて感じました。
- 大変なにぎわいで全体としては成功だと思う。ただし、イベント毎のメリハリがもう少し付けばなおよい。行事をどこでどの時間にやっているのか看板などが明確になればなおよいであろう。
- 色々な子とふれ合えて、とても勉強になりました。親子皆が楽しめていたようなので良かったです。
- 思っていた以上の親子が来ていて、とても楽しそうに参加していて驚きました。親にとっても役に立つ情報を得たり、話が出来たりと意味のあるイベントだったと思うし、子供も楽しめたと思うのでとても良い企画だと思いました。
- 久しぶりに就学前の子供とたくさん関わることができて、とても楽しかったです。子供の様子だけでなく、保護者の方々の様子を見れたことが私にとってはすごくよかったなあと考えています。もっと色々な立場から物事を考えられるよう、もっともっと考え学ばなければいけない事が多々あると感じました。
- こんなにたくさんの子供と接する機会はほとんどないのでいい経験をさせてもらったなと思います。ただ、どこで何をやっているかなどの全体の把握ができないまま一か所のみを担当する形になってしまったので、もう少し内容を知れたら良かったと思いました。
- 短大生の広場はとても広い場所で遊ぶ場所が多くてとても良かった。
- アートバルーンのアンパンマンがすごいと思いました。
- 楽しかった。もっといいものを来年つくりたい。
- 親子で参加できる点が良い。お父さんお母さんも子供と一緒に楽しめてとても良い企画だと思います。みんなとても楽しそうでした。
- 子供たちとふれ合えて楽しめたし、子供と保護者の親子ふれあいの良い場になっていてとても良かったと思う。とても楽しかったです。
- 親子コンサートしか分かりませんが、みんなニコニコ楽しそうでした。参加できて良かったです。
- とても良い施設で、参加しやすく良い機会だなと思いました。
- 親子の関わりなどが見られて良かったです。
- このようなイベントに参加することが初めてで、とても良い経験ができました。子供たちとかかわるだけでなく保護者とコミュニケーションを取ることができることが私にとって勉強になりました。
- 異年齢の子供たちとたくさん関わったことで、子供たち自身何ができるのかなどわかったので色々学べた。

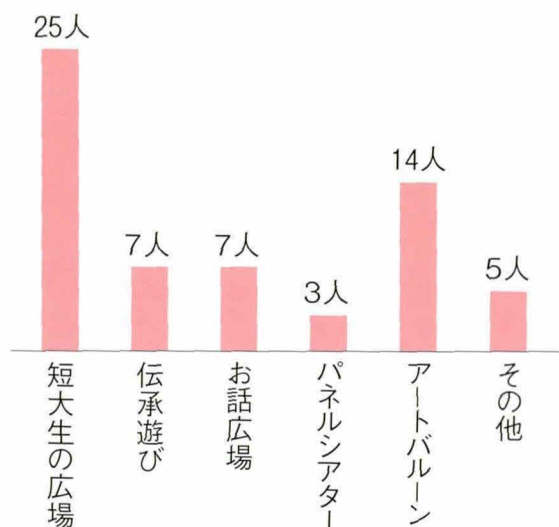
平成22年度わくわくファミリーフェスタアンケート結果《一般来場者用》

回収数：27枚

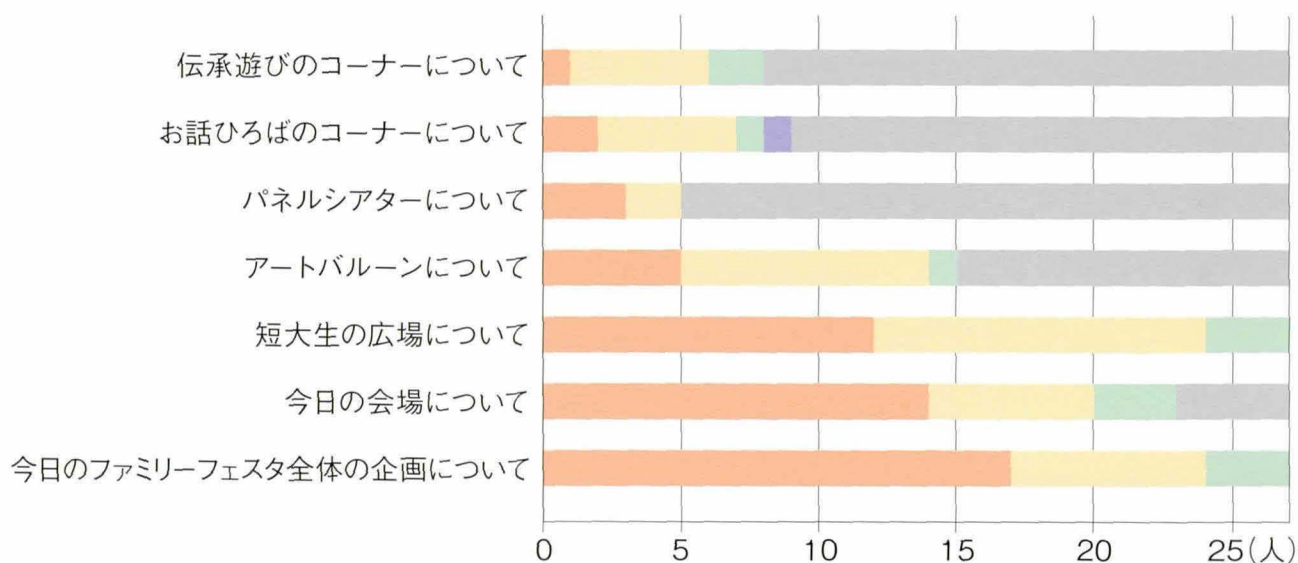
【来場した子供の年齢分布 (回答者中)】



【イベント毎の参加者数 (回答者中・複数回答可)】

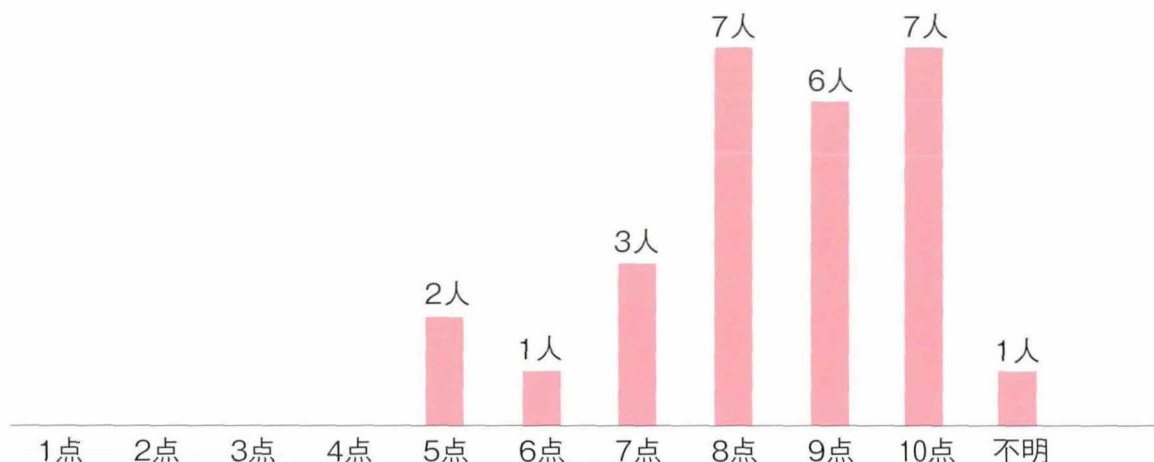


【学生が関わったイベントについての感想 (人数)】



	伝承遊びの コーナーに ついて	お話広場の コーナーに ついて	パネルシア ターについ て	アートバル ーンについ て	短大生の広 場につい て	今日の会場 について	今日ファミ リーフェス タ全体の企 画について
とてもよい	1	2	3	5	12	14	17
よい	5	5	2	9	12	6	7
普通	2	1	0	1	3	3	3
あまりよくない	0	1	0	0	0	0	0
よくない	0	0	0	0	0	0	0
わからない・未参加・不明	19	18	22	12	0	4	0

【イベント全体に対しての来場者の満足度（10点満点中）】



【今日の企画の中で良かったと思う企画はどれでしょうか。どこが良かったか具体的に教えてください。】

- ・短大生が積極的で良かった。
- ・よみきかせ。にぎやかさが苦手な子なので入り込めた。
- ・カレー。おいしかったし、おかげ様でゆっくり遊べました。ごちそうさまでした。
- ・ボール投げ。短大生のお姉さんが優しく見守ってくれていた。子どもが夢中でアンパンマンのほっぺや口にボールを投げて楽しそうだった。
- ・親子体操。
- ・アートバルーン。短大生の広場。
- ・絵本を読んでもくれる場所があってよかった。
- ・広場の開放。いろんな種類のイベント。
- ・アートバルーン。親子体操。
- ・親子体操。普段パパがこういう場で参加して子どもと一緒に身体を動かすことは少ないので、親子共に楽しめて、子どもにとって大切な運動も知れ良かった。
- ・親子体操。子供と思いきりふれ合えてよかった。
- ・人工イクラ作りは親も楽しめて良かった。

【来年度以降、この企画をよりよいものとするためには、どのような点を改善すればよいと思いますか。】

- ・人気の高いバルーンは時間を区切らずにやってください！
- ・アートバルーン作り、抱っこしてはムリなので作っておいてプレゼントという形もほしい。
- ・タイムスケジュールを大きくはり出してほしい。
- ・もっともっと学生が積極的に子供とかかわる方がいいと思う。不慣れでしょうがないのは親もわかっているので、もっと声がけをしたり、とにかくもっと積極的な方がいいと思う。学生が集まっていてもしょうがない。
- ・にじいろ広場の中でのコーナー(フリスビー)はやめた方がいい。小さい子が遊べない。
- ・短大生の態度が悪すぎ。(にじいろ広場)。アンケートを出しに行ったら「さあ…どうするんでしょう」といった感じ。とても不愉快でした。
- ・混雑解消。
- ・絵本を読んでもくれる場所があってよかった。
- ・大学生の方の参加は素晴らしいですが、もう少しアピールと明るさが必要です。
- ・毎年参加しているのですが、毎回親のマナーが気になることがあります。トイレの使い方や、使い終えたおもちゃ、お友達との関わり…。遊びの広場が広がった分、親がしっかり見ていないと思うのですが。親へのお願いや指導も必要だと思います。
- ・カレー配布は「きっと混んでいて食べられないのでは？」と思ってしまったが、引換券があるなんて知らなかった。チラシに引換券を付けておいてくれれば良かったのに…。

【上田女子短期大学と信州大学教育学部は、両大学で提携し、地域の子育て支援に貢献できる人材育成のプログラムを開発しています。現在の子育てをより充実したものとするためには、保育の現場にどのような人材（保育者等）が必要だとお考えでしょうか。ご意見をお聞かせください。】

- 発達において考慮が必要な子たちへの支援的なスキル。
- ボールプールの短大生、午前中の3人はとってもよく子供と遊んでくれていた。昼頃の学生は学生同士のおしゃべりばかりでプールの中にすわりこんでいていてまいちだった。どっちかと言うとじゃまでした。カレンダー作り、フリスビー作りの学生も親切で良かった。すわりこみではだめだと思うのでもっとお尻を軽く動けるような保育士がいい。そういう学生は本当に子供が好きか、保育士になりたいのか疑問に思う。
- 昔からの保育を押し付けず、今時の考えにも共感してくれる人。
- 積極的に子供に近づいて来れる人。母親の悩み等を親身に聞ける人。
- 今の親は、子供のことに一生懸命だとしてもまだまだ未熟な大人が多いと思います（もちろん、私を含めて）。だから、親子そろって学べるように親への指導的なことも大切だと思います。一生懸命になりすぎるからこそ見えてないこと、気付かないことを教えてほしいです。
- 子供の質問に「答える」のではなく「応える」保育者になってほしいと思います。

平成23年度わくわくファミリーフェスタ 参加学生の感想

【信州大学学生】

- 私が「わくわくファミリーフェスタ」に参加して最も感じたものは、地域のお母さんたちの力がとても強いということです。上田市にはお母さんたちのサークルのような団体がたくさんあり、その中からこのような大きなイベントを企画するに至ったということがすばらしく、地域で子育てを支援しようとする市民の意識が感じられました。

活動は主にバルーンアートや人工イクラのお手伝いをさせていただきました。子どもたちが、「わたしも作ってみたい」と目を光らせていたのが印象的でした。ただ、バルーンアートでは、事前に作って用意しておいた方が、当日子どもたちや保護者とたくさん触れ合える場面が作れたのではないかと、また、子どもが作ってみたいものを一緒に作れる自由な活動であったら、もっと子どもたちや保護者に満足してもらえたのではないかと感じました。

また、さまざまなイベントを見学させていただいたのですが、骨盤体操やヨガ、おはなしの部屋など、保護者やさまざまな年齢の子ども目線に立った活動がなされていて、保護者の子育てに対する不安などを解消し、同じ立場の仲間がいるのだと安心できる機会になり、とても素敵なイベントでした。私も今後、幼稚園教諭として上田市の活動を見習っていったらいいなと感じました。昼食の豚汁とおにぎりもとても美味しく頂きました。最後になりましたが、イベントに参加させていただき本当にありがとうございました。

- この度はわくわくファミリーフェスタにボランティアとして参加させていただきありがとうございました。大変貴重な体験となりました。地域の方の提案で始まった企画だということを知り、地域全体の子育てに対する関心の高さに驚きました。さらに、会場の装飾やスタッフの方の姿勢、昼食のサービスなど地域ならではの温かさを感じられるイベントで、来場した方も笑顔で楽しんでいる印象を持ちました。

私は、主にアートバルーンと人工いくらのお手伝いをさせていただきました。どちらも、地域の親子の方々と近くで話しかけることができたので、こちらも対話を楽しみながらお手伝いすることが出来ました。多くの親子とお話することは、普段の大学生活では経験できないことなのでとても貴重な時間を過ごすことが出来ました。また、スタッフも楽しんで取り組むことがイベントの成功につながるのだということも感じました。私自身、お手伝いをさせてもらいながら楽しんで取り組むことが出来ました。

貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

- 私は今まで教育実習や施設へのボランティアなどで、子どもたちと触れ合う機会が多くありました。しかし、家族の一員としての子どもの姿を垣間見たり、保護者の方といっしょにお話したりす

るのは、今回が初めての経験でした。

私は主に、バルーンアートでアンパンマンをいっしょに作ったり、イクラづくりのアシスタントをさせていただきました。当日はとても忙しかったのですが、その分たくさんの方の保護者の方と子どもたちと接することができました。

特に印象的だったのが、どの家族のお父さんお母さんも子どもに絶えず笑いかける姿から、みんな自分の子どもが好きだと感じられたことです。当たり前のことのように思えますが、家族の愛情が子どもの成長にとって非常に重要なことなのではと改めて考えさせられました。そのような姿を見て、私も幸せな気持ちになることができました。今回のイベントを通してさらに家族の絆が深まったのではないのでしょうか。

非常に貴重な体験になりました。今後もまたたくさんの方のボランティアに参加したいと思いました。職員の方々、お手伝いさせていただき本当にありがとうございました。

【上田女子短期大学学生】

- 私はワクワクフェスタのボランティアに参加して、保育についてたくさん学ぶことができました。子供とちゃんと触れ合う事で、子供の可愛らしさ、一生懸命さなど保育士を目指すわたしにとって、もっと保育士という夢を追う気持ちになりました。

私は最初お絵かきをする所で子供の様子を見ていました。

「これなに？」と聞くと「アンパンマン書いてるの」など答えてくれました。一緒に来たお母さんさん達にも「大学生？偉いね。勉強頑張ってるね。」と声をかけてくれる方もいて、嬉しかったです。その後、びっくり箱を作るブースに移り、子供たちと一緒にびっくり箱を作りました。びっくり箱は子供よりも大人の方が喜んでる姿が印象的でした。

あまり多くのブースに携わる事はできなかったのですが、子供たちと一緒に楽しむ事ができてよかったです。

また壁画も今後の参考になる作品が多くあり、自分も現場へ出た時に使いたいなと思いました。このような貴重な体験ができ、将来の自分に自信がもてるようになりました。

ありがとうございました。

- わくわくファミリーフェスタに参加して、色々な事を経験することができとても楽しかったです。バルーンアートのブースをお手伝いしてもらいました。保護者の方や祖父母の方にアンパンマンの作り方を教えた時に、その保護者の方たちに教えるの上手だねと言われた事がとても嬉しく思いました。子どもにとって触れて遊ぶことや作るという経験は大切なことなのだなと思いました。お絵かきのブースにいた時には子どもにクマの絵を教えたり一緒に絵を書くことができました。今回、子どもだけではなく、保護者の方と多く関わることができ新しい経験と対応の改善点を見つける事ができたので、次の機会に活かせるといいと思いました。この企画は事前の計画や準備など多くの役員さんやボランティアの人たちが関わって成り立っているのだなということを感じることができました。

初めての経験もあり、緊張もしましたがそれ以上に楽しかったのでまたこのような機会があれば参加したいなと思いました。ありがとうございました。

- わくわくファミリーフェスタに参加してみて、風船で遊ぶ場所を中心に参加させていただいたのですが、保護者や祖父母の方が子どものために一生懸命風船で動物やアンパンマンを作る姿や、子どもに風船をあげたときの子どもの嬉しそうな顔を見れて、参加して風船を作るのを覚えてよかったなと思いました。私は付属幼稚園での運動会以外にこのようなボランティアに参加したことがなく、参加してみてたくさんの方のとても貴重な経験ができました。この経験をこれからや就職してからに生かしていきたいし、またこのようなボランティアにも積極的に参加していきたいなと思います(*^_^*)！みんなと楽しい思い出ができてよかったです！
- わくわくファミリーフェスタに参加してよかったと思っています。保護者の方と関わることもでき、身近なもので遊ぶ方法、なによりたくさんの方の子どもたちと関わる事ができてよかったと思っています。壁画も見ていて勉強になりました。保育者になった時に参考にしたいと思いました。まだまだの部分はありますが次の保育実習で今回の経験を少しでも生かせたらいいなって思っています。
- 私は短大に入ってから初めてボランティアに参加しました。

最初はお絵かきしていた子どもにもうまく声かけが出来なくてただ見てるだけになってしまいました。子どもだけでなく、お母さん方も居たので余計に緊張してしまいました。

でも、少しだけ「これ書いてみたら？」や「上手く書けたね！」などの声かけをすることができました。

アートバルーンでは少し緊張もとけて、子ども達と話したりすることができました。

子ども達には花や剣がとても人気でした。花は学校ではあまりうまく作れなくて苦戦していたけど、スタッフの人に作り方とポイントを教えてもらい花を作れるようになりました！何回も割ったり、失敗してしまっただけど、完成して子どもに渡した時の子ども達に笑顔で「ありがとう」や「すごーい！」と言われた時はすごく嬉しくて頑張って作って良かったと思いました。

今回のボランティアを通して、あらためて子どもとかかわっていくことが大好きでこのボランティアがある時にはまた参加したいと思いました。今回のボランティアに参加して良かったなと思いました。

- 今回のボランティアは正直どのような感じなのか想像が付きませんでした。しかし行ってみて子どもたちと直接的に触れ合う機会が多く、とてもいい経験になりました。

また、実習ではあまり関わることがなかった保護者の方々とも今回は少し接するところもあり、最初は戸惑うことや、いつもと違う雰囲気ということもありとても緊張しました。

今回のボランティアではあまりバルーンを作る機会がありませんでしたが、その分、子どもたちと近い距離でハロウィン変装のところやキャンディのところで関わらせていただきました。しかし、実際関わっていて実習の時のように、このような時はどのようにして子どもと関われば良いのかという課題がまた新たに見つかりました。その課題を次の実習までに解決し、今回学んだボランティアでの経験を生かして次に繋げていきたいと思います。

- 今回初めてのボランティアに参加させていただきました。ボランティアをするのは、初めてだったので、参加を申し込んだときはとても不安でした。

ボランティアで行うバルーンアートは初めて作ったのでとても苦労しましたが、子どもたちがバルーンをもらって喜んでくれたのはすごく嬉しかったです。

ボランティア当日はバルーンアートの他にもいろいろなブースがあり、一緒に制作することができたりすごく楽しかったです。実習以外で、子どもに関わる機会は少ないのでまたボランティアがあれば参加したいです。

- 子どもの生き生きとした姿を見たいと思ってやってみたボランティアでしたが、本当に子供たちの生き生きとした姿を間近で見ることができて良かったと思います。また、園長をしていた方とお話したり、一時的に子守を担当してみたり（力不足故、なかなか上手く子守が出来ませんでしたが）保育者になる上でとてもいい経験をしたと思います。

ボランティアのなかで、一番うれしかったことは、皆で作ったアートバルーンを子ども達が笑顔で持って行ってくれたことです。「ありがとう」と恥ずかしながらも言ってくれる子ども達を見て、心から嬉しいと思いました。頑張ってプードルを作ったか良かったかと思います。もし、将来保育者になったらアートバルーンを使った保育もしてみたいと思いました。

昼食の豚汁は、とてもおいしくて三杯もおかわりをしました。このままタッパにつめて持ち帰りたいなあと었습니다。作ってくれた方々にはとても感謝しています。

わくわくファミリーフェスタで、ボランティアとして参加できたことは、とても良かったと思います。このような機会がまたあったら、ぜひ参加したいなあと 생각합니다。

〇〇〇 地域貢献事業の共同実施 (幼児キャンプ・どんぐり広場) 取組報告書 〇〇〇

担当部会・部門：地域連携部会

取組担当者：橋本 一雄

1. 事業名

地域貢献事業の共同実施（幼児キャンプ教室、どんぐり広場）

2. 事業の目的

- 「幼児キャンプ教室」を通じて野外教育の方法を体験することによって、保育者や教育者を目指す両大学の学生が、幼稚園や保育園内における園児の意欲や関心が、野外においてどのように変化するのかを理解できるようになること
- 上田女子短期大学の地域貢献事業として開催している「どんぐり広場」に信州大学教育学部の学生および教職員が参加することによって、保育の現場を体験する機会を共有するとともに、地域の保育ニーズを把握できるようになること

3. 事業の概要と成果

上田女子短期大学では、子育て支援広場「どんぐり広場」を毎年度前期に開催しており、平成22年度以降、信州大学の学生および教職員が当広場に参加する機会を設けてきた。同広場の開催が水曜日2時限の開催となるという時間割上の都合から、信州大学教育学部の学生がこれに参加するためには、その後の授業を欠席する必要があること等の日程上の制約もあり、平成22年度は大学院教育学研究科の大学院生2名と教員1名が参加したものの、平成23年度は教職員2名のみの参加となった。両大学の教職員および学生が協同して子育て支援広場を運営し、終了後には、それぞれの気づきについてのリフレクションを行ったことで、子育て支援に係るそれぞれの気づきを共有することができたと思われ、このことは、学生の感想等としても表れているところである。

また、信州大学教育学部では公開講座として「幼児キャンプ教室」を開催しており、平成22年度以降、上田女子短期大学の学生が、同教室のスタッフとして参加している。同キャンプ教室は、平野吉直信州大学教育学部教授の指導の下、野外教育専攻の学部学生と大学院生が中心となって運営されるもので、長野県内の各地から集った幼児を対象として実施されるものである。平成22年度は上田女子短期大学の学生7名、平成23年度には6名の学生が参加し、料理係や記録係の他、就寝時に子どもたちに対して絵本の読み聞かせを行う「絵本読み聞かせ隊」等を担当。短期大学で習得した保育技能を活かす機会が設けられた。参加した学生は、ほぼ初めて体験する野外活動で、日を追うごとに新しい「気づき」を獲得していく子どもたちの様子に触れ、保育者としての関わり方を考え、実践していたように見受けられる。事後アンケートからも、同教室では、保育者を志望する学生にとって多くの示唆を受けた旨の記載が散見された。

4. 今後の課題

「幼児キャンプ教室」への参加にあたっては、上田女子短期大学の学生の実習等と開催日程が重複しており、保育技能と実習経験を一定程度積んだ2年生が参加することが難しかった。また、「どんぐり広場」に関しては、水曜2限という時間に開催されることから、長野・上田間の往復を考慮した場合、信州大学教育学部の学生が参加するためには、自大学の授業を欠席しなければならないという制約もある。より多くの学生にこうした機会を提供できるよう、日程上の制約を可能な限り取り払う方法を検討したい。



戸隠探検ゲーム



出発前の打ち合わせ



川遊び



野外料理



両大学の参加学生



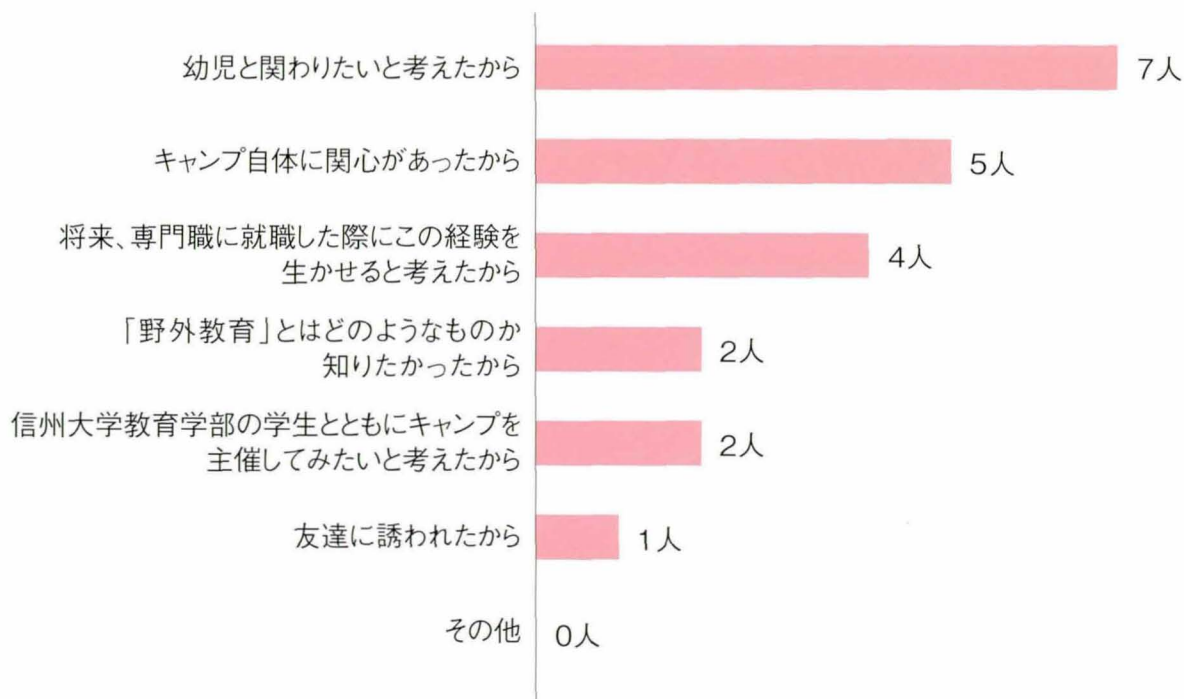
どんぐり広場



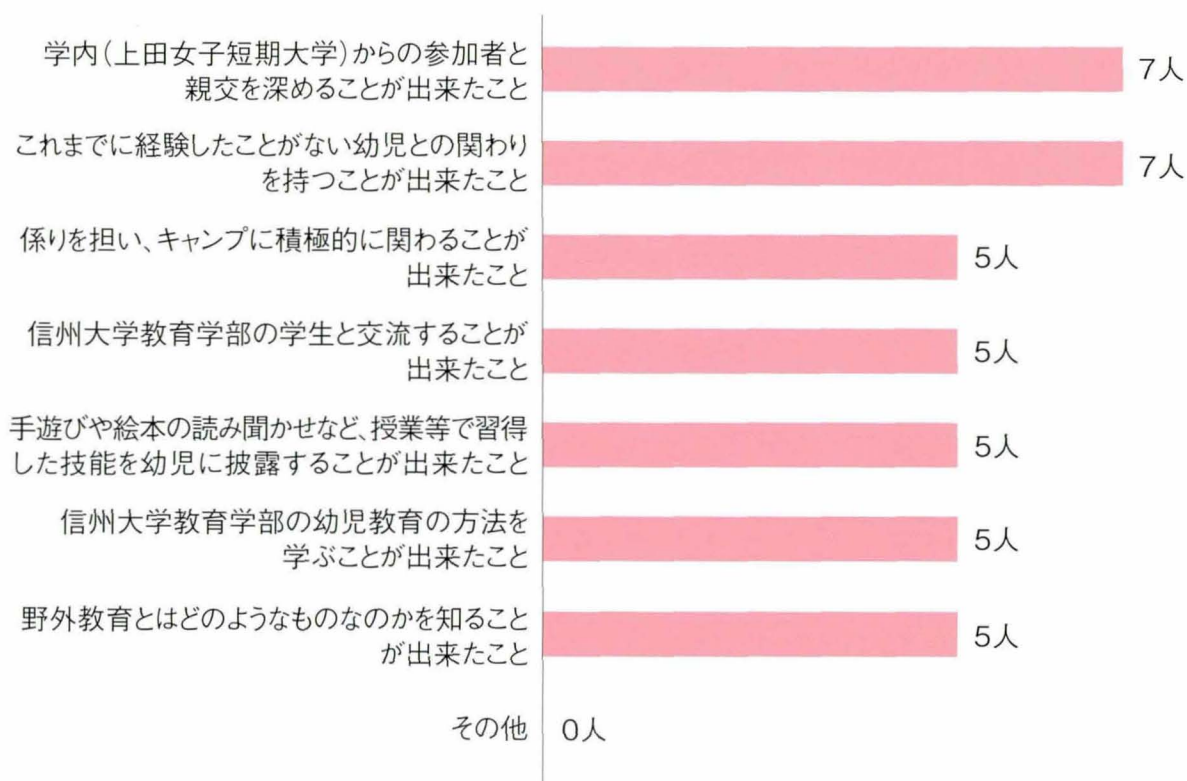
平成22年度信州大学「幼児キャンプ教室」に参加した上田女子短期大学生へのアンケート結果

参加者：7名
回収数：7枚
回収率：100%

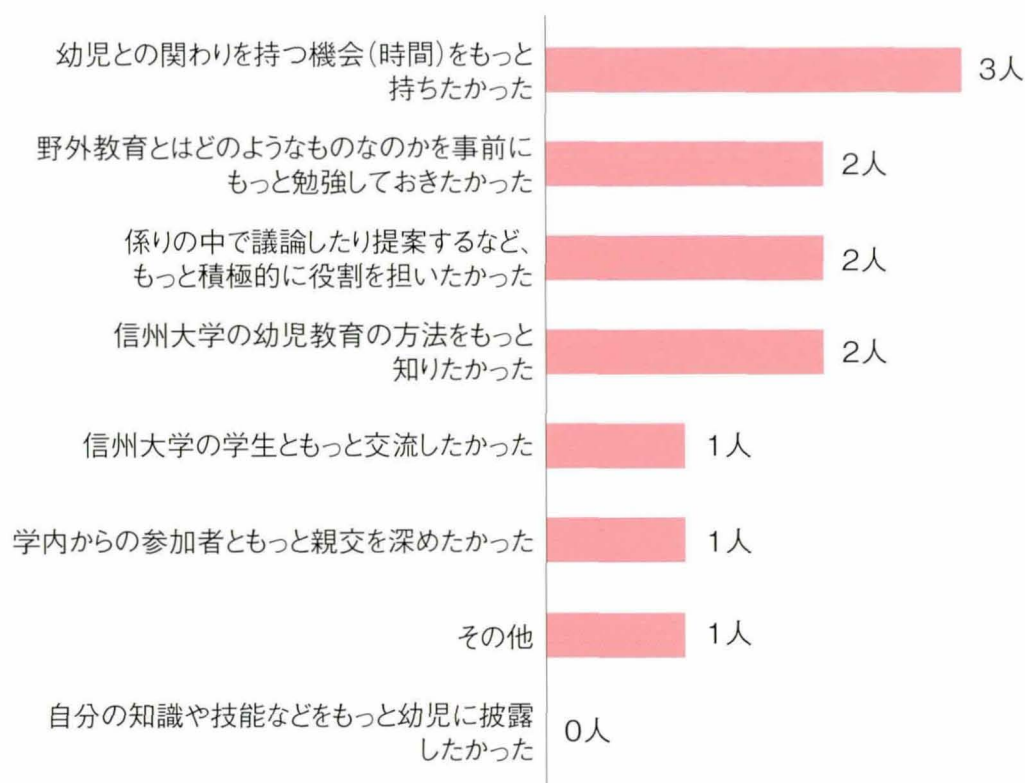
【この幼児キャンプに参加しようと考えた理由として、あてはまるものに○を付けてください。(複数回答可)】



【このキャンプに参加して良かったと思うものに○を付けてください。(複数回答可)】



【この幼児キャンプに参加して、もっとこうしたかったと思う事に○を付けてください。(複数回答可)】



【今日のキャンプの中でもっとも勉強になったイベントを1つ挙げるとすればどれだと思いますか。どこが良かったと思うのかも具体的に教えてください。】

- ・戸隠探検ゲーム：どのように子供たちにヒントを与えれば良いのか、考える機会ができて勉強になったので良かったです。
- ・戸隠探検ゲーム：沢山の子と関わることができ、又、子供が様々な発見をすることができたと感じたから。子供との接し方、関わり方を学べることができた。
- ・登山：子供への励まし方、関わり方を学びました。
- ・森の絵本：子供たちのテントへ行って読んだときに「また明日も来てー」「他のもっと読んでー」と喜んでもらったこと。
- ・戸隠探検ゲーム：どのようにゲーム内容を説明すれば分かりやすく伝わるかを学ぶことができた。
- ・野外料理：初めて子供と料理しましたが、包丁の扱いの難しさや、生き生きと料理を楽しむ子供を見て、とても勉強になりました。
- ・登山：子どもをどういう風に促し元気づけながら頂上を目指すかが勉強になりました。

【来年度以降、信州大学主催のキャンプへの参加をよりよいものとするためには、どのような点を改善すれば良いと思いますか。具体的に教えてください。】

- ・二つの大学生の間に壁があったと思います。もう少し早くから関わる機会があれば良いと思います。
- ・事前打ち合わせをもっとしておき、子供の前に立つときに信大と女子短大スタッフが初対面同然という事がないようにすればなおよい。
- ・自分の持っている知識をもっと十分に引き出して積極的に子供たちと関わっていきたいと思いました。
- ・もっと事前に信大生との関わりがあった方が良いと思います。

【今回の幼児キャンプへの参加全体を通しての感想をお聞かせください。】

- ・初めて参加したキャンプだったので、どんなキャンプなのか分からずに初日を迎えましたが、信大生の方の優しい説明や、活動する姿を見て、これからも保育士を目指して頑張ろうという気持ちが強くなりました。子供たちとの交流はもちろんですが、今まで交流のなかった信大の方や

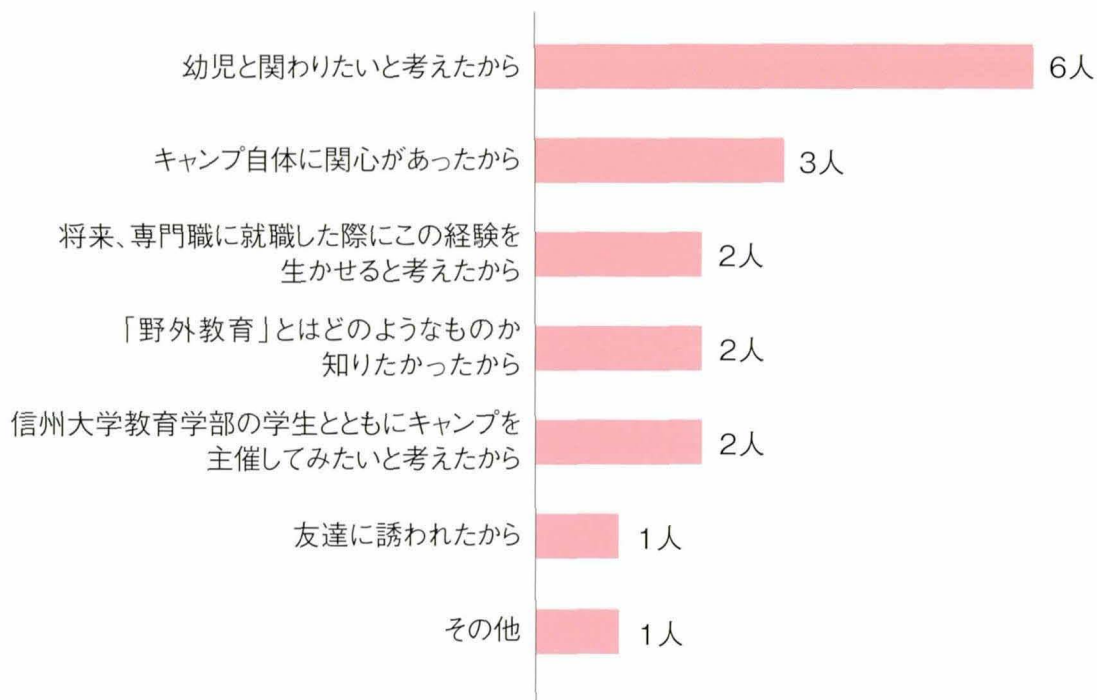
先生などと話をしたり、活動するなど多くの人と交流することができて良かったです。貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

- 今回、幼児キャンプへ参加してみて、本当に沢山のことを学べ、また、経験をする事が出来て、参加して本当に良かったです。子供と関わってみたり、信州大学の学生の皆さんと関わることで、とても良いものを沢山得ることが出来ました。そして参考にさせていただくところも沢山ありました。このことを良く振り返り、自分のものにしていきたいです。子供と接する場面も沢山あり、子供に関する発見もできました。園内などではない、野外というところでは、普段できない事も子供と一緒に体験できました。良い経験になりました。ありがとうございました。
- 最初は不安だらけでしたが、子供と関わっていくうちに離れることが寂しくなりました。この経験が初めての實習で、園児と関わる機会ができてとても参考になりました。幼児キャンプに参加して良かったです。
- 他の大学のスタッフさんと協力しながら、普通では体験できない経験が沢山出来たこと、子供たちとの触れ合いが出来たことで實習前の心構えが出来たことが幸せな4日間となりました。本当に良い出会いになりました。参加できて良かったです。ありがとうございました。
- 野外教育というものを実際に参加しながら、体験し、とても勉強になりました。自然の中での子供たちの姿はとても輝いていたように思います。普段とは全く違う環境の中での生活は大変なこともあったけれど、とても貴重な体験が出来て、参加して良かったと思ったし、この体験を活かしてこれからの活動や實習に役立てたいと思いました。
- 外部の私たちがどのように参加していくのかが良くわからずに、戸惑いはありましたが、信大の皆さんの関わり方を見てどれもとても参考になり、参加して良かったです。戸隠探検ゲームもやらせていただき、とても良い経験になりました。本当にありがとうございました。
- とても楽しかったです。記録として子どもの写真をたくさん撮り、成長した姿を沢山肌で感じ、接することが出来ました。参加して良かったです。ありがとうございました。

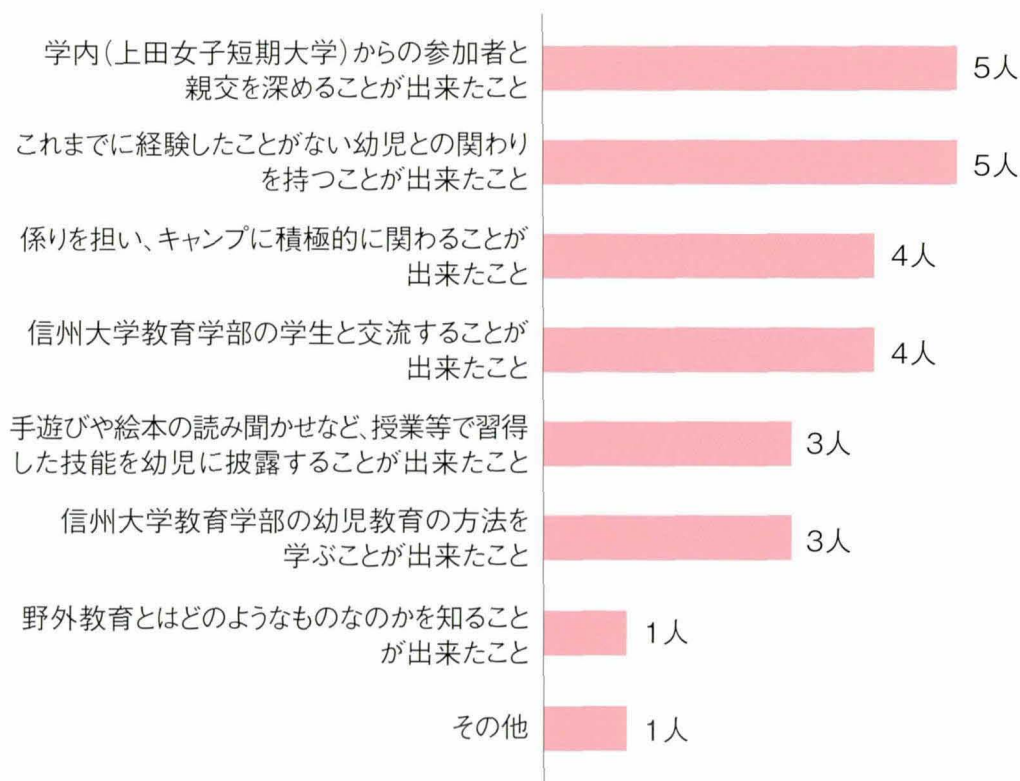
平成23年度信州大学「幼児キャンプ教室」に参加した上田女子短期大学生へのアンケート結果

参加者：6名
回収数：6枚
回収率：100%

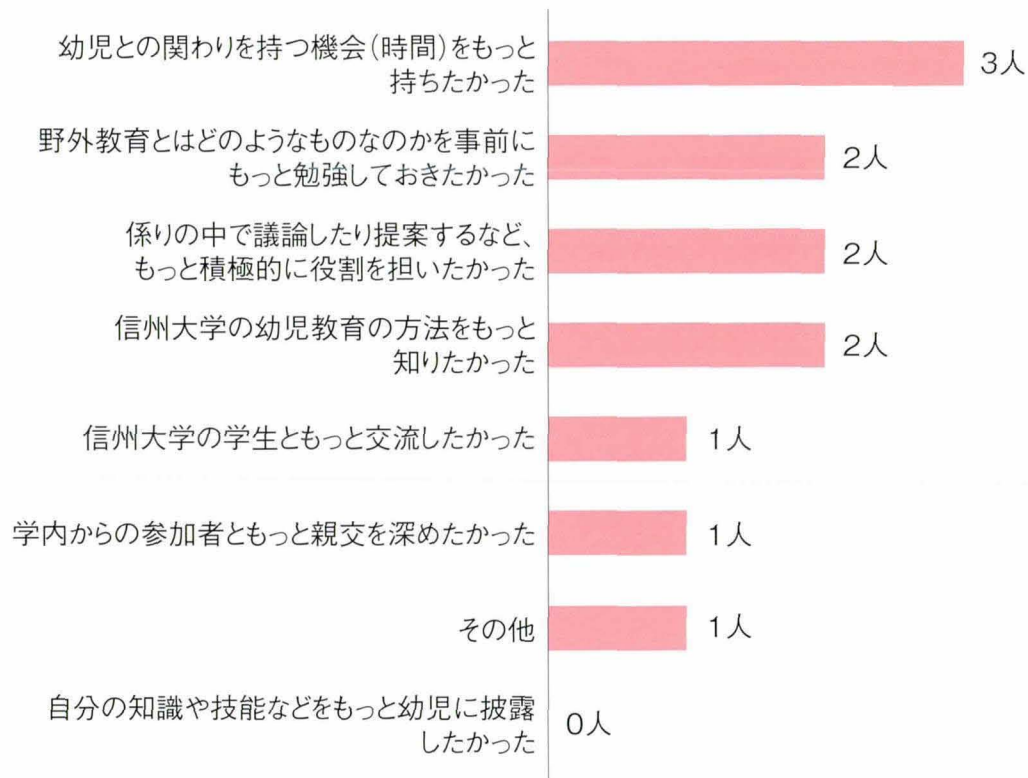
【この幼児キャンプに参加しようと思った理由として、あてはまるものに○を付けてください。(複数回答可)】



【このキャンプに参加して良かったと思うものに○を付けてください。(複数回答可)】



【この幼児キャンプに参加して、もっとこうしかったと思う事に○を付けてください。(複数回答可)】



【今日のキャンプの中でもっとも勉強になったイベントを1つ挙げるとすればどれだと思いますか。どこが良かったと思うのかも具体的に教えてください。】

- ・登山：大人でもきつい道のりを、子どもたちは全員登りきることができていたので、子どもでも大人と同じ事ができるという事をあらためて感じました。
- ・戸隠探検ゲーム：動物になりきって子どもたちに話しかけることや、子どもたちにわかりやすい説明の仕方、またスムーズに進めていくことが実際に経験できて良かったです。その場での声掛けや対応が大変でしたが、このイベントで勉強になりました。
- ・戸隠探検ゲーム：キャラクターになるという今まであまり経験したことのない体験をさせて頂きました。最初は恥ずかしいと思うところもありましたが、子どもたちと一緒に楽しめることや、子どもたちが班の子たちと一緒に考え協力するところを見ていて、大切なことを自然と学ぶことができるゲームだなと思いました。
- ・戸隠探検ゲーム：普段ではあまり体験することのできない、幼児キャンプならではのイベントだと思うからです。子供たちの集めた食材カードが実物の食材に変わるというアイデアも面白いと思いました。
- ・森の絵本：子どもたちの前で絵本を読むのは初めてだったので不安だらけでしたが、2回、3回と回数を増やすうちに慣れてきて上手く読めたので良かったです。
- ・戸隠探検ゲーム：一番勉強になった。自然に触れ合いながらゲームをするだけでなく、仲間との絆を深めたり、みんなで一緒に考えて協力して探検できるところが良かったと思う。企画する側(ゲームを補助する)としては、どうしたら子どものモチベーションを保ちながら、仲間と協力しよう、仲間を思いやろうという気持ちを引き出すことができるかの難しさを体験し知ることが出来ました。

【来年度以降、信州大学主催のキャンプへの参加をよりよいものとするためには、どのような点を改善すれば良いと思いますか。具体的に教えてください。】

- ・信大生の方たちがいろいろなことを考えてくださり、とても良かったです。
- ・もう少し多くの子どもたちが参加できれば、キャンプに参加する子ども達も友達の輪が広がるのかなという気がします。
- ・戸隠探検ゲームの導入、展開、まとめの紙などがもう少し早く自分達の手元にあったら良かった

かなと思いました。

- 私のことなのですが、他の学生ともっと積極的に関われたら、作業がスムーズに進んだと思います。また、朝の体操を何にするか考える時間をもっとあれば、もっと良いものになったと思います。
- 去年のパンフレットなどを見せてもらえると初めて参加する人は想像しやすいと思う。

【今回の幼児キャンプへの参加全体を通しての感想をお聞かせください。】

- キャンプに興味があったのと幼児と関わりたいためにこのキャンプに参加しました。想像していたものとは違い、大変な部分もたくさんありましたが、初めて経験することもあり充実した3泊4日を過ごすことが出来ました。また機会があったら参加したいです。
- 4日間ボランティアをして、初めは長い期間で大変だと思ったけど、気付けばあっという間のキャンプで、もっと参加していたいと思いました。私は食事係りで朝早くから食事をつくり忙しかったです。でも、信州大学の学生と協力したり、上手に作れた時の達成感があって楽しかったです。
- 子ども達の名前を覚えたり仲良くなることができて良かったです。また、子ども達に絵本を読んだり、子どもへの関わり方など勉強になりました。
- もう少し積極的に皆と関われたら良かったと思うけど、良いキャンプになったと思います。
- 私は裏方が好きなので、準備したり片付けたり、皆で協力できて楽しくて充実したキャンプ生活でした。
- 最初はあまりイメージがわからなくて楽しみと不安が半々で、実際に行ってみて驚くことも沢山ありました。特に登山は子ども達の成長が見えて私にとってもすごくいい経験でした。普段の実習では経験しないような体験ができたことや、信大生と子どもたちとの関わり方も見ることで、今後の実習に役に立つキャンプでした。
- 信大の方と交流しながら野外教育の専門的な教育を知ることができ、またキャンプ自体にも興味があったので、とても良い経験が出来ました。短大で習ってきた絵本の読み方や様々な生活の場面での幼児との関わり方などを、この4日間で試してみたり実践することができ、とても楽しく充実して過ごせたと思います。
- この幼児キャンプ特有ルール（名前をキャンプネームで呼ぶ、いただきました・ごちそうさまでしたの挨拶など）もおもしろくて、子どもたちがキャンプを楽しめるもののひとつだと思います。今回のキャンプに参加できて良かったです。
- 初めは不安なことばかりでしたが信州大学主催のキャンプに参加して、普段の実習では体験できないことや、幼児と関わることで知ることができたことがたくさんあったので、参加できて良かったです。ありがとうございました。
- 私は記録係だったので、子どもたちや学生スタッフの方といろいろな場所に同行することができ、貴重な体験をすることができました。3泊4日のキャンプの中で川遊び・登山など様々なイベントがあり、子どもたちの生き生きとした姿を沢山見るすることができました。その裏では先生方や学生スタッフの皆さんが関わっていることがわかりました。顔合わせ、キャンプ、報告会とあまり長い時間ではなかったと思いますが、私もこのキャンプのスタッフとして関わることで良かったです。

〇〇〇子育て支援シンポジウムの開催 取組報告書 〇〇〇

担当部会・部門：地域連携部会

取組担当者：市東 賢二、小池 浩子

1. 事業名

子育て支援シンポジウムの開催

2. 事業の目的

地域連携部会が中心となり、自治体及び地域の児童福祉・保健・医療関係機関、ボランティア、NPO等の代表を招きシンポジウムを開催すること。それぞれがどのように連携して子育て支援等を行い、今後、どのような地域の連携が必要であると考えられるのか、課題を析出すること。自治体及び地域の児童福祉・保健・医療関係機関、ボランティア、NPO等の代表を招いてシンポジウムを開催することによって、地域の社会資源の連携の実情と課題を明らかにするとともに、地域の中で求められる保育者・教員像を明らかにすること。

3. 事業の概要と成果

【概要】

平成22年12月11日 長野市内ホテルにおいてシンポジウムを以下の通り開催した。

1. 会場 ホテルJALシティ長野
2. 参加者 上田女子短期大学教職員10名、信州大学教職員9名、信州大学学生13名、参加者は上記を含む総計58名
3. 概要 児童福祉・保健・医療関係機関、ボランティア、NPO等の代表による事例報告、およびパネルディスカッション、事例報告者は次の4名
 - ・長野市保育家庭支援課課長補佐兼なかじょう保育園長 青沼美恵子氏
 - ・長野市立徳間小学校日本語教室担任 有賀光世氏
 - ・上田市民生委員・児童委員協議会主任児童委員部会長 宮下千元氏
 - ・長野市民病院小児科部長 青沼架佐賜氏
4. パネルディスカッション 上記4名が参加し、司会は信州大学教育学部島田英昭准教授が行った。その後フロアとの質疑応答が活発に行われた。

【成果】

地域の社会資源の連携の実情と課題が明らかになり、地域の中で求められる保育者・教員像の方向性が明らかになった。多方面にわたる分野から子育て支援に関心をもつ参加者が集まったことで多様な意見を共有する場となった。参加者は地域の現状を聞き、異なる立場での問題点や課題を知ることができた。また、参加者は子育て支援における地域の連携について多様な価値観を認め合い、当事者として関わって協力していく必要性をあらためて認識することができた。

4. 今後の課題

シンポジウムで提起された内容を具体的に現場の活動に活かしていくために、地域の子育てを行う諸機関との継続的かつ連携的な取組を行うこと。

外国籍児童等を支援する地域の取り組みを見学することによって、地域の固有の課題に対して現在どのような対応がなされているのかを把握する。その上で外国籍児童等を支援するために保育者や教育者に求められる能力や資質を分析する。



パネリスト



全体の様子

平成 21年度文部科学省「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」指定事業
「乳幼児期から小学校までの育ちを促す地域人材の育成システム『信州モデル』の実現」子育て支援シンポジウム

子どもの育ちを支援するための コミュニケーションを考える

— 経済・文化・健康・発達をめぐる困難を超えて —

期日：2010年12月11日(土) 13:00▶16:20
会場：ホテル JAL シティ長野

プログラム
事例報告 (下記パネリスト4名)
パネルディスカッション
[パネリスト]
青沼栄佐雄 先生 / 長野市民病院小児科部長
青沼美恵子 先生 / 長野市保育家庭支援課課長補佐
兼 なかじょう 保育園長
有賀光世 先生 / 長野市立徳開小学校日本語教室担任
宮下千元 先生 / 上田市民生委員・児童委員協議会会長
[司会]
島田英昭 (信州大学教育学部)

アクセスMAP▶

※参加費は無料です。
※会場は長野市にあるホテルです。
※交通費は自己負担です。

主催 上田女子短期大学幼児教育学部・信州大学教育学部
後援 長野市・上田市・長野市教育委員会・
上田市教育委員会・信濃毎日新聞社・NBS長野放送

申し込み/問い合わせ先
erinsho-senryaku@shinshu-u.ac.jp
上田女子短期大学 GP 推進室
〒386-1214
長野県上田市下之郷乙 620
TEL: 0266-38-2352 FAX: 0266-38-7315

※お問い合わせは先ず電話(平日10:00~17:00)またはEmail(お名前・電話番号など明記)にて申し込み願います。

信州大学教育学部 GP 事務室
〒380-8544
長野県長野市西長野 6 の口
TEL: 026-238-4037 FAX: 026-238-4019

申込み×切
12/3(金)まで

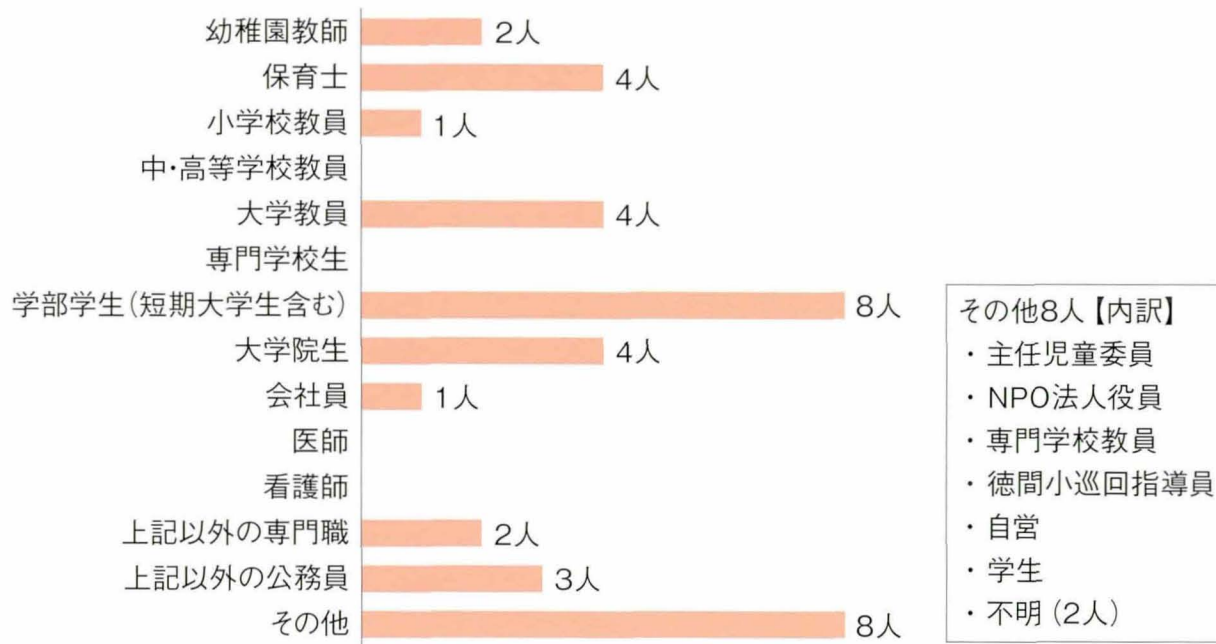
子育て支援チャラシ

子育て支援シンポジウムアンケート結果

参加者：58人
回収数：37枚
回収率：63.8%

【I ご所属等、あてはまるものに○をつけてください】

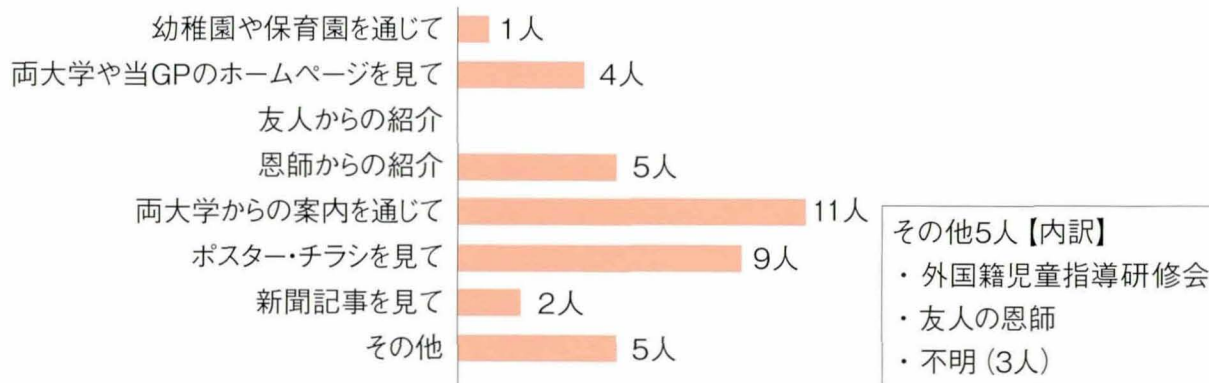
(1) お仕事等についてあてはまるものに○をつけてください。



(2) 現在小学生以下のお子さんの子育てをしていますか？

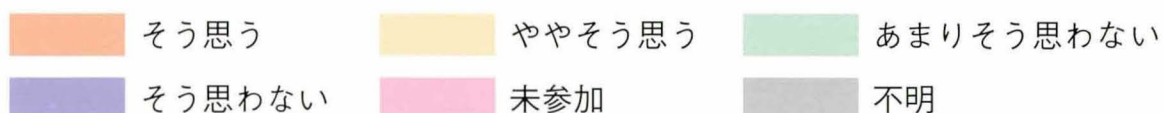
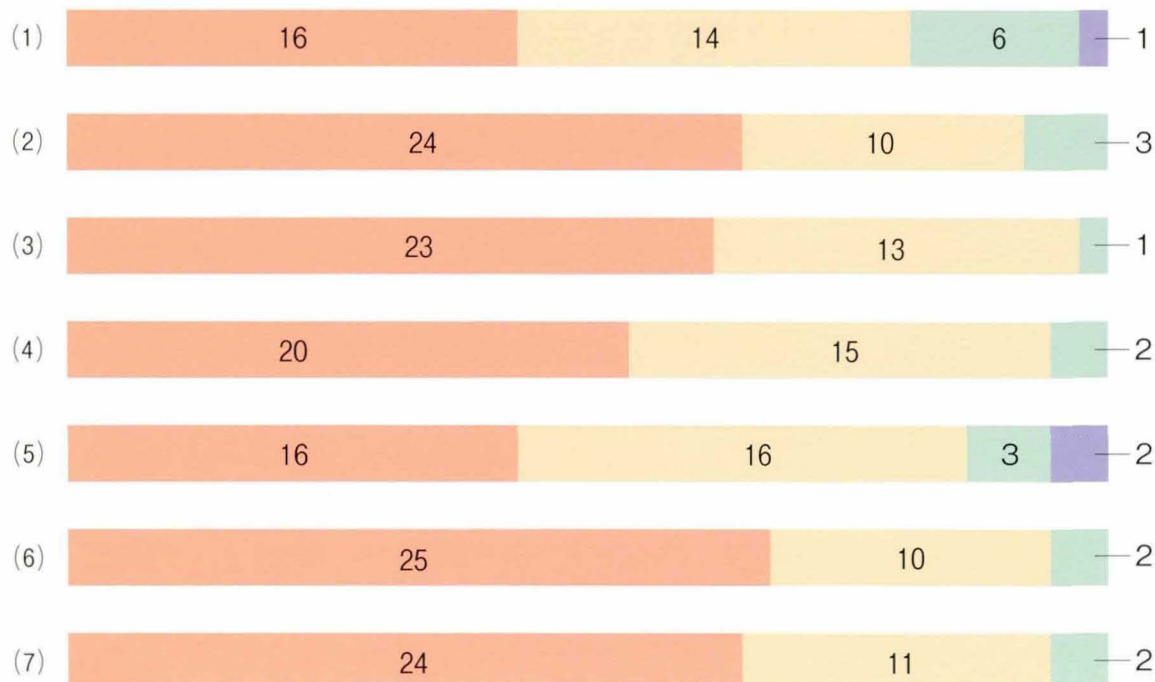


(3) このシンポジウムをどのような方法で知りましたか？

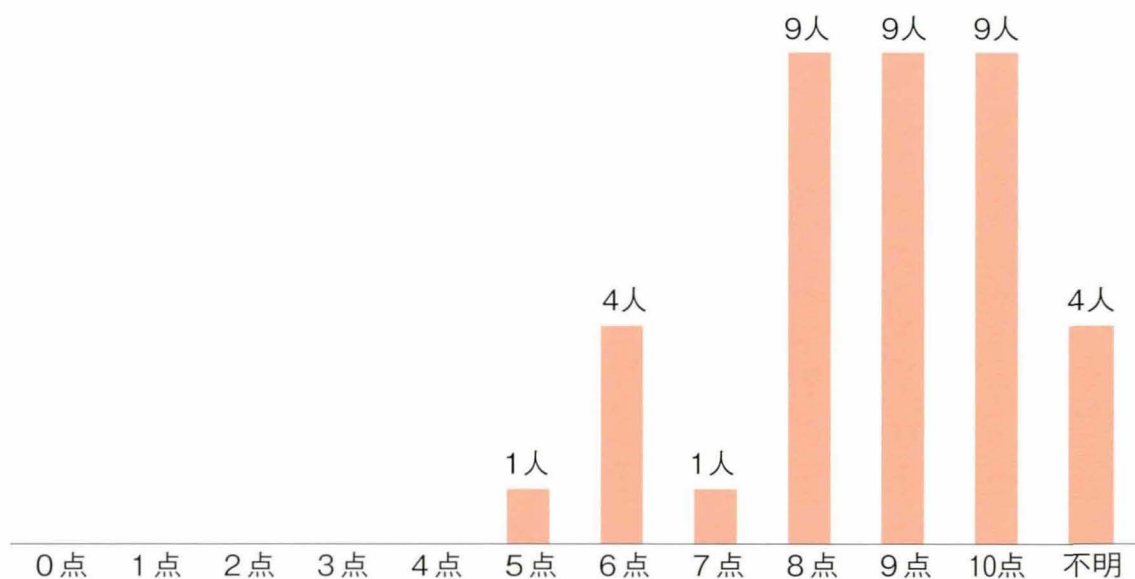


【Ⅱ 本日のシンポジウムについて、あてはまる番号に○をつけてください。】

- (1) 保育園から見た子育て支援の事例報告が参考になった
- (2) 外国につながる子どもの支援に関する事例報告が参考になった
- (3) 民生委員から見た子育て支援の事例報告が参考になった
- (4) 発達障害に関する事例報告が参考になった
- (5) パネルディスカッションを通じて、幼稚園・保育園、病院や学校など、それぞれの機関が必要としている「支援」がどのようなものなのかを理解することができた
- (6) パネルディスカッションを通じて、子育てに関して地域の「連携」の必要性を感じた
- (7) 全体として、このシンポジウムは有意義なものであった



【Ⅲ 本日のシンポジウム全体を通しての満足度は10点満点の何点くらいですか。】



【Ⅳ パネルディスカッションのテーマでもある「地域」の連携についてお聞きします。「子育てを支援する」という観点から見て、現在、あなたがお住まいの地域では、幼稚園や保育園、病院や学校といった地域に存在している機関（＝社会資源）の連携はうまくいっていると感じていますか？その実情や課題について、お聞かせください。】 お住まい（市・区・町・村）

- ・（長野市）連絡の機会はあるようだが、学校は把握していないことが多く、民生児童委員さんが困っていることが多いのではないかと思います。
 - ・（長野市）それぞれの機関がその中で一生懸命頑張っているが、連携はなかなか難しい。
 - ・（長野市）地区ごとに違いはあると思うが、住民自治協議会を充実し、保育園や学校も地域との連携を大事にしていくことが子どもたちの成長につながると思う。
 - ・（長野市）小さな町村では比較的連携はうまくできるのではないかな。しかし、都市化し、それぞれの機関が複数あり、利用者が選択利用している状況ではむずかしいと思う。又、個人情報保護のハードルが非常に高い。
 - ・（長野市）あまり関わることがないので分からないです。
 - ・（長野市）今年、大学の関係で長野に越して来たので長野市の事はわかりませんが、私の住んでいた町は上手くいっていないのではないかと思います。実際に見たわけではありませんが、田舎になるほど各機関が（物理的に）離れてしまっているため、交流も難しいのではないかと思います。
 - ・（長野市）担当地区内に幼・保・小・中がたくさんあります。小学校・中学校は、地域連携をとということで、地域ボランティアの受け入れ、安全パトロールなど、少しずつ学校と地域がつながれるようになってきています。（学校単位で）幼稚園・保育園については、家庭と園との関係が中心で、地域とのつながりが薄いと思います。（各園で行われている未就園児対象の教育や食育指導、園開放の情報を子育て中のお母さん方へお知らせすることでつながれればと活動しています。）
- 「地域」の連携…子育て中の方々は（当事者は）何を必要としているのでしょうか。どうしてほしいのか、ニーズもしっかり把握してアプローチを考えるのが連携の大前提ではないかと思います。
- ・（長野市）長野市の主任児童委員さんは各地区で子育て支援を助けていただいております。とても助かります。公立支援センターの職員もお手伝いをさせていただきながら地域の方の声が聞かれよいと思います。
 - ・（長野市）地区によって差があると思います。外部のつながりが必要だと感じている教員・職員がいる地域ではうまく連携ができていないのではないのでしょうか。
 - ・（長野市）学校関係は青沼Drに大変お世話になり、かなりいいのでは？学校からは早期に診て頂けている様です。
 - ・（長野市）関わることがあまりないので、よく分かりません。すいません。
 - ・（長野市）学生で、あまり考えたこともなかったです。ボランティア等があれば参加して、私も連携をする一員になれたらと思います。
 - ・（長野市）学生なので全くわからないと感じています。知ろうとしていなかった私自身問題だと感じました。
 - ・（長野市）妻科の方に住んでいるのですが、地域でのお祭りをやったり神社で文化祭のようなものをやったりと、地域のつながりは強く子どもたちが楽しそうに参加している様子が見られます。私は学生ですが、町内会費などもちゃんと徴収していて、大切なことだと思います。
 - ・（長野市）行政の方が、地域子育て支援事業について、子育て支援センターや地域の拠点である保育所を把握できているので、うまくいっている点は多いと思います。ただ、社会福祉協議会と大学・市との連携という意味では、大学のつながりはだいぶ弱いと思う。
 - ・（長野市）正直、よく知りません。子育て広場や放課後子どもプランなどがあるので、連携はできているのだろうと思いますが…直接子育てに関わっていない人たちにとってはまったく別世界になっていると思う。もっと関係のない人たちも巻き込んでいけるようになったらもっといいなと思います。
 - ・（長野市西之門町）まだよく分からないです。
 - ・（中野市・野沢温泉・木島平村・飯山市）北信区域総合相談センターが福祉と教育のカベをのぞく取組をしているが、まだ行きづまっている人が多い。
 - ・（上田市）連携を感じられる部分はありますが、さらに必要性を感じます。

- ・(上田市) 自分が子育てをしているわけではなく、保護者を養成する立場で、現場との連携の機会がほとんどないため、連携の実情はわからないが、必要であることに間違いはないと思うので、直接の担当者(機関の長ではなく直接子どもとかかわる教師・保護者)が情報の共有・交換できる場を持てたらいいのではないかな…
- ・(上田市) まあまあうまくいっている。病院が少なく、予約がすぐとれないのが課題。
- ・(上田市) 地域ごとに、幼保小の連携は以前に比べると、だいぶ増えてきているように思う。実際、発達障害の子どもを就学させる際、連絡会を待たずに様子を伝えるようにし、小学校からも先生方に様子を見て頂く機会をつくるようにした。そうすることで、スムーズに入学することができている。幼保小の連携は、うまくいき始めていると感じるが、行政(市)と園の連携がもっととれるようになると、入園前の発達に問題をかかえている子どもに対しての入園後の配慮や支援がもう少しスムーズになるのではないかと感じる。(健診などでの情報が園にあがってくるといい)
- ・(上田市) 上田市に住んでいますが、長野市内で子どもに関係する仕事をしています。長野に視線が向いているせいか、上田の子どもに関する場所・スタッフが少ないと思います。30年ほど前には、社協の子ども相談のお手伝いをしていましたが、今はどうなっているのかもわかりません。いくら、私の視線が長野に向いているとは言え、上田の資源がよくわかりません。コーディネートが不十分だといつも感じています。残念です。
- ・学校や医療機関からの指摘で、専門機関や支援機関を紹介される場合は、連携がとれているように感じますが、そういった機関を紹介されない場合、保護者がどこへ相談したらいいのか分からないといった状況があるように思います。
- ・連携ができつつあっても、担当が変わってしまうと、途切れてしまったり、うすくなってしまうなどが課題。
- ・全ての所が忙しすぎてしまい、連携の大切さはよく分かっているが、時間的に難しいと感じる。

【V 本日のシンポジウムのテーマである「子どもの育ちを支援するためのコミュニケーション」に関連してお聞きします。本日のシンポジウムでも報告があったように、現在、保育や教育の場には、様々な困難を抱えた子どもたちがいます。そうした問題に対処することのできる保育者(幼稚園教諭・保育士)や小学校教員には、どのような能力(知識や技能)が必要だとお考えでしょうか?ご意見をお聞かせください。】

- ・ちがいを認めあうこと
- ・困難を前向きに、より楽しく解決していく能力
- ・自分の考えを明確に伝えていく力
- ・カウンセリングができるように(できなくても、知識としてでも)
- ・価値観
- ・まず知識と実践のつながりが大切だと思う。どちらか一方では使えないと思う事は多い。
- ・自分の立場や苦労のみを主張するのではなく、広い視野に立っていろいろな意見を聞き入れて受け入れることのできる能力が必要だと思いました。
- ・くもりのない目で、見る力。
- ・発達障害等に対する正確な知識が不可欠だと思います。また、コミュニケーション能力も必要だと思います。
- ・保護者を支える能力のある人が必須=子どもの成長へとつながる。
- ・コーディネートする力、自分の知識を増やさなくとも人と知り合い、その人の能力を見出して参加してもらう。あきらめない。人を信じて、人とどうにかやっていくのをイメージする力。
- ・専門的な知識を持っていることは当然良いことだと思いますが、引き出しを多く持っていることが必要だと思います。ケースカンファレンスに、どれだけ必要な人を集めることができ、どれだけ効果的な情報を集めることができるかが能力だと思います。自分で勉強できなければ、できる人に協力してもらう、それで良いと思います。
- ・コミュニケーション能力
- ・カウンセリング、コーチング、ソーシャルスキルが必要かと思う。
- ・困難を抱えている児・人に寄り添う気持ちが大切だと思います。(自分の常識から出たいと思う)
- ・支援する立場(?)の者が支援を必要とする人に近づかなければ、待っているのではない!
- ・他者とのコミュニケーション能力に尽きます。専門的な知識があっても、子ども・保護者・他者

との話、説明ができないようでは何もできないと考えています。青沼医師のお話にあったように、広い気持ち・他者を思いやることのできる心、宮下さんのお話の中の「常識」を身に付ける必要があると思います。

- 相手の気持ちを理解することと、相手の良い面を見つけることだと思います。
- 問題を抱えた子への対応（具体的な）と、その保護者への寄り添い方。相談・話を傾聴するなど。
- 個の特性をよく理解したうえで対応していく力が必要。その子の成長を見通していける知識やスキルが大事と思う。
- 今回のお話を聞いていて、現在問題となっていることを知ることができました。現場に立つと、自分の見ている現場の様々な問題点は分かってくると思うのですが、他の現場での問題と共有する機会がなかなかないのではないかと思います。似たような問題であれば、共有した方がよりよい解決につながると思うからです。なので、そういった共有・連携スキルが必要であると考えます。
- 現場を横断、フカン的に見られる立場と招集できる権限のある人が必要であるのではないかと考えています。
- 地区の子育て支援の活動に、保育士をめざす生徒さんにお手伝いいただきました。お子さんとは関わられるのですが、お母さん（保護者）方との関わり方がわからない様でした。幅広い年代の方とのコミュニケーションの経験・傾聴するという技術は現場に出たときに必要になってくると思います。
- 色々な事例を持っている先生方が、連携してその子の困り感を理解し、互いにアドバイスをし、試行錯誤しながら配慮していくことが大切だと感じる。
- 親への配慮、理解も大切だと感じる。専門的な知識だけでなく、その子が実際に園でどんな生活を送っているかの状況をよく読みとり、伝えていく努力も必要だと思う。そして、その子をとにかく色々な環境をよりよいものにしていこうとする親との共通意識を持つことが必要だと思う。
- 基本的には専門的な知識（学科以外にも）が必要だと思います。その他にも連携をとるためのフットワークの軽さも必要なのではないかと思いました。
- 子どもの様子を細やかな部分まで見ることができることが必要だと思います。特に発達障害を持つ子どもは他の子どもと見た目ではほとんど差がないため、子どもの様子から判断する必要があると思います。早期の療育・診断がその子どもの将来を大きく左右することも考えられるため、できるだけ早く気付くことが大切だと思います。
- 各困難に対しての、幅広い知識及び子どものためにそれらの知識を積極的に得ようとする意欲。また子どもだけではなく、親のことも考えられるような多面的な捉え方を持つこと
- 自分達の世界以外への想像力
- 子どもたちの気持ちを受け止め、その課題を共有し、解決するための方策を話し合える“コミュニケーション能力”が必要だと思う。知識・技能だけでなく、それをお互いに認め合い、伝え合い、情報を発信できることが必要なのではないか。
- 教育の技術論だけでなく「人を思いやる心」を高める教育をお願いしたい。
- 学校では、外国語の話せる先生もいる学校もあるようだが、保育園にも色々な言語の子供たちがいる。兄弟がいて、両親が話せるが本人は話ができない子が多い。
- 通訳や電話相談など派遣、支援してくれる行政部署があるとよい。
- 障害に関する知識と関わり方、人と関わるための能力（コミュニケーション・アサーション）
- 助けて、と言える勇気。助けて、と言ってもらえる存在であること。
- 教員を志望している人の多くは、学校が好きな人が多いと思います。でも、実際は学校に行けない子や嫌いな子もいるわけで、そういう子達の気持ちをわかるようなとか寄り添えるような人間性が必要だと思います。自分の常識とのズレというか、自分と違う文化というか考え方というものに気づいていくことが大切だと思います。

【Ⅵ 本日のシンポジウム全体を通してのご感想をお聞かせください。】

- 青沼先生より、子供のかばんもちをしている親がいるというお話がありましたが、一緒に過ごす時間が少ないことを、どう子供と接していくか。しつけとは全く別に考えなくてはいけないと思いました。人とのつながり、自分で生きていくたくましさ育てる教育者、親も育てていくことが大切だと思いました。ありがとうございました。
- パネリストの先生からも出たことですが、かつての日本は、隣に誰が住んでいるかをお互いにわ

かっていた間柄だったと思う。核家族化・少子化・個別性が高まり、他人を干渉しない生活が主になっている現代は、もっともっとコミュニケーションがとれる場が必要だと感じた。学生を見ている、コミュニケーション不足でトラブルを起こしたり、悩みをかかえたりする場面が多い。“自分だけ”でなく“他の人と関わって生活をしている”ということを理解し、学生にも経験させ、子ども（だけでなく人）の気持ちを感じとれる保育者・人材を養成できるように努力したいと思う。

- 私現場で、発達障害の子、また障害がうたがわれる子がとても増えてきていることを感じる。その中で、親への伝え方や対応の仕方を日々考えさせられている。今日のパネルディスカッションの中で、そんな親との関わり方に対してのヒントがたくさん得られた。特に、宮下さんのお話の中で自分の経験を押しつけないことや、結論は相談した親がつけるというお話、とても参考になりました。
- 地域内の小学校の校長先生より、発達障害（私が信大在学時には学ばなかったことが沢山あります）・知的障害のお子さん達への地域の理解・サポートがあればというお話がありました。私たち児童委員も、ご相談があったときに専門機関へつながれることは、大変心強く思います。これからも、地域福祉の立場で継続してお子さん達の育ちを見守っていければと思いました。本日は研修の機会をいただきありがとうございました。
- 子どもをとりまく問題に携わっている方のお話を聞いて、あらためて普段感じている連携の必要性を感じた。そろそろ、具体的にどのような人材育成が必要とされているのか、どういう機関が福祉と教育の橋わたしをしていくべきか、どのような社会資源が必要とされているのかを、考えることから行動することに移す時期ではないかと考えています。
- 地域の連携を通して子育て支援にみんなで力を発揮できればよいと感じた。
- マンパワーの連携ができればよいと思った。
- 参加させていただきよかったです。また続けていってほしいと思います。
- 園長の発表では、エピソードは紹介されたが、現場の課題がわかりにくかった。行政の責任者でもあるのだから、長野市のかかえる課題を明確にしてほしかった。日本語教育については全く知識がないのでそうなのかと知ることができた。宮下氏の話は実践をふまえた具体的事例でわかりやすかったが、熱意だけで解決できるのか（なり手がいないなど）疑問。医師としての立場からの話興味深かった。
- それぞれの立場の方の事例報告を拝聴し、非常に勉強になりました。
- 総じて大変有意義でした。ありがとうございました。学生に広げていける様にしていきたいです。
- 宮下様より先生の常識と世間の常識がズレている→具体的にお話も少しあると…
- 連携は、最終的には機関・組織同士のつながりにする必要があると思いますが、まずは、人々とのつながりから始まると思います。立場の異なる人同士が、お互いの仕事内容・思いを理解することが必要だと考えています。お互いを知らないからつながることができないのではないのでしょうか。忙しいから連携できないとは言いたくありません。何のために連携するのか、子どもが生きていくためにつながる必要があるのだと思います。自分の仕事の目的を見失っては、無駄な連携になると思います。教育する立場の方々を育成するに当たって、“子どものため”ということを忘れてほしくはありません。子どもが好きだから先生を目指すという気持ちを持ち続けられるような教育をしてください。今日はありがとうございました。
- いろいろな考え、思いが聞けてよかった。行政が…という意見があったが、行政もいっぱいかなと感じることも多々あり、互いに知恵を出し合って。
- 外国籍の児童の問題は、別に扱った方がよいと思う。軽視するつもりはないです。言葉の理解力については、外国籍・日本籍をもっている、両親が日本人であっても、言語の理解力が不足している為に、学力が身につかないケースが山ほどあります。「言葉」に関係した「言葉」が原因となる支援については、それだけで大きなテーマとしてとり上げてみてはどうでしょうか。外国人・外国籍の子どもだけの話題ではすまないことです。「言葉の理解」はすべての生活に影響します。次の世代にも影響します。その子一人の問題ではありません。私は、ビザが切れている子に対してのケアもしています。地下にもぐってしまったら、問題は拡大します。
- 連携も必要でしょうが、自分の知らない情報が幼保・小中と送られてゆく事に恐ろしさも感じます。ここに本人家族も関われる方法はないのでしょうか。
- 問題をかかえている家庭等への支援中心でしたが、現在の子ども集団の中でスピード・ノリについていけない子どもたちについて考えて欲しいです。特に問題行動はないので全くかえりみられ

ないのですが、本人達は苦勞しています。

- その国での教育と母語学習を保障している国があります。とてもうらやましいですね。日本ももっと大きくなって欲しいと思います。
- 様々な職種の方々の意見を聞いたところがとても良かったと感じています。また、こういった場が連携につながる個々のつながりをつくるきっかけにもなるような気がしました。
- 今回のシンポジウム、全体を通してよかったと思いました。
- 小学校の教師を目指しているので、自分にとって非常に興味深い内容でした。パネリストの方々のお話もわかりやすくなりました。連携についての困難点や問題点を知ることは、1つの側面だけではない面を知ることができてためになりました。
- とても勉強になりました。ありがとうございました。学生が地域で学ぶというお話が心に残っています。自分から積極的に地域に関わっていかれたらと思いました。
- それぞれのセッションでの課題・問題点が様々であることがわかった。
- 地域とのつながりについて、今まで考えたことがありませんでした。今回色々な立場の人のお話を聞く中で、自分は狭い世界で生きているのだなと思いました。地域の中に住んでいるということを考えてなかったのも、いま住んでいる場が提供されているものなのということをもっと考えていきたいなと思いました。地域の人たちと今まで関わってこなかったからそう思うわけで、これから少しずつ外の世界に目を向けて、内の世界にしたいと思いました。
- 今回のシンポジウムで問題となっている事柄とその事例について具体的に聞くことができて良かったです。またこのような機会があったらぜひ参加させていただきたいです。
- 様々な視点の方々がいて、大変勉強になった。
- 今日は大学の授業の課題を提出するために参加したのですが、そのようなきっかけがあつて今日良いお話をたくさん聞くことができて本当に良かったと思いました。将来に向けてモチベーションが上がったし、“連携”を実際どのようにしていくのかという具体的な展望が見えて、連携は実際に可能なのだなと思いました。
- 授業のレポートを作成するために参加したというのが正直なところですが、想像以上に有意義な時間を過ごすことができました。私は「教育」という観点で子育てや支援を考えてしまいがちですが、小児科の先生、民生委員の方など多方面なところでご活躍されている方々のお話が聞けて、本当に参考になりました。知らないことを知ることができ、関心を持てるようになり良かったです。
- 多面的なパネリストのみなさんのおかげで問題を考える視野が広がりました。すぐに答えが出ることではないことだと思いますが、みんながなんとかしていかなきゃと考えること、それを行動に移していくことが大切かなと思いました。ちがいを認め合い、前向きに、明るい未来のために頑張らなくてはとすごく思いました。ありがとうございました。支援が必要な子にとっていいことは、他の子にとってもすごくいいこと。この発想を大切にしていこうと思います。
- 様々な立場の方のお話を聞くことができ、大変参考になりました。子どもたちの抱える様々な問題に対して、教師あるいは両親から、子ども個人への「点」の支援ではなく、地域との連携や幼・保～中の連携等、幅のある支援が必要なのだと感じました。
- 外国籍児童や日本国籍を持っても家庭での環境が外国文化であつたりする子どもについて現在働いている託児所でも何人かの子どもが、親が外国人である状況がある。子どもによって状況は様々だが、家庭で使用されているのが母語であるという状況であつたり、母親の日本語がカタコトであつたり、故郷である国へ子どもを連れて数カ月帰ってしまうこともあるので、小学校への進学であつたりに不安を覚える。長野に日本語教室がある小学校が4校のみという現実を変えていかなければ、今後対応できなくなっていくのではないかと感じた。とても参考になりました。参加して良かったです。ありがとうございました。

〇〇〇二一ズ調査の実施 取組報告書 〇〇〇

担当部会・部門：FD・SD部会、地域連携部会
取組担当者：鈴木俊太郎

1. 事業名

ニーズ調査の実施

2. 事業の目的

①需要サイド調査

FD・SD部会が中心となり、幼稚園・保育園等、保育者等を需要する側において求められる保育者や教育者像を明らかにする。また、当該の調査を通じて保育者や教育者に求められる能力や資質、知識や技能を明らかにすることによって、学生教育において注力すべき項目をも把握する。

初年度は地域を限定して本調査のためのプレリサーチを実施し、地域の保育・教育関係機関がどのような人材を求めているのか、本調査にあたっての調査項目の確定に有用な基礎的データを得た。次年度は保育者や小学校教員の需要サイド（保育所、幼稚園および小学校等の両大学の卒業生の就職先等）に対し、どのような保育者・小学校教員を求めるか、また保育者・小学校教員に修得しておくことが期待される能力および知識等についての調査を実施し、卒業生が就職する先においての調査を実施することによって、両大学が育成した保育者・小学校教員が現場のニーズにいかに対応し、またどのような課題があるのかが明確となった。最終年度は前年度から実施してきた需要サイド調査において回収した調査票の分析を行った。

②保護者を対象とするニーズ調査

地域連携部会が中心となり、保護者がどのような保育や教育、およびそれらを含む子育て支援を求めているのかというニーズに関する調査を行う。保護者が保育者・小学校教員および地域の子育て支援に対してどのようなニーズを有しているかを調査する。これにより、保護者の観点から求められる保育者・小学校教員像を明らかにすることができる。また、当該の調査を通じて保育者や教育者に求められる能力や資質、知識や技能が明らかとなり、学生教育において注力すべき項目を把握することもできる。

初年度は乳幼児から小学生までの子どもを持つ保護者が保育・教育に対してどのようなニーズを持っているのかを明らかにするため、保護者を対象とする調査のプレリサーチを実施し、本調査にあたっての調査項目の確定に有用な基礎的データを得た。次年度は前年度から実施してきた保護者調査において回収した調査票の分析を行った。最終年度は前年度から実施してきたニーズ調査において回収した調査票の分析を行った。

③需要サイド調査及び保護者調査の結果について、地域に報告書を提出

FD・SD部会および地域連携部会においてとりまとめた需要サイド調査ならびに保護者調査の調査結果を報告書にまとめ、地域の関係諸機関に配布・報告する。

保育者等の需要サイドに対する調査の結果と保護者に対しての調査結果を分析し報告することを通じて、当該の地域に求められる保育者等のニーズとはどのようなもので、そのために大学はどのような人材を育成し、行政をはじめとする地域の各機関はどのような取り組みを行う必要があるのか、過去に行政機関が行った調査の結果とも照合したうえで、その認識を共有することができる。

また、よりよい学生教育を行うための資料とするため、上記の調査結果を、両大学の教職員間にも併せて還元する。

3. 事業の概要と成果

平成21年度

- ①11月に、信州大学教育学部教育課程委員会と連携して、長野県内小・中・特別支援学校長対象の調査を実施し、採用側における信州大学教育学部卒業生および信州大学教育学部に対する意識調査を行った。この調査結果に基づいて、養成課程におけるこれからの学生の指導事項、とりわけ教育実習において身につけさせる事項についての検討が可能となった。
- ②保護者を対象とするニーズ調査のプレリサーチについては、信州大学側においては実施していない。

平成22年度

- ①平成22年11月から平成23年2月にかけて、上田市内の公立・私立の保育園・幼稚園において、園長をはじめとする職員を対象に、卒業生の需要サイドのニーズ調査を行った。実施にあたっては、上田市担当部署の協力のもと、保護者へのニーズ調査とも連動させたかたちをとった。また、得られた回答をもとに、より焦点を絞った次段階の調査に向け分析をすすめた。この地域における卒業生の需要サイドのニーズ調査により、学生が就職先の保育・教育現場で求められる諸要素を析出するための基礎データが得られた。
- ②平成22年11月から平成23年2月にかけて、上田市内の公立・私立の保育園・幼稚園において、保護者を対象に、調査票を用いた意識調査を行った。実施にあたっては⑬と同様、上田市の了承・協力を得たうえ、同取り組みと同時並行的にすすめた。また、分析をもとに問題をより焦点化させた次段階調査の準備を整えた。また、調査票を用いた意識調査により、保護者が保育者や教員および地域の子育て支援に対してどのようなニーズを有しているかを把握する基礎データが得られた。

平成23年度

第一次調査の結果をもとに第二次調査票を作成し、第二次調査を実施した。基礎調査である第一次調査は、公立・私立の幼稚園、保育園に通う子どもを持つ保護者を対象とした調査であったが、第二次調査を実施するにあたっては、幼稚園・保育園等に勤務する幼稚園教諭、保育士等に対する調査と比較・分析を実施した。また、第二次調査においては、上田市の保育者養成に関わる教員（上田女子短期大学幼児教育学科の教員を中心とする）に対しても同様に調査し、保護者、保育者側、養成者側のそれぞれの観点から、保育者のニーズがどのように異なってくるのかの分析を行った。これらの調査結果をニーズ調査報告書として発行し、関係諸機関および幼稚園関係者に配布した。

(7) 自己点検評価・外部評価の実施

〇〇〇自己点検評価・外部評価の実施 取組報告書 〇〇〇

担当部会・部門：常任委員会実施本部長

取組担当者：小川 史

1. 事業名

自己点検評価・外部評価の実施

2. 事業の目的

実施した事業を総括し、年度末に自己点検評価を実施することによって事業の進捗状況を確認し、確実な実施を図るための基礎資料を得、その課題を踏まえることによって次年度の事業をより合理的に展開することができる。

また、外部評価委員会を開催し総括的評価を受ける。第三者評価を通じて、その成果をより客観的に把握し、(補助期間終了後の)次年度以降の課題を把握することが可能となる。

3. 事業の概要と成果

自己点検評価・外部評価委員会の実施

外部評価委員会は信州大学全学教育機構長、信州大学産学官連携推進本部推薦批評者の村上好成氏、上田市副市長の石黒豊氏、名古屋経済大学准教授の伊藤博美氏の3名からなる専門家によって構成されている。

【概要】

平成21年度

平成20年3月に代表校の各部会部会長による自己点検評価を共有した。これにより、本年度に実施した事業の進捗状況を確認し、学生の教育上の成果に結びつけるための基礎資料とすることができた。

平成22年度

平成22年5月20日(木)常任委員会において平成21年度の自己点検評価に基づく総括と進捗状況の確認を行った。

平成23年3月16日(水)上田女子短期大学において外部評価を実施した。その際、補助事業開始から平成22年8月までの取り組みを総括・自己点検し、中間報告書としてまとめ、外部評価の資料とした。

本年度に実施した事業の自己点検評価および専門家によって構成された外部評価委員会による総括的評価を実施したことにより、事業の進捗状況を確認し、確実な実施を図るための資料を得た。

平成23年度

平成23年7月4日(月)運営委員会において平成22年度の自己点検評価に基づく総括と進捗状況の確認を行った。

平成24年3月13日(火)上田女子短期大学において外部評価を実施した。その際、補助事業開始から最終年度までの取り組みを総括・自己点検し、最終報告書としてまとめ、外部評価の資料とした。

平成24年3月に代表校の部会長による自己点検評価を共有した。3年間の事業の自己点検評価を実施し、事業の成果を把握することによって、補助期間終了後の取り組みの方針を改めて策定し、また、第三者評価を通じて、その成果をより客観的に把握し、(補助期間終了後の)次年度以降の課題を把握することができた。

【成果】

各年度の自己評価および2年目の外部評価委員会での成果に加え、最終年度に実施した外部評価委員会では以下の成果があげられた。

平成24年3月13日（火）に実施した外部評価委員会によって本事業の趣旨・目的に照らした3つの観点(1)平成21年～23年の事業の実施状況、(2)平成21年～23年の事業の成果、(3)平成24年度以降の計画から評価がなされた。

- (1) 平成21年～23年の事業の実施状況については、全外部評価委員から申請時の計画との整合性、大学間や地域諸機関との連携、健全な経費の執行、その他総合的な観点から大変良好であるとの評価を得た。

具体的には、短期大学と4年制大学の大学間の共同作業においてカリキュラムの違いといった目に見えない部分での困難を乗り越えて成果を出した点、両大学間において2年半という短期間で事業を計画・遂行した点、さらにそのひとつひとつの取り組みが真摯になされていたという点が高く評価された。また、FD・SD部会と地域連携部会が共同でまとめたニーズ調査報告書は、上田市のニーズを踏まえ、地方私立短大の存在意義を示すものにつながると評価された。

- (2) 平成21年～23年の事業の成果については、連携による効果、高等教育の充実、地域への貢献といった点において非常にあがっている（2名）、あがっている（1名）と評価された。

具体的には、両大学の連携が緊密に図られていること、目に見える成果のみならず今後、時間がたってからも成果が現われると確信されるとの点が高く評価された。

- (3) 平成24年度以降の計画については全員から事業開始当初からの継続性や目標の実現可能性といった観点から、適切であると評価された。

4. 今後の課題

単位互換、相互乗り入れ授業について系統的なアプローチについて指摘があり、それについて両大学ともに検討、対処していく必要がある。

補助期間終了後も連携のための人的配置、事業の継続実施が期待されている。また、将来的展望として本GPの事業が地域の大学の連携のモデルとなるような教育プログラム構築、地域への還元といった期待に応えていくことが求められている。

Ⅴ 会議等開催記録

「大学間連携GP」による主な会議記録は下記の通りである。

【平成21年度】

	開催日	活動記録	開催・訪問場所	部会名
1	H21. 9 .10	第1回運営委員会	上田女子短期大学	運営委員会
2	H21.10.28	第1回常任委員会	信州大学教育学部	常任委員会
3	H21.12. 4	第1回FD・SD部会	上田女子短期大学	FD・SD部会
4	H22. 2 .17	第1回教材・カリキュラム開発部会	テレビ会議システム接続	教材カリキュラム開発部会
5	H22. 3 . 8	第1回地域連携部会	テレビ会議システム接続	地域連携部会

【平成22年度】

	活動日	活動記録	開催・訪問場所	部会名
1	H22. 5 .20	第1回常任委員会	テレビ会議システム接続	常任委員会
2	H22. 7 .30	第1回地域連携部会	上田女子短期大学	地域連携部会
3	H22. 9 .24	第1回運営委員会	テレビ会議システム接続	運営委員会
4	H23. 3 .17	第1回外部評価委員会	上田女子短期大学	運営委員会

【平成23年度】

	活動日	活動記録	開催・訪問場所	部会名
1	H23. 5 .12	第1回FD・SD部会	テレビ会議システム接続	FD・SD部会
2	H23. 6 .16	第1回常任委員会	テレビ会議システム接続	常任委員会
3	H23. 7 . 4	第1回運営委員会	テレビ会議システム接続	運営委員会
4	H23. 7 . 7	第1回地域連携部会（FD・SD部会合同部会）	テレビ会議システム接続	地域連携部会
5	H23. 9 .12	第2回FD・SD部会	上田女子短期大学	FD・SD部会
6	H24. 1 .24	学生の実習に関する評価基準検討会議	上田女子短期大学	教材カリキュラム開発部会
7	H24. 1 .24	幼・保・小連携共同モデル・コア・カリキュラムの検討会議	上田女子短期大学	教材カリキュラム開発部会
8	H24. 1 .26	第2回運営委員会	テレビ会議システム接続	運営委員会
9	H24. 3 .13	第2回外部評価委員会	上田女子短期大学	運営委員会

⑥ 出張一覧

1. 「大学間連携GP」による国内出張の主な記録は下記の通りである。

【平成21年度】

氏名	大学名	職名・身分（当時）	出張日	用務先	用務
山口 美和	上田女子短期大学	幼児教育学科 専任講師	H21.11.7	信州大学松本キャンパス	高等教育コンソーシアム信州 第1回FDフォーラム
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	〃	〃	
山口 美和	上田女子短期大学	幼児教育学科 専任講師	H21.11.28	メトロポリタン長野	大学院GP国際フォーラム
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	〃	〃	
小池 浩子	信州大学	言語教育講座 准教授	H21.12.4～ H21.12.6	東京外国語大学	第3回多文化協働実践研究 全国フォーラム
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	H21.12.11～ H21.12.13	山形大学	山形大学FDシンポジウム
谷塚 光典	信州大学	教育実践総合センター 准教授	H21.12.18～ H21.12.19	京都外国語大学	日本教育工学会平成21年度 第3回研究会
山口 美和	上田女子短期大学	幼児教育学科 専任講師	H22.1.7～ H22.1.8	東京ビッグサイト	平成21年度大学教育改革 プログラム合同フォーラム
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	〃	〃	
笹井 弘	上田女子短期大学	幼児教育学科 教授	H22.1.8	〃	
谷塚 光典	信州大学	教育実践総合センター 准教授	H22.1.7	〃	
村松 浩幸	信州大学	生活科学教育講座 准教授	H22.1.30	コラボ産学官 in TOKYO	第14回日本知財学会知財 教育分科会
小川 史	上田女子短期大学	幼児教育学科 准教授	H22.2.10	山梨学院大学附属小学校	山梨の統合的な授業実践に おける調査・情報収集
山口 美和	上田女子短期大学	幼児教育学科 専任講師	H22.2.9～ H22.2.10	〃	
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	〃	〃	
徳井 厚子	信州大学	言語教育講座 准教授	H22.2.10	〃	
谷塚 光典	信州大学	教育実践総合センター 准教授	H22.2.18～ H22.2.19	東京学芸大学	第76回国立大学教育実践研究 関連センター協議会
佐藤 厚	上田女子短期大学	総合文化学科 准教授	H22.2.25～ H22.2.26	郡山敬愛幼稚園・彩都敬 愛幼稚園	幼児教育の先進事例を 学ぶための視察
市東 賢二	上田女子短期大学	幼児教育学科 准教授	H22.2.25～ H22.2.27	〃	
山口 美和	上田女子短期大学	幼児教育学科 専任講師	〃	〃	
平澤 節子	上田女子短期大学	幼児教育学科 専任講師	〃	〃	
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	〃	〃	
佐藤 利佳子	上田女子短期大学	幼児教育学科 助手	〃	〃	
中山 裕一郎	信州大学	芸術教育講座 教授	H22.3.1～ H22.3.2	(福)さくら会さくらんぼ 保育園	幼児教育の先進事例を学ぶた めの視察
藤田 英樹	信州大学	芸術教育講座 准教授	〃	〃	
山口 美和	上田女子短期大学	幼児教育学科 専任講師	H22.3.3～ H22.3.4	三重大学	PBL教育視察・聞き取り調査
山口 恒夫	信州大学	教育科学講座 教授	〃	〃	
村松 浩幸	信州大学	生活科学教育講座 准教授	〃	三重大学・名古屋大学	三重大PBL取り組み、名古屋 大フィンランドの幼児教育研究 (PBL教育視察)
安達 仁美	信州大学	教育科学講座 助教	〃	〃	
谷塚 光典	信州大学	教育実践総合センター 准教授	H22.3.5～ H22.3.6	広島大学	日本教育工学会研究会
谷塚 光典	信州大学	教育実践総合センター 准教授	H22.3.15～ H22.3.16	熊本大学	第3回熊本大学 eポートフォリオ研究会
天岩 静子	信州大学	教育科学講座 教授	H22.3.25～ H22.3.29	神戸国際会議場	日本発達心理学会第21回大会

【平成22年度】

氏名	大学名	職名・身分（当時）	出張日	用務先	用務
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	H22. 6. 25～ H22. 6. 26	東北文教大学	東北文教大学短期大学部 GPフォーラム
谷塚 光典	信州大学	教育実践総合センター 准教授	H22. 8. 26～ H22. 8. 29	北海道大学	教育システム情報学会 (JSiSE) 第35回全国大会
天岩 静子	信州大学	教育科学講座 教授	H22. 8. 26～ H22. 8. 30	早稲田大学	日本教育心理学会 第52回総会
小川 史	上田女子短期大学	幼児教育学科 准教授	H22. 9. 3～ H22. 9. 5	京都大学	第13回臨床教育人間学会 カンファレンス
市東 賢二	上田女子短期大学	幼児教育学科 准教授	〃	〃	
山口 美和	上田女子短期大学	幼児教育学科 専任講師	〃	〃	
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	〃	〃	
山口 恒夫	信州大学	教育科学講座 教授	〃	〃	
高柳 充利	信州大学	教育学部 助教（GP）	〃	〃	
高柳 充利	信州大学	教育学部 助教（GP）	H22. 9. 19～ H22. 9. 20	日本大学	教育思想史学会第20回大会
天岩 静子	信州大学	教育科学講座 教授	H22. 9. 19～ H22. 9. 23	大阪大学	日本心理学会第74回大会
谷塚 光典	信州大学	教育実践総合センター 准教授	H22. 12. 17～ H22. 12. 19	大分大学	日本教育工学会研究会
高柳 充利	信州大学	教育学部 助教（GP）	H22. 12. 19～ H22. 12. 20	社会福祉法人バット博士 記念ホーム	児童養護施設への視察
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	H23. 1. 22	信州大学松本キャンパス	高等教育コンソーシアム信州 第3回FDフォーラム
山口 美和	上田女子短期大学	幼児教育学科 専任講師	H23. 1. 24～ H23. 1. 25	秋葉原コンベンション ホール他周辺会場	平成22年度大学教育改革 プログラム合同フォーラム
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	〃	〃	
橋詰 聡美	上田女子短期大学	戦略GP担当 事務補佐員	H23. 1. 24	〃	
谷塚 光典	信州大学	教育実践総合センター 准教授	H23. 1. 24～ H23. 1. 25	〃	
高柳 充利	信州大学	教育学部 助教（GP）	〃	〃	
天岩 静子	信州大学	教育科学講座 教授	参集なし	東京学芸大学	第22回日本発達心理学会
山口 美和	上田女子短期大学	幼児教育学科 専任講師	H23. 1. 29	瀬戸市立長根小学校 瀬戸市立西陵小学校	卒業生インタビュー調査
山口 恒夫	信州大学	教育科学講座 教授	〃	〃	
高柳 充利	信州大学	教育学部 助教（GP）	〃	〃	
山口 美和	上田女子短期大学	幼児教育学科 専任講師	H23. 2. 12	福知山市立修斉小学校	
山口 恒夫	信州大学	教育科学講座 教授	〃	〃	

【平成23年度】

氏名	大学名	職名・身分（当時）	出張日	用務先	用務
小川 史	上田女子短期大学	幼児教育学科 准教授	H23. 9. 6～ H23. 9. 8	富山県民会館 富山国際会議場	全国保育士養成協議会 セミナー
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	H23. 9. 8～ H23. 9. 9	富山県民会館 富山国際会議場	全国保育士養成協議会 第50回研究大会
安達 佳与子	信州大学	教育学部 専門職員（GP）	〃	〃	
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	H23. 9. 10	武庫川女子大学	フランス教育学会
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	H23. 9. 14	信州大学松本キャンパス	高等教育コンソーシアム信州 第5回FDフォーラム
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	H23. 10. 27～ H23. 10. 29	ラマダホテル大阪	The Asian Conference on Education 2011（第3回 教育に関するアジア会議）
安達 佳与子	信州大学	教育学部 専門職員（GP）	〃	〃	
高柳 充利	信州大学	教育科学講座 助教	H23. 10. 27～ H23. 10. 30	〃	

氏名	大学名	職名・身分（当時）	出張日	用務先	用務
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	H23.11.11	東北大学	教育著作権セミナー
谷塚 光典	信州大学	教育実践総合センター 准教授	H23.11.21	秋葉原UDX Gallery, Gallery Next	e-Learning Awards フォーラム2011
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	H23.12.3～ H23.12.4	東京成徳大学	日本乳幼児教育学会
長槽 涼子	上田女子短期大学	幼児教育学科 専任講師	〃	〃	
谷塚 光典	信州大学	教育実践総合センター 准教授	H23.12.3～ H23.12.5	熊本学園大学	高等教育コンソーシアム熊本 「教員の資質向上と研修の在り方を探る」シンポジウム
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	H23.12.7～ H23.12.10	福岡国際会議場	大学ICT推進協議会
谷塚 光典	信州大学	教育実践総合センター 准教授	H23.12.10	法政大学市ヶ谷キャンパス	法政大学第7回FDフォーラム
谷塚 光典	信州大学	教育実践総合センター 准教授	H23.12.11	学術総合センター	平成23年度日本教職大学院 協会シンポジウム
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	H23.12.16～ H23.12.18	山口県立大学	戦略GP成果報告会
谷塚 光典	信州大学	教育実践総合センター 准教授	H23.12.18	学術総合センター	日本教育大学第3回全国国立 大学附属学校研究協議会
谷塚 光典	信州大学	教育実践総合センター 准教授	H23.12.19	熊本大学	情報収集
谷塚 光典	信州大学	教育実践総合センター 准教授	H23.12.22	IBM SPSS恵比寿 プライムスクエアタワー	IBM SPSS講座 「テキストマイニングとデータの 解析」受講
谷塚 光典	信州大学	教育実践総合センター 准教授	H24.1.6	東北大学	教育関係共同利用拠点提供 PDプログラム
高柳 充利	信州大学	教育科学講座 助教	H24.2.15～ H24.2.19	教育ネットワーク旭川サ テライトキャンパス北海 道大学産学連携本部ほか	大学間連携・地域連携・保幼 小連携聴き取り調査
市東 賢二	上田女子短期大学	幼児教育学科 准教授	H24.2.26～ H24.2.27	関西学院 聖和幼稚園	幼児教育の先進事例を学ぶ ための視察
島崎 あかね	上田女子短期大学	幼児教育学科 准教授	〃	〃	
平澤 節子	上田女子短期大学	幼児教育学科 専任講師	〃	〃	
長槽 涼子	上田女子短期大学	幼児教育学科 専任講師	〃	〃	
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	〃	〃	
佐藤 利佳子	上田女子短期大学	幼児教育学科 助手	〃	〃	

2. 「大学間連携GP」による海外出張の主な記録は下記の通りである。

【平成22年度】

氏名	大学名	職名・身分（当時）	出張日	用務先	用務
小川 史	上田女子短期大学	幼児教育学科 准教授	H22.9.8～ H22.9.16	ノルウェー・フランス	北欧の教育実践調査・視察
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	〃	〃	
大原 明美	信州大学	生活科学教育講座 助教	H22.9.7～ H22.9.18	ノルウェー	
高柳 充利	信州大学	教育学部 助教（GP）	H22.9.8～ H22.9.16	ノルウェー・フランス	

【平成23年度】

氏名	大学名	職名・身分（当時）	出張日	用務先	用務
橋本 一雄	上田女子短期大学	幼児教育学科 助教	H23.4.1～ H23.4.4	オックスフォード （イギリス）	英国教育哲学会
高柳 充利	信州大学	教育科学講座 助教	H23.4.1～ H23.4.3	〃	

活動記録

「大学間連携GP」による主な活動記録は下記の通りである。

【平成21年度】

	活動日	活動記録	開催・訪問場所	部会名
1	H21.8.20	園公開参加の見学	上田女子短期大学附属幼稚園	教材カリキュラム開発部会
2	H21.9.3	教員による実習相互参観	上田女子短期大学附属幼稚園	教材カリキュラム開発部会
3	H21.9.4	教員による実習相互参観	信州大学教育学部附属幼稚園	教材カリキュラム開発部会
4	H21.9.7	教員による実習相互参観	信州大学教育学部附属幼稚園	教材カリキュラム開発部会
5	H21.10.24	公開研究会の見学	信州大学教育学部附属松本小学校 幼稚園	教材カリキュラム開発部会
6	H21.11	長野県内小・中・特支学校長を対象とする採用側意識調査		FD・SD部会
7	H22.1.28 -3.1	「保育のニーズ」「保護者の意向」を把握する調査結果分析	上田市	地域連携部会
8	H22.2.18	第1回 FD・SD合同学習会	上田女子短期大学 (テレビ会議システム接続)	FD・SD部会
9	H22.3.9	第1回 学生フォーラム	上田高砂殿	FD・SD部会
10	H22.3.17	保育園長を対象とする卒業生の需要サイドニーズ調査	上田女子短期大学	FD・SD部会

【平成22年度】

	活動日	活動記録	開催・訪問場所	部会名
1	H22.6.2	どんぐり広場 (子育て広場への学生参加)	上田女子短期大学	地域連携部会
2	H22.6.27	卒業生インタビュー調査 (ホームカミングデー)	上田女子短期大学	FD・SD部会
3	H22.7.4	わくわくファミリーフェスタ (地域の子育て支援現場見学・参加)	ひとまちげんき・ 健康プラザうえだ	地域連携部会
4	H22.7.14	どんぐり広場 (子育て広場への学生参加)	上田女子短期大学	地域連携部会
5	H22.7.21	第2回 FD・SD合同学習会	信州大学教育学部 (テレビ会議システム接続)	FD・SD部会
6	H22.8.7 -10	信州大学主催 幼児キャンプ教室	長野市戸隠キャンプ場 (戸隠牧場)	地域連携部会
7	H22.8.24	学生による実習相互参観	信州大学教育学部附属長野小学校	教材カリキュラム開発部会
8	H22.9.6	卒業生インタビュー調査	信州大学教育学部附属幼稚園	FD・SD部会
9	H22.9.10	卒業生インタビュー調査	根羽村立根羽小学校	FD・SD部会
10	H22.9.10	学生による実習相互参観	信州大学教育学部附属幼稚園 松本小学校	教材カリキュラム開発部会
11	H22.10.8	学生による実習相互参観	上田女子短期大学附属幼稚園	教材カリキュラム開発部会
12	H22.10.24	上田女子短期大学主催 第1回リカレント教育講座	上田女子短期大学	地域連携部会

	活動日	活動記録	開催・訪問場所	部会名
13	H22.11-12	上田市における保育者養成ニーズ調査 (1次調査)	上田市	FD・SD部会 地域連携部会
14	H22.12.11	子育て支援シンポジウム	ホテルJALシティ長野	地域連携部会
15	H23.1.29	卒業生インタビュー調査	瀬戸市立長根小学校 瀬戸市立西陵小学校(愛知県)	FD・SD部会
16	H23.2.12	卒業生インタビュー調査	福知山市立修育小学校 (京都府)	FD・SD部会

【平成23年度】

	活動日	活動記録	開催・訪問場所	部会名
1	H23.5.10	第3回 FD・SD合同学習会	上田女子短期大学 (テレビ会議システム接続)	FD・SD部会
2	H23.6.21	幼稚園相互参観	上田女子短期大学附属幼稚園	教材カリキュラム開発部会
3	H23.6.23	第4回 FD・SD合同学習会：木育プレワーク ショップ	信州大学教育学部 (テレビ会議システム接続)	FD・SD部会
4	H23.7.5	幼稚園相互参観	上田女子短期大学附属幼稚園	教材カリキュラム開発部会
5	H23.7.6	どんぐり広場 (子育て広場への学生参加)	上田女子短期大学	地域連携部会
6	H23.8.13 -16	信州大学主催 幼児キャンプ教室	長野市戸隠キャンプ場	地域連携部会
7	H23.8-9	上田市における保育者養成ニーズ調査 (2次調査)	上田市	FD・SD部会 地域連携部会
8	H23.10.15	第4回 FD・SD合同学習会：木育ワーク ショップ	上田女子短期大学	FD・SD部会
9	H23.10.30	わくわくファミリーフェスタ (地域の子育て支援現場見学・参加)	ひとまちげんき・ 健康プラザうえだ	地域連携部会
10	H23.12.2	虹のかけはし視察	上田市立南小学校 上田市立東小学校	地域連携部会
11	H23.12.7	幼稚園相互参観	上田女子短期大学附属幼稚園	教材カリキュラム開発部会
12	H23.12.15	幼稚園相互参観	上田女子短期大学附属幼稚園	教材カリキュラム開発部会
13	H24.1.19	幼稚園相互参観	上田女子短期大学附属幼稚園	教材カリキュラム開発部会
14	H24.2	ニーズ調査報告書の作成・地域への提出	上田女子短期大学 信州大学	FD・SD部会 地域連携部会

平成 21 年度 文部科学省 大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム選定事業

乳幼児期から小学校までの育ちを見通す
地域人材の育成システム

「信州モデル」の実現

Shinshu
University



Ueda Women's
Junior College

上田女子短期大学
信 州 大 学

地域の子どもの育ちを支える保育・教育の専門家育成をめざして

連携取り組みの目的

この取り組みでは、保育者（＝幼稚園教諭・保育士）の養成校である上田女子短期大学と、小学校教員の養成課程を有する信州大学教育学部とが連携して共同教育プログラムを構築することにより、乳幼児期から小学校までの育ちを見通し、現代的課題に対応しつつ、地域における個別教育支援を担うことができる保育者と小学校教員を育成することを目的としています。

このプログラムの背景

近年、家庭生活の変化・多様化により、子育てや教育をめぐる現代社会特有の問題が顕在化しています。

とりわけ、対人関係がうまく築けない高機能自閉症やLD、ADHD等発達障害の子ども増加や、両親が外国籍または本人が帰国子女であるために言語・文化的コンフリクトの問題を抱える子どもの増加は、保育・教育現場においても大きな課題となっています。

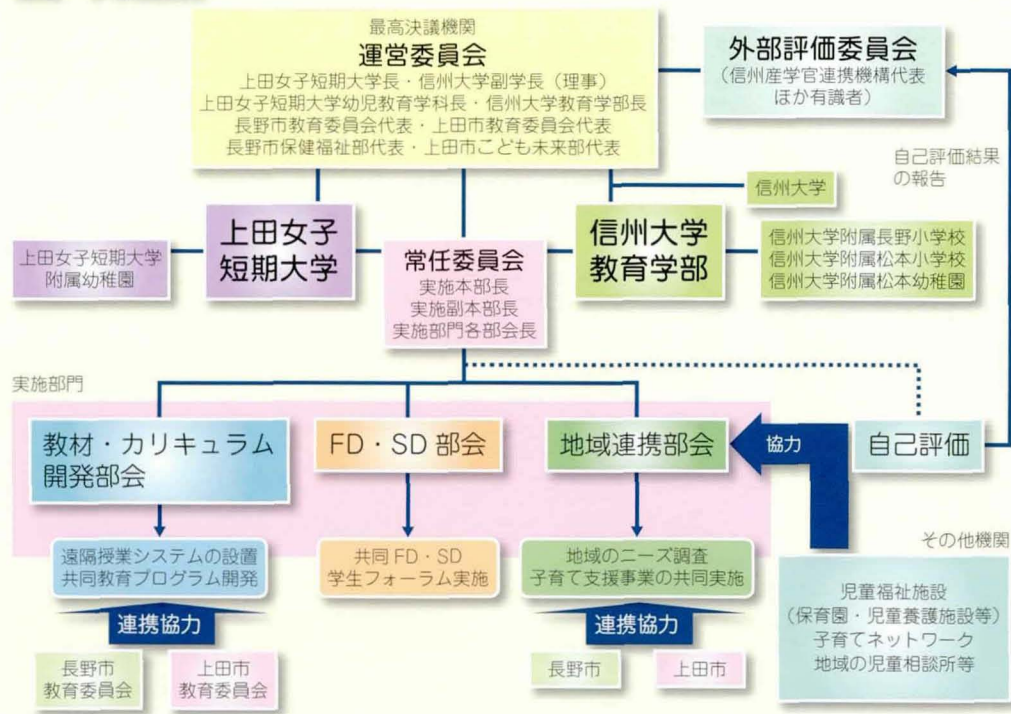
こうした困難を抱える子どもたちに

とっては、集団生活への適応が大きな壁となっており、地域で育つ子どもの教育を継続的に保障するためには、家庭から保育所・幼稚園への就園、保育所・幼稚園から小学校就学への接続がスムーズに行われる体制を整えることが重要です。

私たちの取り組みは、こうした現代社会の動向を踏まえ、特に地域の保育・教育を担う人材の育成のあり方に焦点を絞り、その質の向上をめざして実施するものです。

事業の実施体制

組織・事業概念図





学校法人 北野学園
上田女子短期大学

上田女子短期大学は、「敬愛」「勤勉」「聡明」の三つの教育理念に基づき、幼児教育学科、総合文化学科の2学科において、地域に根ざした女子教育を行ってきました。幼児教育学科では、質の高い幼稚園教諭及び保育士の養成を主たる目的として、理論に裏づけられた技術の修得に力を入れるとともに、建学の精神にのっとり、人間性あふれた教養人としての資質を育成することを目標としています。

上田女子短期大学は、保育者養成課程を有する東信地域唯一の高等教育機関であり、地域の保育者養成を一手に担ってきた歴史を有しています。第一期の卒業生は地域の幼稚園、保育所の長を担う世代となっており、地域の保育現場とも日頃から深い信頼関係を築いています。地元で広く愛され、地域の発展とともに歩んできた短期大学です。

幼児教育学科は、2年間の学びを通して、子どもと関心を共有しつつ自分自身の関心をも深めてゆける保育者、子どもを取り巻く困難な状況を広い視野をもって捉えることのできる保育者、子どもの表現の意味深さを知り、表現行為を保育の中で具体化できる保育者に成長してほしいと願って、カリキュラムを構成しています。

上田女子短期大学が目指すべき大学像は、これまでの歴史を踏まえつつ、多様化する地域・家庭のニーズに応答し、時代に即した人材を育成することにあります。これまでに築いてきた地域との緊密な連携実績のもと、本プログラムによる信州大学教育学部との連携により、乳幼児期の子どもへの援助ばかりでなく、小学校での生活や学習の状況を理解し、地域における家庭支援の役割を積極的に果たせる保育者を育成できる教育体制を確立することを目指します。



信州大学
SHINSHU UNIVERSITY

信州大学は、長野県における唯一の8学部を有する国立大学法人の総合大学であり、地域に根ざした研究・教育を展開しています。信州大学は、松本、長野、伊那、上田の4地域にキャンパスを展開し、各キャンパスの学部・大学院が長野県の各地域の教育、地域生活、産業と密接な関係を持ちながら研究・教育・地域貢献を行なっているという特性を有しています。

信州大学は、「ビジョン2015」（平成20年策定）において、「オンリーワンの魅力あふれる地域拠点大学」をめざして、

1. 未来の社会を展望した有為な人材教育の実践
2. 地域に根ざし世界に拓く研究拠点の形成
3. 豊かな地域社会の創造に向けての協働と貢献
4. 社会環境の変化に柔軟に対応する大学経営の推進

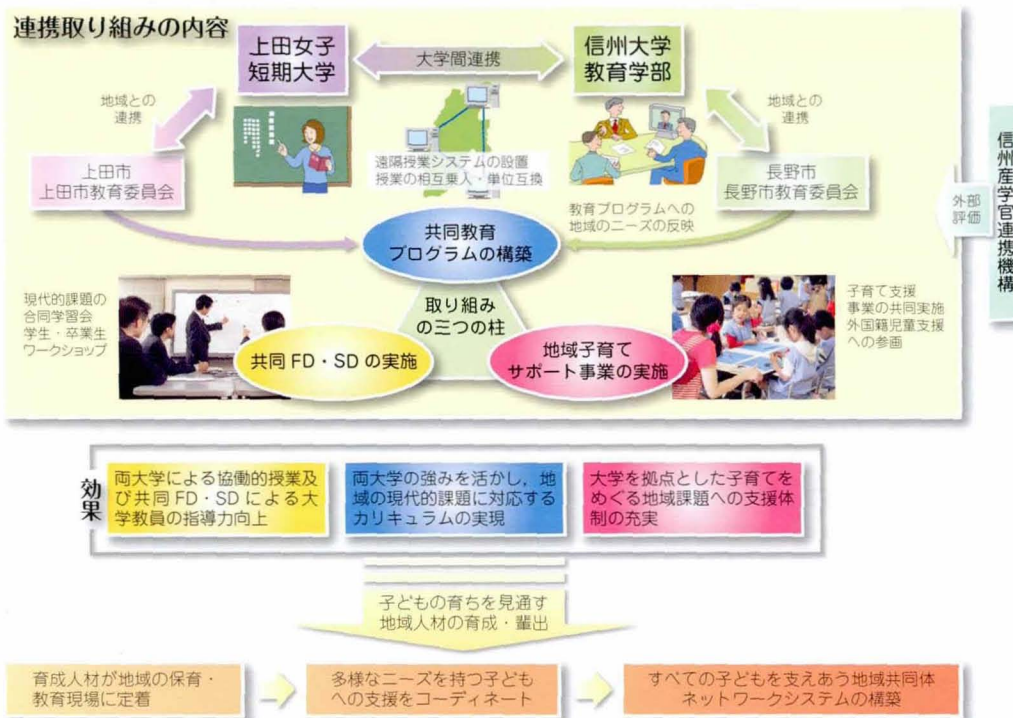
に取り組むことを宣言しています。

本プログラムに主体的に関わる信州大学教育学部は、一貫して長野県の教員養成に携わり、多くの初等教育及び中等教育教員を輩出してきました。近年では、「臨床の知」を教育理念として、体系的な臨床経験科目群を提供することにより、高い実践的指導力と専門性に基づく臨床的判断力を有する教育専門職者を育成している点で、全国的に注目されています。

教育学部が目指すべき大学像は、「ビジョン2015」を踏まえつつ、また本プログラムにより構築される上田女子短期大学等との連携により、長野県の各地域の特性に基づく子育てと教育に関する現代的な課題に対応でき、地域の諸資源を活用しつつ支援をコーディネートできる専門的力量を持った教員を養成できる教育体制を構築することです。



事業の概要



「戦略 GP」とは

「戦略 GP」とは、文部科学省が選定する「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」のことで、国公立大学間の積極的な連携を推進し、各大学における教育研究資源を有効活用することにより、当該地域の知の拠点として教育研究水準のさらなる高度化、個性・特色の明確化、大学運営基盤の強化等とともに、地域と一体となった人材育成の推進を図ることを目的として推進されてきたプログラムです。

上田女子短期大学と信州大学は、この「戦略 GP」の取り組みとして、両大学が連携して行う「乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム『信州モデル』の実現」を目指すプログラムを申請し、平成 21 年度のプログラムとして採択されました。

事業の三つの柱

この事業における取り組みは次の三つの柱から成ります。

乳幼児期から小学校段階までの育ちを見通した教育プログラムの構築

第一の柱

現代の保育・教育の専門家には、子どもの成長に伴い、子どもが家庭から保育所・幼稚園、小学校へと教育を受ける施設が移行していても、成長のプロセスを見通すまなざしをもち、子どもの育ちを滑らかにつなげることができる力量が求められています。

このプログラムの第一の柱では、上田女子短期大学幼児教育学科と信州大学教育学部がそれぞれの強みを活かし、連携して共同の教育プログラムを構築します。これにより、地域特有の現代的課題に対応するためのカリキュラムを実現し、子どもの一貫した教育を支える教師・保育者を育成します。

- 単位互換制度の構築
- 遠隔授業システムを利用した授業の相互乗入、チーム・ティーチング、合同ケース・メソッド授業等の実践
- 教育実習の相互参観及び実習リフレクション方法の共同開発・実施
- 現代的課題を含むケース教材及びPBL授業等の共同開発・実施
- 保・幼・小連携を見据えたモデル・コア・カリキュラムの検討

第二の柱

学生の学びを支える共同FD・SD

これまで、地域の幼稚園教諭や保育士を養成する短期大学と、主として小学校以上の教員を養成する大学とは、ともに子どもの育ちに関わる高等教育機関でありながら接点がなく、お互いのカリキュラムや実習のあり方についての相互理解が不十分でした。

このプログラムの第二の柱では、両大学の教員及び職員が協働してFD・SDに取り組みます。これにより、両大学の教員による協働的な授業実践など、学生の学びを保証する質の高い大学教育を実現します。また、地域の課題を取り入れたPBLやケース・メソッドなど先進的で独創的な教育に取り組みます。

- 保育・教育現場における現代的課題への対応事例の合同学習会の開催
- 現職保育者・教員を対象としたワークショップの開催
- 卒業生の需要サイドを対象としたニーズ・満足度調査
- 両大学の学生による共同フォーラム・シンポジウムの開催

第三の柱

大学の資源を活かした地域子育てサポート事業の実施

外国籍児童や発達障害児など、生活上の困難を有する子どもが抱える教育的課題を理解するためには、地域で育つ子どもたちの実態を知ることが必要です。

このプログラムの第三の柱では、これまで上田女子短期大学と信州大学でそれぞれ行なわれてきた子育て支援及び地域貢献事業の枠組みを拡大し、大学の資源を活かした子育てサポート事業を実施します。

これにより、大学を拠点とした地域の子どもへの幅広い支援体制を構築するとともに、地域の子育て支援事業や外国籍児童の支援教室との連携を図ります。また支援事業を学生の教育とリンクさせ、卒業までに教育の専門家として具体的な地域の課題に応えることのできる力量形成をめざします。

- 地域の保護者を対象としたニーズ調査・満足度調査の実施
- 地域子育て支援事業への見学・参加・支援
- 両大学における地域貢献事業(子育て広場、フレンドシップ事業、野外キャンプ等)の共同実施
- 自治体及び地域の児童福祉・保健・医療関係機関等によるフォーラム、シンポジウムの開催
- 外国籍児童のための日本語教室等との連携、活動への共同参画
- 心理教育相談室との連携による相談事業の実施

2 WEBサイトトップページ

平成23年度 文部科学省 大学教育充実のための戦略的連携支援プログラム選定事業


乳幼児期から小学校までの育ちを見通す
地域人材の育成システム「信州モデル」の実現

[ホーム](#) | [サイトマップ](#) | [お問い合わせ](#)

[概要](#) | [目指すもの](#) | [三つの柱](#) | [実施体制](#) | [活動記録](#) | [資料](#) | [お問い合わせ](#)


Ueda Women's Junior College
Shinshu University
地域の子どもの育ちを支える保育・教育の専門家育成をめざして

ようこそ！

このサイトでは、平成21年度に文部科学省に採択された大学教育充実のための戦略的連携支援プログラム選定事業「乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム『信州モデル』の実現」に関する情報を掲載しています。
この事業で行っている取り組みやその成果はもとより、上田女子短期大学と信州大学との連携事業の様子を幅広く発信して行きたいと思っています。

活動記録

- **2011-11-8**
 - ACE2011国際学会において学会発表を行ないました。
- **2011-11-1**
 - 地域の子育て支援イベント「わくわくファミリーフェスタ」に参加しました。
- **2011-10-17**
 - 第4回FD・SD合同学習会「木のおもちゃを作ろう！」を開催しました。
- **2011-10-13**
 - 平成23年度の授業の相互乗り入れの実施について
- **2011-9-13**
 - 全国保育士養成協議会第50回研究大会でポスター発表を行いました
- **2011-8-17**
 - 平成23年度信州大学公開講座「幼児キャンプ教室」参加報告
- **2011-7-13**
 - 地域に向けた子育て支援広場「どんぐり広場」を開催しました。
- **2011-6-23**
 - 第4回FD・SD合同学習会のための木育プレワークショップを開催しました。
- **2011-6-19**
 - 上田女子短期大学幼児教育学科卒業生のワークショップを開催しました。
- **2011-5-10**
 - 第3回FD・SD合同学習会を開催しました。

概要

目指すもの

三つの柱

実施体制

活動記録

資料

大学教育充実のための戦略的連携支援プログラムとは

乳幼児期から小学校段階までの育ちを見通した教育プログラムの構築

学生の学びを支える協同FD・SD

大学の資源を生かした地域子育てサポート事業の実施

連携機関・自治体

長野市

上田市

長野市教育委員会

上田市教育委員会

信州産学官連携機構

構成大学

上田女子短期大学

信州大学

ログイン

ユーザ名:

パスワード:

[パスワード紛失](#)

[新規登録](#)

Powered by XOOPS Cube 2.0 © 2005-2006 The XOOPS Project

幼児教育学科を持つ上田女子短大(上田市)と、信大教育学部(長野市)は、乳幼児期から小学校段階までの保育・教育に携わる人材育成で連携することになり10日、同短大で開いた第1回運営委員会で本年度事業の実施計画を確認した。

委員長には連携を持ち掛けた上田女子短大の松田幸子学長を選出。同短大の小川史・幼児教育学科准教授によると、発達障害や外国籍児童の増加で、幼稚園、保

保育・教育 人材育成で連携

上田女子短大と信大

園と小学校のスムーズな連携が一層求められている。今後、双方の教員が教育実習を互いに参観したり、合同学習会を開いたりする。今年中にモニターによる遠隔授業システムも導入、学生が連携相手校の授業を受けられるようにし、来年度以降には単位交換を始める。

両校の連携は文部科学省の「戦略的大学連携支援プログラム」に採択され、本年度から2011年度まで補助金を受ける。

H21.9.11(金)

信濃毎日新聞掲載記事

保・幼・小連携に基づく支援 保育者や教員育成へ

上田女短と信大の事業採択

上田女子短期大学と信州大学が文部科学省に申請した「乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム『信州モデル』の実現」事業がこのほど、今年度の大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラムに採択された。

近年、集団生活への適応が難しい発達障害児や外国籍児童などが増加していることから、保・幼・小連携に基づく支援ができる保育者や小学校教員の育成を目指す。事業は共同の教育プログラム構築、共同FD・SD、地域子育てサポート事業の



3つの柱からなり、上田女子短期大学(松田幸子学長)、信州大学(小宮山淳学長)、長野市、上田市、信州産業官連携機構が連携して取り組む。

10日には関係者21人が参加して第1回運営委員会を開き【写真】、運営委員長に松田・上田女子短大学長、副委員長に藤沢謙一郎・信大副学長が就任。常任委員会の実施本部長には小川史・上田女子短大准教授が就いた。

今年度の補助事業費は約2055万円。今年度はオンライン遠隔授業システムの試験的使用や両大学の教員による合同学習会、両大学学生フォーラム開催などを予定している。

H21.9.12(土)

東信ジャーナル掲載記事

上田市で初の学生フォーラム「実習を語ろう」

上田女短・信大・長大ら5校から60人参加

8グループに分かれワークショップも…

学生たちが実習体験を話し合う、第1回学生フォーラム「実習を語ろう」が9日、上田市天神の高砂殿で開かれた。

文科省の「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」の採択を受けた、上田女子短

期大学幼児教育学科と信州大学教育学部の連携事業「幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材育成システム『信州モデル』の実現」の一環。職種の違いを実習を語り合うフォーラムは初めてだ。フォーラムには両大学・

短大に加え、文化女子大学、長野専門学校、看護専門学校、長野大学、看護専門学校、豆の木」を上演した。

は真剣に耳を傾けた。すべての発表を終えて学生らは、「理想の実習を提案しよう」と8グループに分かれてワークショップ、活発に意見交換した。参加した職員らは「職種や実習場所、期間、形態の違い実習の様子を、学生らは聞く機会がない。また教師にも参考になり、自分たちの授業に活かしていくことができる」と話していた。



手遊びを披露する上田女短の学生ら

短大に加え、文化女子大学、長野専門学校、看護専門学校、長野大学、看護専門学校、豆の木」を上演した。また同じテーマで文化女子大長野専門学校保育科の戸谷幸恵さんが、看護学実習を長野看護学校第1看護学科の中村汐梨さんと今井夕貴さんが、社会福祉専門職に関して長大会福祉学部の岩木麻実さんが、学校教諭になるための実習内容を信大教育学部の小島一生さんがそれぞれ発表。参加者

H22.3.11(木)
信州民報掲載記事



上田女短

情報交換や「どんぐり広場」開設
交流の場に
「子育て連携支援活動」として定着！

母親の話を聞いたり子どもたちと遊ぶ学生

上田市と上田女子短期大学（小池明学長）は14日、同短大キャンパスで恒例の「どんぐり広場」を開催した。幼児教育学科の専門性を生かした地域貢献で、市の子育て連携支援活動として定着している。

この日は同短大の幼児教育学科2年生・40人が授業の一環として臨んだ。入園前の幼児とその保護者27組・約60人が参加し、子どもたちは母親から離れて学生手づくりの遊具やおもちゃで遊んだり、母親と一緒にブランコに乗ったりと、思い思いに遊びを楽しんでいた。同短大では「自由に楽しみ、触れ合えるように特別なプログラムを用意していないので、気軽に足を運んでもらえる。参加者も多く、同年齢の子どもを持つ母親にとっても、情報交換や交流の場になっている」とし、「学生にとっては、子育て中の母親から学ぶことも多い」と話した。

参加した学生は「保護者の生の声が聞けるし、幼稚園児と違う幼児と触れ合えるので勉強になる」と語る。同短大はこのほど、文部科学省の大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム選定事業として「乳幼児期から小学校までの育ちを見通す、地域人材の育成システム 信州モデル」の実現を目指し、信州大学教育学部と連携。この日は信大教育学部大学院生2人も参加した。

信大の高柳充利准教授は、「小学校教員の養成を目指しているが、入学前の子どもたちの様子を肌で体験することも欠かせない。小さな子どもたちが成長し、小学校に入学するという育ちを実感できる機会だ」とし、「こういう支援策は、上田市が地域で子どもを育てようという気運があるからこそ、出来ることなのではないか」と話した。

長野市民新聞

第2229号

12月16日(木)

長野市民新聞社

編集制作センター

〒380-0943

長野市安茂里1029-1

フリーダイヤル

0120-06-5511

TEL 223-5511

FAX 223-5500

shinim@avis.ne.jp

©長野市民新聞社 2010

長野市安茂里1029-1

〒380-0943

フリーダイヤル

0120-06-5511

TEL 223-5511

FAX 223-5500

shinim@avis.ne.jp

©長野市民新聞社 2010

発達障害 子育て地域支援を 外国籍



子育て支援の人材育成を考えたシンポジウム

信大と上田女子短 連携事業の一環 教師らシンポ

発達障害や外国籍などさまざまな問題を抱える子供について考えるシンポジウムが11日、ホテルJALシティ長野であった。教師や行政の関係者ら約60人が参加し、パネルディスカッションを通じて子育て支援について考えた。

信大教育学部と上田女子短大が昨年度から進めている連携事業乳幼児期から小学校までの育ちを見直す地域人材の育成システム「信州モデル」の実現の一環として初めて開催。同事業は、近年増加傾向にある発達障害や外国籍など困難を抱える子供への教育中心に、

信大教育学部と上田女子短大が昨年度から進めている連携事業乳幼児期から小学校までの育ちを見直す地域人材の育成システム「信州モデル」の実現の一環として初めて開催。同事業は、近年増加傾向にある発達障害や外国籍など困難を抱える子供への教育中心に、

H22.12.16(木)

長野市民新聞掲載記事

発達障害児らの 子育て支援探る

上田女子短大 信大教育学部
長野でシンポ

上田女子短大教育学部（信大）と信大教育学部（長野市）は11日、子育て支援をテーマにしたシンポジウムを長野市内で開いた。両者が連携して進めている乳幼児期から小学校段階までの保育・教育に携わる人材育成の事業の一環。医師や保育関係者による事例報告とパネル討論を通じ、発達障害のある子や外国籍児童らを教育現場や地域がどう支えていくかについて考えた。

教育関係者や学生ら約60人が参加。長野市ながしよ保育園長の青沼美恵子さん（57）は、周囲と協調するのが苦手な子への接し方をめぐり、保護者と保育士の方針がうまく合わなかった事例を紹介した。

子育て支援をテーマに開いたシンポジウム



パネル討論では、長野市民病院小児科部長の青沼幸彦さん（54）が「発達障害の子の保護者が、親族から『養育不足のせいだ』などと言われる

現状がある」とし、周囲の理解を深める取り組みが必要だと指摘。上田市主任児童委員部会長の宮下元さん（58）は「保護者が相談しやすいよう、行政の窓口を一本化するべきだ」と話した。

会場からは「将来先生を目指す学生に、地域で子育ての実践を学ばせよう」との要望があった。連携事業は文部科学省の補助を受けて昨年度から取り組んでいる。双方の教員が学習会を開くなどしており、今後は単位互換も考えた。

H22.12.12(日)

信濃毎日新聞掲載記事

④ 实施体制名簿

運営会委員名簿

平成21年度

所属・役職	氏 名
上田女子短期大学学長	松田 幸子
信州大学副学長	藤沢 謙一郎
上田女子短期大学幼児教育学科長代行	笹井 弘
信州大学教育学部長	岩永 恭雄
長野市保健福祉部保育家庭支援課長	滝澤 清
上田市こども未来部保育課長	足立 則男
長野市教育委員会学校教育課長	市川 専一郎
上田市教育委員会学校教育課長	中村 栄孝

平成22年度

所属・役職	氏 名
上田女子短期大学学長	小池 明
信州大学副学長	赤羽 貞幸
上田女子短期大学幼児教育学科長	笹井 弘
信州大学教育学部長	平野 吉直
長野市保健福祉部保育家庭支援課長	金子 善美
上田市こども未来部保育課長	滝沢 正美
長野市教育委員会学校教育課長	市川 専一郎
上田市教育委員会学校教育課長	中村 栄孝

平成23年度

所属・役職	氏 名
上田女子短期大学学長	小池 明
信州大学副学長	赤羽 貞幸
上田女子短期大学幼児教育学科長	笹井 弘
信州大学教育学部長	平野 吉直
長野市保健福祉部保育家庭支援課長	金子 善美
上田市こども未来部保育課長	滝沢 正美
長野市教育委員会学校教育課長	藤沢 孝司
上田市教育委員会学校教育課長	中村 栄孝

各部会所属教員等名簿

○は部会長を示す

平成24年3月現在

役職	氏 名	所属（職階）
常任委員会 実施本部長	小川 史	上田女子短期大学・准教授
副本部長	中山裕一郎	信州大学教育学部・教授
教材・カリキュラム 開発部会	○山口美和 小川 史 長櫓涼子（平成23年度） 塚原拓馬（平成21、22年度）	上田女子短期大学・准教授 同 ・ 准教授 同 ・ 専任講師 同 ・ 専任講師
	○谷塚光典 中山裕一郎 安達仁美 大原明美（平成22、23年度） 天岩静子（平成21、22年度） 藤田英樹（平成21年度）	信州大学教育学部・准教授 同 ・ 教授 同 ・ 助教 同 ・ 助教 同 ・ 教授 同 ・ 准教授
FD・SD部会	○笹井 弘 兎束淑美（平成23年度） 長田真紀 浜野兼一 小野智明	上田女子短期大学・教授 同 ・ 教授 同 ・ 教授 同 ・ 専任講師 同 ・ 専任講師
	○村松浩幸（部会長は23年度より） 島田英昭 高柳充利（平成23年度） ○山口恒夫（平成21、22年度）	信州大学教育学部・准教授 同 ・ 准教授 同 ・ 助教 同 ・ 教授
地域連携部会	○市東賢二 島崎あかね 平澤節子	上田女子短期大学・准教授 同 ・ 准教授 同 ・ 専任講師
	○小池浩子 越智康詞 平野吉直 徳井厚子 鈴木俊太郎	信州大学教育学部・准教授 同 ・ 教授 同 ・ 教授 同 ・ 准教授 同 ・ 准教授
戦略GP連携 コーディネータ	橋本一雄	上田女子短期大学・助教
	安達佳与子（平成23年度） 高柳充利（平成21、22年度）	信州大学教育学部・専門職員（GP） 同 ・ 助教（GP）
戦略GP 事務責任者	塚田穂敬	上田女子短期大学・教務課長
	小野英二（平成23年度） 東條誠司（平成21、22年度）	信州大学教育学部・学務係長 信州大学教育学部・学務係長
戦略GP 事務補佐員	橋詰聡美	上田女子短期大学・事務補佐員
	藤原友紀子	信州大学教育学部・事務補佐員

おわりに

実施本部長 小川 史

上田女子短期大学幼児教育学科と信州大学教育学部が連携して進めてきましたプロジェクト「乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム「信州モデル」の実現」も、2012年3月でひとまずの節目を迎えることとなりました。固よりこれは、次の段階のより充実した事業に向けてさらなる飛躍を目指してゆくところのひとつの区切りにすぎません。

私たちはこのプロジェクトを始めるにあたって、「信州モデル」の実現を目標に掲げました。「信州モデル」——この言葉には、信州の地で蓄積された経験・討議・実践のエッセンスを全国に向けて発信するという、遠大な願望が込められております。信州の地で共に教員養成・保育者養成に携わる者同士が、互いの良さを吸収しあいながら、地域に固有の課題を見つめ、取り組んでゆき、その固有性をとことんまで追究したのちに生まれる人材育成システム。その実現に向けて乗り越えてゆかなければならないハードルは、もちろんまだまだあります。けれども、そうしたハードルを両校が協力して乗り越えてゆくことは、新たな発見を伴う喜びに満ちた過程でもあります。もしかしたら、将来できあがるであろう、まとまった形としての「モデル」以上に、模索しながら一步一步踏み出してゆくプロセス、その軌跡こそ、われわれが発信できる「モデル」なのかもしれません。

最後になりましたが、本事業に関係するすべての方々に、心から感謝の言葉を申し上げます。

あ と が き

本書は、平成21年度からスタートしたGP事業の3年間にわたる活動の報告である。

「乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の育成システム『信州モデル』の実現」をテーマにした取り組みは、保育者養成課程を有する上田女子短期大学と幼稚園、特別支援学校、小学校そして中学校といった附属学校を擁する信州大学教育学部の連携事業として取り組まれてきた。取り組みの柱は、①乳幼児期から小学校段階までの育ちを見通した教育プログラムの構築 ②学生の学びを支える共同FD・SD ③大学の資源を活かした地域子育てサポート事業の実施の3点にあった。1人1人の子どもの育成に、父母、地域、校種をこえた学校と教師たち、そして教員養成機関までもを含み、それぞれが互いに協働し、理解を共有し、手を携えあいながら取り組む。そして、そのために必要で有用な人材を育成しようという、考えてみれば壮大な構想に基づいた連携研究事業であった。だが、まさにここにこそ、本GP事業の独自性と意味とがあるように思う。1人1人の子どもの成長は、連続的であり、さまざまな環境や条件、さまざまな情報や出会いの集積から成り立っていること。そして、それを支えるのはすぐれた人材だからである。

本書は、3年間の活動のほぼすべてを網羅している。「教材・カリキュラム開発部会」、「FD・SD部会」、「地域連携部会」の各部会毎の活動記録を中心に、先進事例を学ぶための国内外の機関への視察、フォーラムや学習会、実施した調査研究の記録或いは報告などを記載している。

GP事業はこの平成23年度で一応1つの区切りを迎えたが、連携する両大学間の取り決めにより、可能な部分の研究は今後も継続されることになっている。

この報告書が、連携した2つの大学、そして他の教育・研究機関だけでなく、関連する地域社会にフィードバックされ、有効に活用されることを願ってやまない。同時に、このGP事業を契機とした2つの大学間の教育・研究そして人的交流が、これからも益々深まることを期待している。

最後に、本GP事業推進にあたり、県及び市町村教育委員会及び地域の多くの方々のご協力をいただいた。それらの各機関そしてお1人お1人の方々に対し、この場をお借りし、深く御礼申し上げます。

2012年3月

「乳幼児期から小学校までの育ちを見通す地域人材の
育成システム『信州モデル』の実現」

副本部長 中山 裕一郎（信州大学教育学部副学部長）

平成21年度文部科学省大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム選定事業

乳幼児期から小学校までの育ちを見通す
地域人材の育成システム「信州モデル」の実現
最終報告書

平成24年3月21日発行

編集・発行

上田女子短期大学 GP推進室

〒386-1214

長野県上田市下之郷乙620

TEL: 0268-38-2352

FAX: 0268-38-7315

信州大学長野(教育)キャンパス GP事務室

〒380-8544

長野県長野市西長野6の口

TEL: 026-238-4037

FAX: 026-238-4019

最終報告書

乳幼児期から小学校までの育ちを見通す
地域人材の育成システム
「信州モデル」の実現

上田女子短期大学 GP推進室

〒386-1214

長野県上田市下之郷乙620

TEL 0268-38-2352

FAX 0268-38-7315

URL <http://www.uedawjc.ac.jp>

信州大学

長野(教育)キャンパス GP事務室

〒380-8544

長野県長野市西長野6の口

TEL 026-238-4037

FAX 026-238-4019

URL <http://shinshu-u.ac.jp/faculty/education>

両大学共通連絡先

E-mail: erinsho-senryaku@shinshu-u.ac.jp

当GPホームページ

URL: <http://edugp.shinshu-u.ac.jp/senryaku/>

連携機関・自治体

長野市

上田市

長野市教育委員会

上田市教育委員会

信州産学官連携機構